

# 小迫遺跡・岡野原遺跡

農山漁村活性化プロジェクト支援交付金（基盤整備）事業  
上田万里地区に係る発掘調査報告書

2013

財団法人 広島県教育事業団



a 空中写真 西から



b 岡野原遺跡 4区SB4出土土器

## 例　言

- 1 本書は、平成23（2011）年度に実施した農山漁村活性化プロジェクト支援交付金（基盤整備）事業上田万里地区に係る小迫遺跡と岡野原遺跡（広島県竹原市田万里町）の発掘調査報告である。
- 2 発掘調査は竹原市との委託契約により、財団法人広島県教育事業団が実施した。
- 3 発掘作業及び出土資料等整理作業は財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室の職員があたり、担当者は次のとおりである。  
発掘調査（平成23年度）川崎真二、曾根　猛、山田繁樹  
整理作業（同上）大田けい子  
整理作業（平成24年度）山田繁樹、有原ひろみ、永田淳子
- 4 本書は、山田が執筆・編集した。
- 5 石器の石材は、考古地質学研究所　柴田喜太郎氏の肉眼観察による。
- 6 本書に使用した遺構の略号は次のとおりである。  
S B；堅穴住居跡、S K；土坑、S D；溝、P；柱穴
- 7 土器の断面については、須恵器は黒塗り、そのほかは白抜きである。
- 8 挿図の遺物番号と図版の遺物番号は同一である。
- 9 第1図は、国土交通省国土地理院発行の1：50,000の地形図「竹原」図幅を使用した。
- 10 本書に使用した北方位は、旧日本測地系平面直角座標第Ⅲ座標系北を使用した。
- 11 記録類及び出土品は、全て広島県立埋蔵文化財センター（広島市西区観音新町四丁目8-49）において保管している。

## 目 次

I はじめに .....	1
II 位置と環境 .....	3
III 調査の概要 .....	7
IV 遺構と遺物	
1. 小迫遺跡 .....	8
2. 岡野原遺跡 .....	13
V まとめ .....	54

## 巻頭挿図目次

a 空中写真 西から      b 岡野原遺跡4区SB4出土土器

## 挿図目次

第1図 周辺主要遺跡分布図 (1 : 50,000) .....	4
第2図 小迫遺跡周辺地形図 (1 : 1,000) .....	9
第3図 小迫遺跡遺構配置図 (1 : 200) .....	10
第4図 SB1実測図 (1 : 60) .....	11
第5図 P1遺物出土状況実測図 (1 : 10) .....	12
第6図 岡野原遺跡周辺地形図 (1 : 1,000) .....	14
第7図 1区遺構配置図 (1 : 250) .....	15
第8図 2区遺構配置図 (1 : 100) .....	16
第9図 2区SK1実測図 (1 : 30) .....	17
第10図 2区SK2実測図 (1 : 60) .....	18

第11図	3区遺構配置図(1:150)	21
第12図	4区西側トレント層図(1:60)	22
第13図	4区遺構配置図(1:200)	折込
第14図	4区SB1・2実測図(1:30, 1:60)	25
第15図	4区SB3実測図(1:60)	26
第16図	4区SB4・6実測図(1:60)	28
第17図	4区SB5実測図(1:60)	29
第18図	4区SK1~3実測図(1:30)	31
第19図	4区SK4実測図(1:30)	32
第20図	4区SD1~4実測図(1:40)	34
第21図	5区遺構配置図(1:250)	36
第22図	小迫遺跡・岡野原遺跡1区内出土遺物実測図(1:3)	37
第23図	岡野原遺跡1区内、2区SK1出土遺物実測図(1:3)	38
第24図	岡野原遺跡2区SK2, 2区内出土遺物実測図(1:3)	39
第25図	岡野原2区内・3区内、4区SB1・2出土遺物実測図(1:3)	40
第26図	岡野原遺跡SB1・2出土遺物実測図(1:3)	41
第27図	岡野原遺跡4区SB1・2・4・6出土遺物実測図(1:3)	42
第28図	岡野原遺跡4区SB6, 4区内、5区内出土遺物実測図(1:1, 1:3)	43
第29図	小迫・岡野原遺跡周辺遺跡分布図(1:10,000)	57

## 表 目 次

第1表	出土土器観察表1	44
第2表	出土土器観察表2	45
第3表	出土土器観察表3	46
第4表	出土土器観察表4	47
第5表	出土土器観察表5	48
第6表	出土土器観察表6	49
第7表	出土土器観察表7	50
第8表	出土土器観察表8	51
第9表	出土土器観察表9	52
第10表	出土石製品・鉄製品観察表	53
第11表	製塩土器出土遺跡一覧表	56

## 図版目次

- |      |                            |      |                        |
|------|----------------------------|------|------------------------|
| 図版 1 | a 完掘後遠景 北東から               | 図版12 | a 4区SB1, 2完掘 西から       |
|      | b 完掘状況 東から                 |      | b 4区SB3土層 南東から         |
|      | c 完掘状況全景 西から               |      | c 4区SB3完掘状況 西から        |
| 図版 2 | a SB1土層 東から                | 図版13 | a 4区SB4土層 東から          |
|      | b SB1完掘状況 北東から             |      | b 4区SB4土層 北から          |
|      | c SB1内土坑完掘状況 西から           |      | c 4区SB4遺物出土状況 西から      |
| 図版 3 | a SB1周辺Pit群完掘状況<br>北東から    | 図版14 | a 4区SB4北壁遺物出土状況<br>南から |
|      | b Pit遺物出土状況 南東から           |      | b 4区SB4遺物出土状況 北から      |
|      | c 試掘トレーンチ土層 南東から           |      | c 4区SB5土層 北西から         |
| 図版 4 | a 1区調査前全景 北西から             | 図版15 | a 4区SB5完掘状況 南から        |
|      | b 1区調査後全景 北西から             |      | b 4区SB6完掘状況 西から        |
|      | c 1区調査後全景 東から              | 図版16 | a 4区SB6カマド横断面<br>南西から  |
| 図版 5 | a 2区SK1土層 南西から             |      | b 4区SB6カマド縦断面 西から      |
|      | b 2区SK1遺物出土状況<br>南東から      |      | c 4区SB6カマド完掘 南西から      |
|      | c 2区SK1完掘状況 南から            | 図版17 | a 4区SK1完掘状況 西から        |
| 図版 6 | a 2区南壁土層 北から               |      | b 4区SK2完掘状況 西から        |
|      | b 2区SK2土層 北西から             |      | c 4区SK3完掘状況 西から        |
|      | c 2区完掘状況全景 南西から            | 図版18 | a 4区SK4集石検出状況 西から      |
| 図版 7 | a 3区完掘状況全景 南西から            |      | b 4区SB4完掘状況 西から        |
|      | b 3区SD1完掘状況 西から            |      | c 4区SD1~3完掘状況 西から      |
| 図版 8 | a 3区SX1土層 南東から             | 図版19 | a 4区完掘状況全景 西から         |
|      | b 3区SX1礫出土状況<br>南西から       |      | b 4区完掘状況全景 東から         |
|      | c 3区SX1完掘 北西から             |      | c 西側調査区北壁土層 南から        |
| 図版 9 | a 4区調査前全景 西から              | 図版20 | a 西側調査区西壁土層 東から        |
|      | b 4区調査前全景 東から              |      | b 5区完掘状況全景 西から         |
|      | c 4区SB1, 2土層 北東から          |      | c 5区完掘状況全景 東から         |
| 図版10 | a 4区SB1, 2遺物出土状況<br>西から    | 図版21 | 出土遺物1                  |
|      | b 4区SB1, 2-P7, 8土層<br>東から  | 図版22 | 出土遺物2                  |
|      | c 4区SB1, 2-P8遺物出土状況<br>南から | 図版23 | 出土遺物3                  |
| 図版11 | a 4区SB1, 2完掘状況 西から         | 図版24 | 出土遺物4                  |
|      | b 4区SB1, 2内SX1土層<br>北東から   | 図版25 | 出土遺物5                  |
|      | c 4区SB1, 2内SX1完掘<br>北東から   | 図版26 | 出土遺物6                  |
|      |                            | 図版27 | 出土遺物7                  |
|      |                            | 図版28 | 出土遺物8                  |

## I はじめに

小迫遺跡・岡野原遺跡の発掘調査は、農山漁村活性化プロジェクト支援交付金（基盤整備）事業上田万里地区に係るものである。

本事業は基盤整備により農用地の集積を行い、農作業の省力化・生産性及び収益性の向上を図ることで地域農業の活性化・担い手の育成を目的としている。

本事業に係って、平成20年8月5日付けで竹原市建設産業部産業文化課長（以下「市」という。）は竹原市建設産業部観光文化室長（竹原市教育委員会から文化財保護の補助執行を受ける。以下、「市文化財担当部局」という。）に対し、同事業予定地内の文化財等の有無及び取扱いについて、協議書を提出した。市文化財担当部局は平成20年8月22日に広島県教育委員会（以下「県教委」という。）と現地踏査を実施し、平成22年4月19日付けで、竹原市教育委員会教育長（以下市教委）から県教委へ事業者宛ての現地踏査回答案の協議を行い、県教委は、平成22年4月27日付けで市教委へ同意の旨を回答した。市教委は、同年4月28日付けで市へ要試掘範囲3箇所を確認したことを回答した。

市文化財担当部局は、県教委と平成22年11月15日～12月16日に試掘調査を実施し、県教委へ平成23年1月11日付けで試掘調査の結果、小迫遺跡（700m<sup>2</sup>）及び岡野原遺跡（10,600m<sup>2</sup>）を確認した旨の回答案について協議を行い、県教委は平成23年1月21日付けで異存のない旨を回答した。市教委は市へ同年1月25日付けで小迫遺跡（700m<sup>2</sup>）及び岡野原遺跡（10,600m<sup>2</sup>）を確認した旨の試掘結果を回答した。

市は、平成23年2月25日付けで文化財保護法第94条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知（以下「土木工事通知」という。）を行い、県教委は平成23年3月3日付けで市に対し、小迫遺跡（400m<sup>2</sup>）及び岡野原遺跡（2,680m<sup>2</sup>）の現状保存が困難な部分の記録保存のための発掘調査と、地下構造に影響を与える可能性がある部分の工事立会が必要である旨を勧告した。

記録保存のための発掘調査については、関係機関で協議した結果、財團法人広島県教育事業団（以下「事業団」という。）が平成23年度に実施することとなった。事業団は、平成23年3月10日付けで、小迫遺跡・岡野原遺跡の文化財保護法第92条第1項に基づく埋蔵文化財の発掘調査届（以下「発掘調査届」という。）を提出し、県教委から平成23年4月7日付けで、「行政目的で行う埋蔵文化財の調査についての標準」（平成16年10月29日 埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会報告）に準じた内容で発掘調査報告書を作成・提出すること、出土品については遺失物法の規定に基づいて取扱うことに留意しながら慎重に発掘調査を実施するよう指示を受けた。

事業団は平成23年4月1日付けで竹原市長と委託契約を締結し、小迫遺跡（400m<sup>2</sup>）・岡野原遺跡（2,640m<sup>2</sup>）の発掘調査を平成23年4月11日から同年7月22日まで実施した。同年6月25日には、市教委と共に現地見学会を開催し、約180名の参加者があった。

岡野原遺跡4区は調査区が民家と接していたことから、調査時に崩落防止の為に調査区から約

2m幅を残して調査を進めた。調査の結果、この部分に住居跡が存在していることから、県教委が平成23年10月24日から同年10月28日に立ち会い調査を実施した。

本報告書は、以上のような経過のもとに行われた発掘調査の成果をまとめたものであり、地域の歴史の一端を知る一助となれば幸いである。

なお、発掘調査及び報告書作成にあたっては、竹原市建設産業部、竹原市教育委員会、田万里公民館、上田万里地区の事業推進組合の方々をはじめとして、地元の方々に多大な御協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

また、発掘期間中には、財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査指導委員の各氏から発掘調査方法や遺跡の評価等に関する貴重な指導・助言を頂いた。小都 隆（元財団法人広島県教育事業団事務局次長兼埋蔵文化財調査室長）、古瀬清秀（広島大学大学院文化研究科教授）、松下正司（比治山大学名誉教授）、藤野次史（広島大学総合博物館埋蔵文化財調査室教授）



遺跡見学会（2011年6月25日）

## II 位置と環境

小迫遺跡は竹原市田万里町字小迫、岡野原遺跡は同字岡野原に所在する。

両遺跡の位置する竹原市は、広島県内における瀬戸内海沿岸部の中央部から東側に位置し、北側から西側で東広島市と東側では三原市に隣接している。市域<sup>(1)</sup>は東西21.2km、南北14.7kmで総面積は118.30km<sup>2</sup>である。市域の中央部を流れる賀茂川は、洞山（標高644.6m）に源を発し途中、田万里川・葛子川などの支流と合流して瀬戸内海に注いでいる。

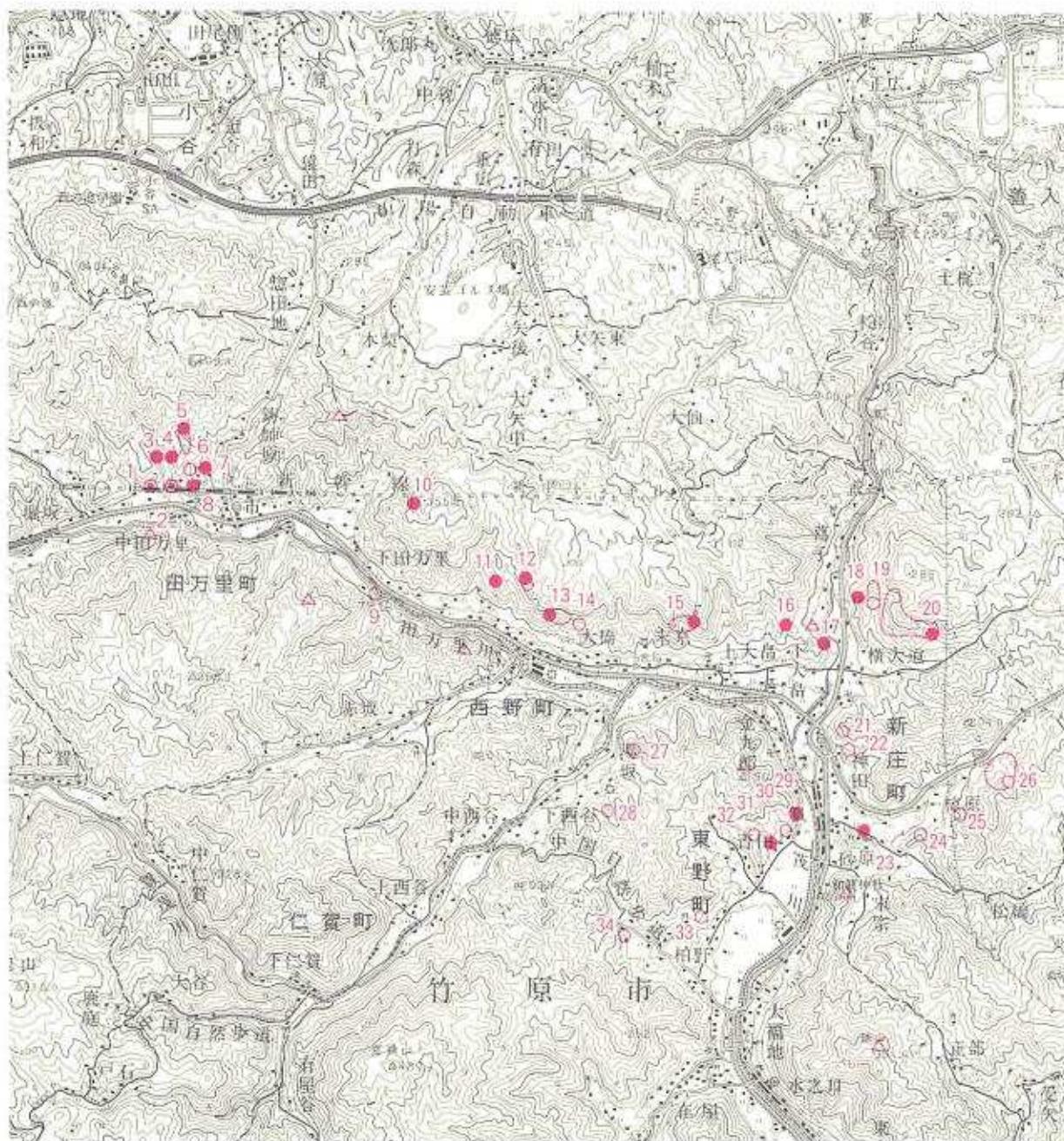
両遺跡は東に流れる田万里川を南に臨む北側山麓の緩やかな斜面上に立地している。眼下には一般国道2号と田万里川の南側は旧山陽道が、背後には山陽新幹線、北側には山陽自動車があり、古くから現在に至るまで重要な交通路であったことが窺える。

両遺跡が位置する田万里・新庄村周辺は、竹原市域内でも多くの遺跡が確認されている地域<sup>(2)</sup>であるが、発掘調査による遺物の出土例は少なく採集によるものがほとんどである。

最も古い遺物として田万里川の上流域にある風呂が迫遺跡<sup>(3)</sup>から縄文時代の安山岩製の石刃・フリント製石鎌が水田耕作土から発見されている。

弥生時代の遺物は、背戸峯遺跡<sup>(4)</sup>から石英玢岩製の石斧刃部が採集されている。太形蛤刃の特徴がみられることから中期頃とされている。また、背戸峯遺跡以外でも貞則遺跡や田万里川の南北に拡がる水田の耕作土から同様の磨製石斧や中・後期土器片が採集されて郷土資料室に保管されている。横大道遺跡<sup>(5)</sup>は賀茂川の支流である葛子川の東側丘陵に位置する横大道古墳群の西側斜面に立地している。斜面地から後期の壺・甕・鉢・高杯などの土器片が採集され、形態的に東広島市内の該当期の形態と同様であることが窺える。賀茂川と葛子川の合流地点から東側の丘陵北側斜面に立地する椋原遺跡<sup>(6)</sup>からは後期の壺・甕などの土器片と土師器の長頸壺が採集されている。鶯の森遺跡<sup>(7)</sup>は横大道第1・2号墳の西側丘陵上に立地しており、発掘調査によって箱式石棺墓4基・土坑1基が確認され、石棺墓群は、1号石棺から壮年女性、2号石棺から熟年男性と壮年男性の2体が、3号石棺から熟年の男性の骨が出土し、4号石棺は小児墓である。2号石棺の2体は同時埋葬ではなく、熟年男性の骨を側石側へ寄せて壮年男性を埋葬している。1号石棺の人骨以外の3体の頭骨部には赤色顔料が付着していた。これらの墳墓の時期は、2号石棺の埋土上層から出土した大型の壺形土器から弥生時代終末～古墳時代初頭に構築されたとしている。

田万里川北側の丘陵上には後期の古墳や古墳群が立地している。岡野原遺跡の背後の丘陵上にも鏡田古墳群<sup>(8)</sup>や鏡田火釜古墳<sup>(9)</sup>がある。鏡田古墳群は南に延びる丘陵上の平坦面を利用して構築されている。13基の箱式石棺が確認され、北側の最高所から順にA群として6基、B群として2基、C群として2基、B群とC群の間に単独の3基で構成している。墳丘は流失していると思われ、石材の構築方法から6世紀代の時期を推定している。鏡田火釜古墳は、現状で全長が約9m、奥壁付近の幅が約1.6m、開口部付近の幅が約1.3m、高さは2m程度の無袖式の横穴石室である。観音古墳<sup>(10)</sup>の埋葬施設は横穴式石室で、昭和21年に周辺を開墾中に長さ約1.06m、



第1図 囲辺主要遺跡分布図 (1 : 50,000)

- 1 小追遺跡 2 岡野原遺跡 3 大釜古墳 4 鐘子谷古墳 5 鏡田古墳群（13基） 6 背戸峠道路 7 鏡田火釜古墳
- 8 観音古墳 9 貞則遺跡 10 後田古墳 11 上坊池古墳 12 大判古墳群（2基） 13 世里木古墳群（2基） 14 水が谷遺跡
- 15 宝器古墳群（2基） 16 横山古墳 17 茅白山古墳 18 葛子古墳 19 鶯の森遺跡 20 横大道古墳群（11基）
- 21 大木神社遺跡 22 岡神田遺跡 23 僧都神社古墳 24 大木古墳 25 植原遺跡 26 勝負山遺跡 27 湯坂遺跡 28 仁賀遺跡
- 29 竹原小早川氏墓地 30 手島屋敷跡 31 青田古墳 32 青田遺跡 33 柏野遺跡 34 坂田遺跡

●は古墳 △は横穴 ○は遺跡 □は中世城跡

刃幅4cmの鉄刀が採集されている。その他、横穴式石室を埋葬施設とする古墳は、後田古墳、大判第1号古墳、世里木古墳群、宝器古墳群などがある。横大道古墳群<sup>(11)</sup>は6世紀後半から7世紀代に築造された当地域最大の古墳群で、11基中7基が横穴式石室である。特に、古墳群中最大規模である片袖式の横穴式石室の第1号古墳からは金銅製の歩搖などが頭蓋骨片に重なるように出土していることから冠の部位であったとしている。また、無袖式の横穴式石室の8号古墳からは銅鏡が出土している。また、賀茂川と葛子川の合流地点から南へ約2km下った西側の丘陵に無袖式の横穴式石室を埋葬施設とする青田古墳がある。この古墳から南へ約50mの地点で須恵質の亀甲形陶棺が採集<sup>(12)</sup>されている。時期は6世紀後半から7世紀初めとされ、横大道第1号古墳出土の金銅製品や第8号古墳出土と銅鏡とともに、被葬者は吉備或いは畿内と何らの関連を持った人物と想定している。

下田万里後田地区で確認されていた横穴墓<sup>(13)</sup>は、県内で最南端に位置することから注目されていたが近年の調査で炭窯であることが確認された。古墳時代の集落跡はこれまで岡野原遺跡の集落が初例であるが遺跡の背後の鎌子谷から須恵器高杯や甕、背戸峯遺跡から土師器などが出<sup>(14)</sup>しており、遺跡の存在が予想される。

横大道古墳群の位置する付近は古代山陽道の都宇駅<sup>(15)</sup>の所在地に推定されているが、次の鹿附（宇鹿）駅（東広島市高屋町）に至る駅路に関しては諸説<sup>(16)</sup>あり、定まっていない。

竹原地域は平安時代後期には、京都の下賀茂社（賀茂御祖社）の荘園となり、後に、都宇・竹原荘と呼ばれるようになる。鎌倉時代には、幕府御家人の小早川氏が地頭として関東から入った。小早川氏はその後、鎌倉から室町時代にかけて在地領主として成長し、「沼田荘」（沼田川流域）、「沼田新荘」（椋梨川流域など）、「都宇・竹原荘」を支配する三家に分かれている。田万里周辺は、室町時代後半期には高屋・平賀氏の所領になり、田万里八幡神社の再建も行っている。戦国時代には、藤ヶ平城跡、胡ヶ丸城跡、末徳師城跡や、西野町の天下城跡、茶臼山城跡などが築かれている。また、新庄町には竹原・小早川家の本拠であった木村城跡があり、また賀茂川を隔てた西岸の東野町には同家の館跡とされる手島屋敷跡がある。<sup>(17)</sup>

（註

- (1) 竹原市「たけはらの環境」平成23年度版 2012年2月
- (2) 広島県教育委員会「広島県遺跡地図VI」（三原市・尾道市・因島市・竹原市・豊田郡）1999年3月  
広島県教育委員会ホームページ「広島県の文化財・広島県遺跡地図」
- (3) 藤田 等・本村豪章『第1章竹原周辺の考古学的考察』「竹原市史」第2巻 論説編 1963（昭和38）年
- (4) 註3と同じ。書中でオオバン神社御神体として報告されている。
- (5) 註3と同じ。
- (6) 註3と同じ。竹原高等学校郷土研究部「古代竹原地方の復元－竹原町新庄・西野・東野を中心にして」  
『竹原地方史研究論集（二）』竹原高等学校郷土研究部編 1956（昭和31）年10月 P 4によると弥生時代後期の土器以外に成年男子と推定される人骨（頭頂部骨・後頭骨・上顎の一部・大臼歯二本・犬歯一本）と片刃石斧、鉄片が採集されている。当時の出土状況は不明とされているが、弥生時代後期の埋葬施設であったと思われる。また、遺物の一部を保管されている賀茂川中学小野悟朗教諭（当時）の案内で、遺物を実見させて頂いたところ、弥生土器以外に土師器片や須恵器片（中期後半頃の高杯片・後期後半頃の杯身・杯蓋片）も同時に採集されており、長期間に亘る遺跡であったことが窺える。

- (7) 竹原市教育委員会「鶴の森遺跡発掘調査報告」1991年3月
- (8) 註3と同じ。昭和38年9月に市史跡に指定されている。
- (9) 註3と同じ。現地で確認した。
- (10) 郷土資料室（旧田万里小学校）に当時の記録とともに保管・展示されている。
- (11) 註3と同じ。脇坂光彦 小都隆「賀茂川流域の遺跡」『日本の古代遺跡 26 広島』保育社 1986年2月  
沢元保夫「交通の要衝に築かれた古墳群 横大道古墳群出土の優れた遺物」『図説 東広島・竹原・呉の歴史』郷土出版社2001年9月では、広島大学の測量調査によって第1・2号古墳は、1墳2石室の全長約30m前方後円墳であることが確実になったとしている。
- (12) 田邊英男「竹原市毘沙門台岩下採取の陶棺」『芸備古墳文化論考』芸備友の会 1985年3月  
註1の遺跡地図には該当する遺跡が不明確なため、本文の第1図に位置を示していない。また、青田古墳を含め3基の古墳で構成されていると報告されている。
- (13) 註3で報告された後、藤田 等「竹原のあけぼの」『竹原市史』第1巻概説編 1972年 32頁に後田山横穴墓として報告がある。是光吉基・向田裕始「横穴墓の地域性 中国(1)一山陽一」『月刊考古学ジャーナルNo.110』1975年、広島県『広島県史』考古編 1979(昭和54)年などで紹介されていたが、脇坂光彦「下田万里の横穴は炭窯」『考古論集—川越哲志先生退官記念論集—』2005年で、地元研究者の太田雅慶・裕子氏が所在地を確認した後、両氏と共に現地において炭窯であることの詳細な報告を行なわれている。
- (14) 註10と同じ。
- (15) 福尾猛市郎「山陽道と駅制」『広島県史 原始・古代』広島県 1980年
- (16) 高橋美久二「第5節 安芸・周防・長門の駅と駅路」『古代交通の考古地理』  
西別府元日「吉備の古代駅路を探る」『第7回安芸のまほろばフォーラム 古代山陽道を探る 資料集』  
東広島市教育委員会 財團法人東広島市教育文化振興事業団 2000年12月
- (17) 郷土出版社『図説 東広島・竹原・呉の歴史』郷土出版社 2001年9月



遺跡周辺の空中写真（田万里町郷土資料室提供）国道2号改修前

### III 調査の概要

小迫遺跡と岡野原遺跡は、賀茂川に合流する田万里川を南に臨む水田に位置している。

小迫遺跡は、試掘調査で確認した遺跡範囲 ( $700\text{m}^2$ ) の内、現状保存が困難な  $400\text{m}^2$  が発掘調査の対象となった。調査区内の耕作土と床土については試掘時のデータを基に重機を使用して慎重に除去作業を行い国土座標に沿って実測用のグリットを設定した後に調査を進めた。

建物跡 1軒と柱穴群を確認した。建物跡 (SB 1) は現地見学会時は弥生時代後期の竪穴住居跡として報告を行ったが、土師質土器が下層から出土していたことから、中世の建物跡であったことが分かった。また、柱穴群も柱穴の 1 基から土師質土器の椀・皿が出土しており、建物跡と同様な時期と考えられる。

岡野原遺跡は、試掘調査で確認した遺跡範囲 ( $10,600\text{m}^2$ ) の内  $2,640\text{m}^2$  が発掘調査の対象となった。調査区内の耕作土と床土及び客土については、小迫遺跡と同様に試掘時のデータを基に重機を使用して慎重に除去作業を行い国土座標に沿って実測用のグリットを設定した後に調査を進めた。

岡野原遺跡は、調査区が 5 個所に分かれていたことから、西側の調査区を北から 1 区～3 区、東側は 4 区・5 区とした。遺構確認面までの掘り下げ作業は、小迫遺跡の作業が終了後に 1 区から 3 区、4 区と 5 区を並行して行った。

1 区は明確な遺構は無く、調査区北側で近世頃と思われる旧水田の段及び調査区中央から東側に向かって傾斜する旧地形の谷を確認した。

2 区は弥生時代後期の土坑を 2 基確認し、SK 2 は貯蔵穴と考えられる。

3 区は近世の溝と集石状の遺構を確認した。

4 区は、竪穴住居跡 6 軒と土坑 4 基、溝 4 条確認した。SB 1・2 は古墳時代前期に SB 6 は古墳時代後期・SB 4 は奈良時代と考えられる。SB 6 は住居跡の隅部から造り付けのカマドがあり、カマド内から 6 世紀前半の須恵器が出土している。竹原市域の初例となるが、広島県内でも古い調査例となった。SB 4 からは製塩土器が 6 個体出土している。この時期の製塩土器は生産地以外では官衙や寺院などから出土する例が多く、近隣では安芸国分寺から同形態の製塩土器が出土している。県内において集落遺跡からの出土は少なく、貴重な資料となった。

5 区は 1 区と同様に明確な遺構は無く、調査区の東西で旧地形の谷の傾斜変換を確認した。

小迫遺跡と岡野原遺跡の間には谷川が、岡野原遺跡の中央には大きな谷地形が存在し、岡野原 4 区・5 区の東側には谷川が存在している。これらの遺構はそれぞれの谷に面した小丘陵に立地しており、丘陵ごとの変遷が窺える。また、当地域が古代山陽道の駅路の候補地の一つであるが、今回の調査では確認できなかった。

## IV 遺構と遺物

### 1 小迫遺跡（第2・3図、図版1a・b・c）

遺跡の東側には、田万里川に合流する谷川を挟んで岡野原遺跡が位置している。調査区の調査前は2枚の水田で、高低差は約60cmで、厚さ20cm程度の耕作土と床土を除去した段階でSB1及び柱穴群を確認できた。調査区の南側は床土の下層に径20~60cm程度の円礫と粘性の強い灰色土の客土により整地されていた。

試掘時の記録では、調査区の中央付近から東側で、溝状遺構・性格不明の落ち込みが確認されていたが、確認面での平面形が不定形な形状であったことから、試掘トレンチ（図版3c）を再度掘り下げるとともに試掘トレンチから北側と南側に小トレンチを設定して掘り下げて確認したところ、遺物の細片を含む浅い包含層であることを確認した。

調査区の北側は、水田の造成によって削平を受けている為に平坦となっている。調査区内の南西部から中央付近が浅い谷状の地形となり、南東部が尾根状になってこの付近から東側の谷川に向かって傾斜している。調査区の最高所は北西部で最も低い谷下位付近との高低差は約1.5mである。確認した遺構は、調査区東側の谷地形の傾斜変換付近に立地している。

### SB1（第4図、図版2a・b・c）

調査区南西隅に位置し、南側に傾斜する変換点に立地している。

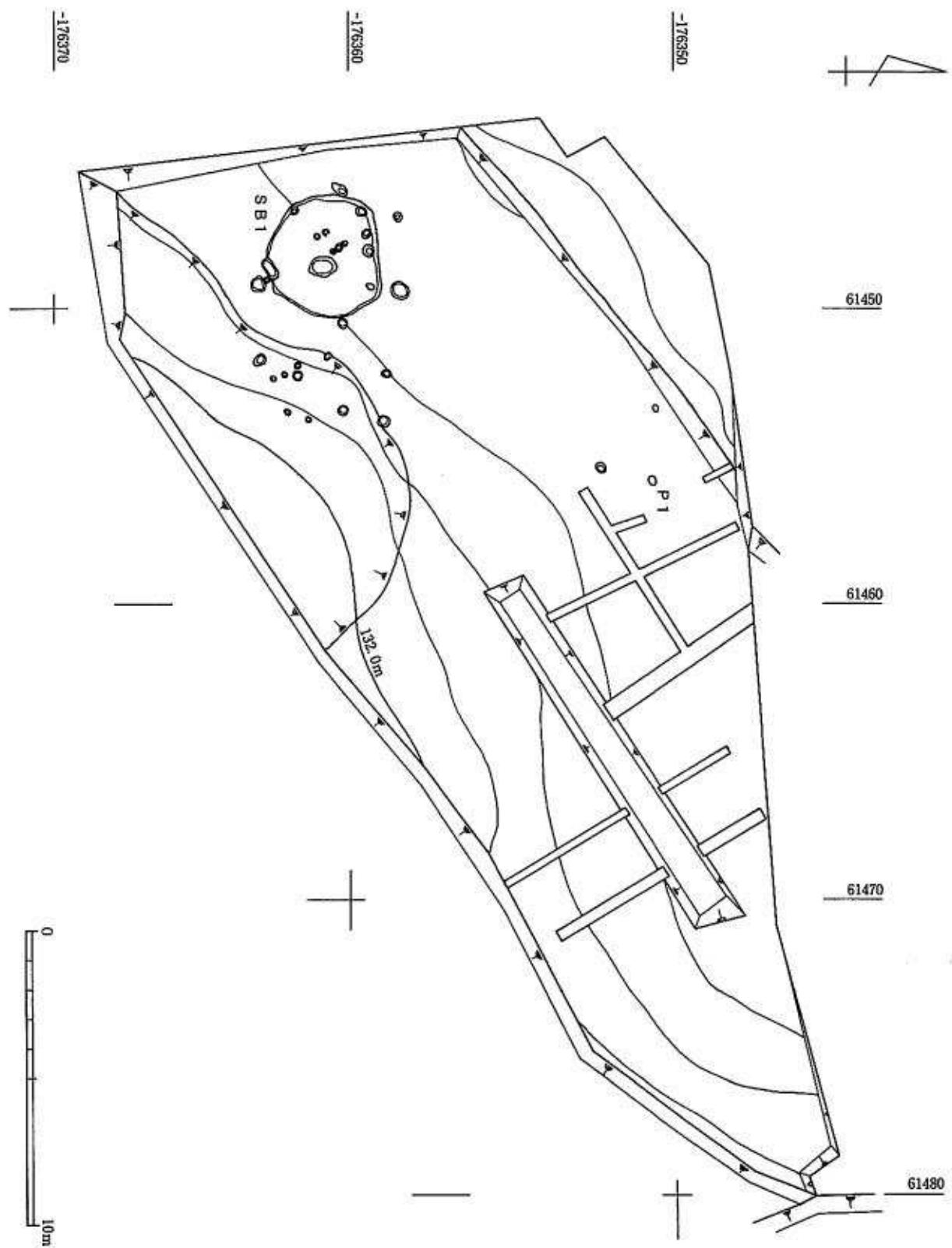
平面形は直径4.1mの円形であるが、北側が東西約2.7mの長さで直線となっている。床面までの深さは、北側で18cm程度、南側で10cm程度である。床はほぼ平坦となっているが、壁溝と整地土は確認できなかった。柱穴や中央の土坑は床面から掘り込まれている。床面の中にある土坑は長径1.0m、短径0.7mの長楕円形で、床面から底までの深さは北側で25cm、南側が11cmである。壁と底面は遺構確認面下層の礫がみられる。土坑の覆土中に焼土などは含まれていないが、土坑の周辺と上層に炭化物を多く含む黒褐色土が広がっていた。柱穴は中央の土坑から北東側に5基、北側の壁際に沿ってP1~P4がみられる。土坑付近の柱穴は、いずれも径が15~20cm、床面からの深さが15cm程度、覆土はにぶい黄褐色土で、位置的にSB1に伴う可能性は低いと考えられる。P1~P4は、いずれも径が30~40cmで床面からの深さは、P1が51cm、P2・3が25cm程度、P4が45cmで東西両側が深くなっている。覆土はP3が黒褐色土以外は全て灰黄褐色土である。

SB1は明確な柱穴を伴っていないことやP1~P4が西側の壁と並行していることから、P1~P4を柱穴とした簡易な作業小屋的な建物であった可能性が考えられる。

遺物は、覆土上層から弥生土器底部（2）・土師器甕（1）が出土している。P2内から土師質土器皿（3）が出土している。



第2図 小追遺跡周辺地形図 (1 : 1,000)



第3図 小道遺跡遺構配置図 (1 : 200)

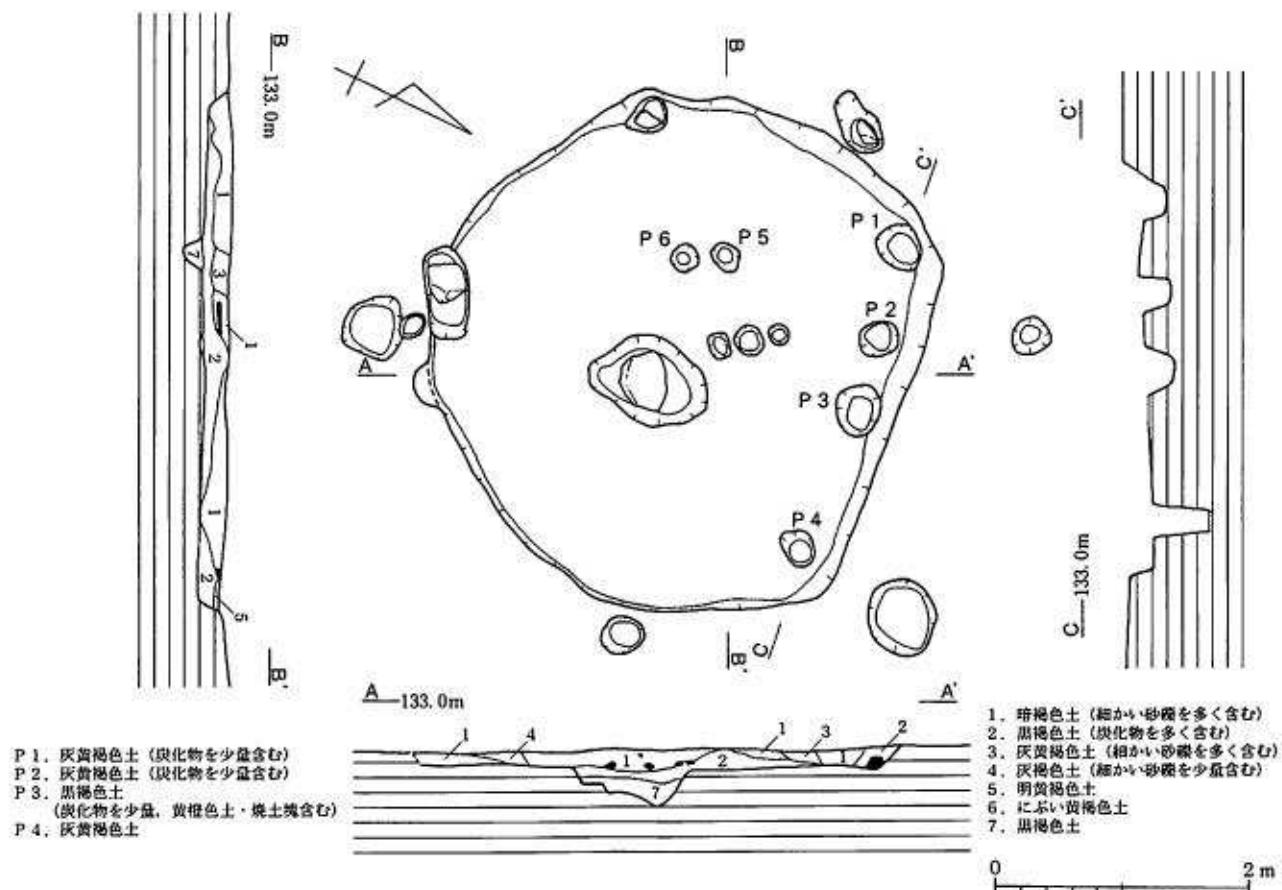
### 出土遺物 (第22図 1~3, 図版21)

1は土師器の壺片で、口縁は頸部から強く外反して短くおさめる。端部はやや丸みを帯び、内面に横方向のハケ目が残る。頸部の外面はやや窪み、凹線状となっている。肩部の器壁は厚く、内面は強いヘラ削りの後に、板状工具による縦方向のナデがヘラ磨き状に残っている。外面は、頸部以下に1mm単位の目の細かい縦方向のハケ目がみられる。2は弥生土器で復元底径が9.4cmであることから大形の壺か甕の底部と思われる。外面は板状工具による縦方向のナデ、内面はヘラ削りが残っている。3はP 2内から出土した土師質土器皿で、底部の切り離しは回転糸切りによる。体部は底部から内湾気味に外反して口縁に到たった後、端部は丸くおさめる。内外面ともに回転ナデにより調整されているが、内外面ともに器表面に稜が残っている。

### 柱穴群 (第3・5図, 図版3a・b)

調査区南西付近と北側中央付近に位置している。南西側の柱穴群はS B 1の南東側傾斜変換点に、北側の柱穴群は平坦地に立地している。

南西側の柱穴群は、径18cm程度と45cm程度の規模に分かれるが、対応関係は不明である。緩やかな斜面地であるため、確認面からの深さは一定でないが、底の高さはほぼ同一の高さとなっている。これらの柱穴の内、調査区北側に位置するP 1は径40cm、確認面からの深さが45cmで、覆



第4図 SB 1 実測図 (1 : 60)

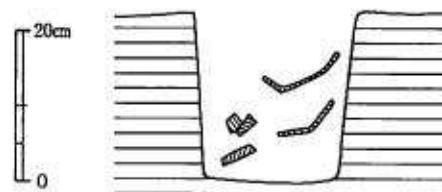
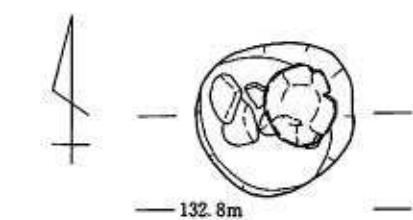
土の中層から土師質土器皿（4）・下層から椀（5）が、幅10cm、厚みが4cmの円碟とともに出土している。2個体とも口縁部を上に向けていていることから、意図的に埋めた可能性が考えられる。P 2の周辺は、他に柱穴が2基あるが並びは明確でない。

#### 出土遺物（第22図4・5、図版21）

4の皿は、ほぼ完形で底部と体部との屈曲部の器壁が厚くなる。底部から外反して、口縁付近で薄くなり端部が丸く終わる。内外面ともに回転ナデで、外面には稜が残る。底部の切り離しは回転糸切りである。5の椀は平底で回転糸切りにより切り離されている。底部から外反して立ち上がり、口縁付近でやや外湾して端部にいたる。端部は尖り気味に丸くおさめる。内外面ともに回転ナデで外面には稜が残っている。器表面の一部に黒斑が残る。

#### 調査区内出土遺物（第22図6～13、図版21）

調査区内からは細片が多く出土したため、図化できた遺物は多くない。6は磨消縄文土器頸部片で、頸部外面に1条の沈線が廻り、肩部の外面はヘラによって三日月状に条痕を施して区画した内部に縄文を施している。内面は丁寧にナデている。7は弥生土器甕片で口縁端部に3条の凹線、頸部内面に横方向のヘラによるナデが磨き状にのこり、外面はヘラによる刺突文は2条廻っている。8は土師器甕で口縁端部が上下に拡張させ、端面が僅かに窪んでいる。肩部の外面は縦方向のハケ目と横方向のハケ目が格子状にみられる。外面に煤が付着している。9は亀山焼の甕口縁部片で外面に格子目のタタキ、内面に横方向のヘラ磨き状の条痕がみられる。10は土師器甕形土器の把手で、全面に指頭による成形痕が残る。11は土師質土器皿で全体的に器壁が厚い。口縁端部は尖り気味に終わり、外面に稜が残る。内外面ともに回転ナデ、底部は回転糸切りにより切り離されている。切り離しの際に、ヘラ状工具によるアタリを付けたと思われる痕跡がみられる。12・13は土師質土器の鍋で体部と口縁付近の境に接合痕を利用した段がみられる。口縁部の端面は上下に拡張し窪ませている。内面は横方向の目の細かいハケ目を丁寧に施し、外面は指頭による成形の後に縦方向の粗いハケ目を施している。13も12と同様に口縁端部を拡張し端面を窪ませている。内面は細かいハケ目、外面は指頭による成形痕で凹凸が著しく、成形の後に縦方向に荒いハケ目を施している。



第5図 P 1 遺物出土状況実測図（1：10）

## 2 岡野原遺跡（第6図、巻頭図版a）

岡野原遺跡は、小谷遺跡の東側の谷川と田万里公民館西側の谷川に挟まれ、北側は山陽新幹線の用地付近、南側は一般国道2号付近までの範囲（10,600m<sup>2</sup>）に及んでいる。整備事業との調整の結果、2,640m<sup>2</sup>が調査の対象となり、調査区が5個所に分散している。調査区は北西側から南へ1～3区、北東側を4・5区として調査を進めた。それぞれの調査面積は1区が690m<sup>2</sup>、2区が30m<sup>2</sup>、3区が330m<sup>2</sup>、4区が890m<sup>2</sup>、5区が740m<sup>2</sup>である。遺跡周辺の地形図を観察すると遺跡内の中央南側は北西から南東方向の谷地形となっており、調査区はそれぞれ谷地形の傾斜変換点、小丘陵の尾根に立地していることが窺える。

### 1区（第7図、図版4a～c）

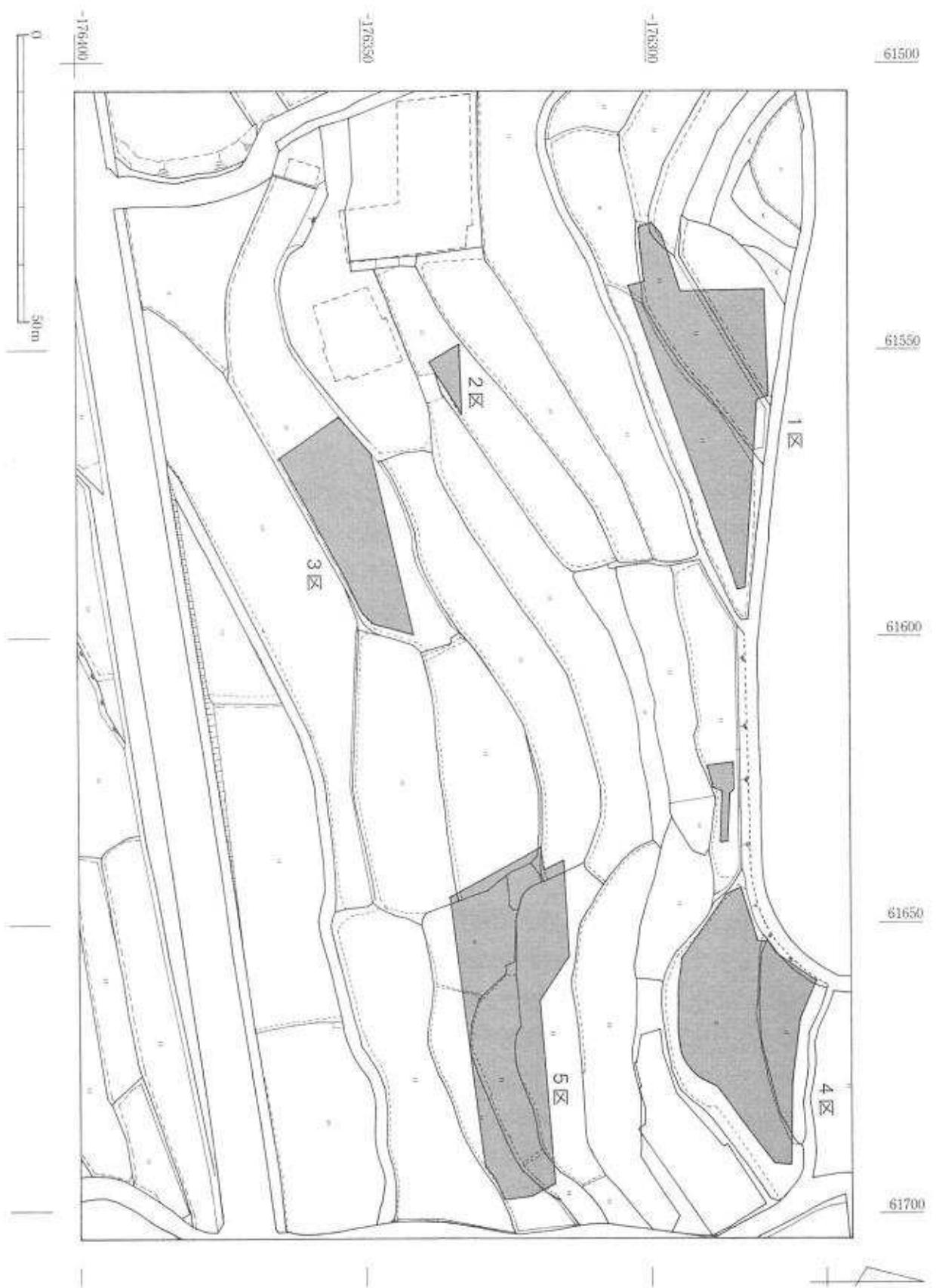
1区は岡野原遺跡の北西部に位置し、水田の3枚分が調査区となっている。調査区内の土層は耕作土・床土が40cm程度で、北西側で約40cmの遺物包含層がX-176290m付近まであり、水田となっている。この付近から南側は暗灰色～灰褐色の粘土を含む砂となっている。この土は旧地形の谷頭付近に相当する部分の覆土で、南東側に向かって厚く堆積している。調査区内の南西部でこの層の厚さを確認するため、トレンチを設定して掘り下げたが、約50cm掘り下げたところ、水が溜まり始めたのでこの深さで留めた。調査区内の最高所は北西隅で最低位は調査区の南側中央部で約1.5mの差がある。トレンチを設定した最低位付近が旧地形の谷頭に相当していると思われる。今回の調査では、明確な遺構は確認できなかったが、調査区の中央の北側から3個所に段状に平坦面が認められた。標高135.4m付近で幅1.5mの東西方向に延びる傾斜の緩やかな平坦面が、同じく135m付近で幅約3mの緩やかな傾斜の段、134.4m付近で傾斜が変換している。

試掘時の8トレンチで確認している竪穴住居はこの付近であるが、この住居跡に続く遺構は確認できなかった。

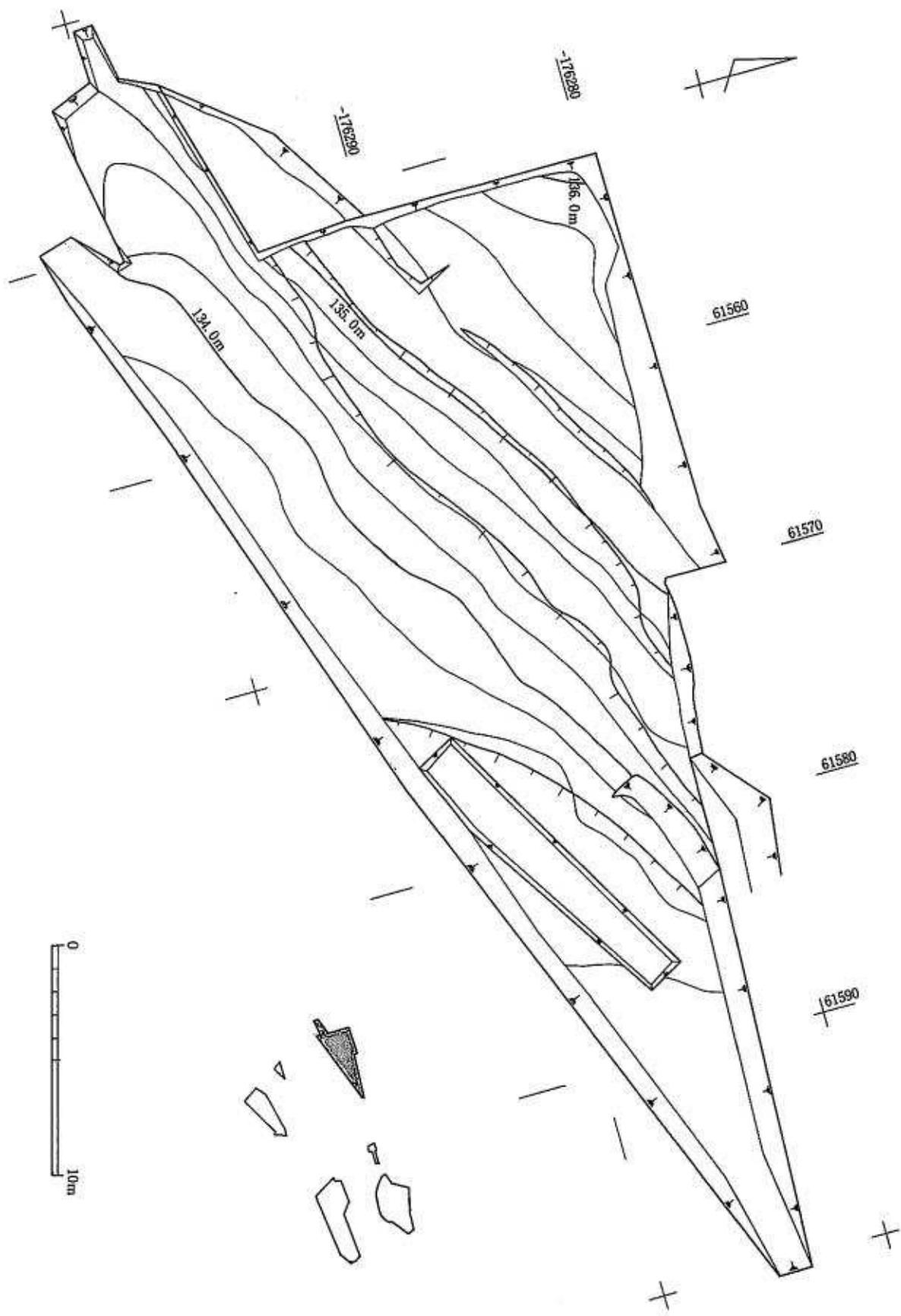
遺物は包含層から弥生土器と須恵器が出土している。

### 調査区内出土遺物（第22図14～23、第23図24・25、図版21・22）

14～19は弥生土器片で14～16が壺口縁部、17が鉢口縁部、18・19が底部片である。13は口縁端部に3条の凹線文があり、頸部の外面に粘土紐を貼付けた後に押圧により規則的に窪ませている。14の口縁端部は上半が粘土を貼り付けて調整した端面に3条の凹線文を巡らせていている。15の口縁は頸部から強く外反し端部の上下を僅かに拡張している。端面には2条の浅い凹線文がみられる。17の胴部最大径は肩部にあり、口縁は頸部から強く外反して端部にいたる。端部は下方に拡張し、端面には貝殻の復縁による刺突文が施されている。肩部の外面も同様の刺突文が上下2段に上段が右から左へ、下段が左から右へ施されている。内面は強い横方向のナデである。18の底部は底面が僅かに窪んでおり、外面は二次焼成を受け、指頭による成形痕が残っている。内面はヘラ削りの後にナデしている。19の内・外面は、ともに丁寧にナデしており、底は中央部が窪んでいる。20～25は須恵器で20が杯蓋、21～23が杯身、24は提瓶・平瓶の口縁部片、25は龜である。20は口縁



第6図　岡野原周辺地形図（1:1,000）



第7図 1区造構配置図 (1 : 250)

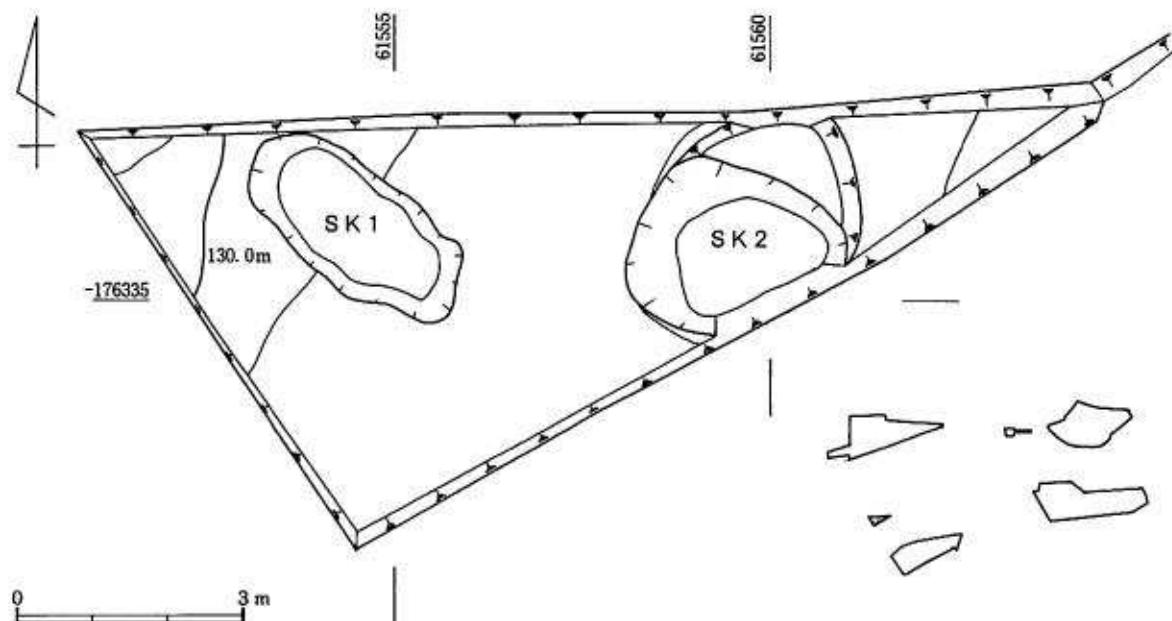
部を部分的に欠いたほぼ完形である。天井部は時計廻りの回転ヘラ削り痕が残り、口縁端部は尖り気味に丸くおさめている。内面の天井部付近は凹凸が激しい。21の口縁部は強く内傾し、受部には先端の丸いヘラ状の工具により浅い窪みが廻っている。受部の下部と内面は強く窪ませている。底部は回転ヘラ削り痕が残り、ロクロは時計廻りである。22の口縁は直立気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。23の口縁部は内傾して立ち上がり端部は丸くおさめている。受部に先端の丸いヘラ状の工具により浅い窪みが廻っている。底部は回転ヘラ削り痕が残り、ロクロは時計廻りである。24は口縁部の中央で凹線状に窪みがみられる。端部は平坦で内傾して、内面側に拡張している。25は肩部から直立気味に立ち上がりながら外反し口縁部にいたる。口縁部から更に外反して端部となる。端面は平坦で中央がやや窪んでいる。内外面ともに丁寧に調整しており、肩部内面は縦方向のナデがみられる。

## 2区（第8図、図版6c）

2区は岡野原遺跡の西側の南北中央部に位置している。調査区は三角形で面積が30m<sup>2</sup>と最小規模であった。調査区の南東側が下段の水田との境界となっている。調査内の土層は耕作土・床土が40cm程度で、以下30~40cmの流入土が堆積した後に遺構確認面となる。調査区内は北西側から東側に傾斜しており、約0.9mの高低差がある。確認した遺構は、SK1・2の土坑2基でSK2の1/3は南側調査区外に広がっている。SK1内から弥生時代中～後期の土器、SK2及び調査区内から弥生時代後期の土器が出土している。

## 2区SK1（第9図、図版5a～c）

2区SK1は調査区内の北西部に位置している。2区SK1の南東側に約2.5m離れて2区SK

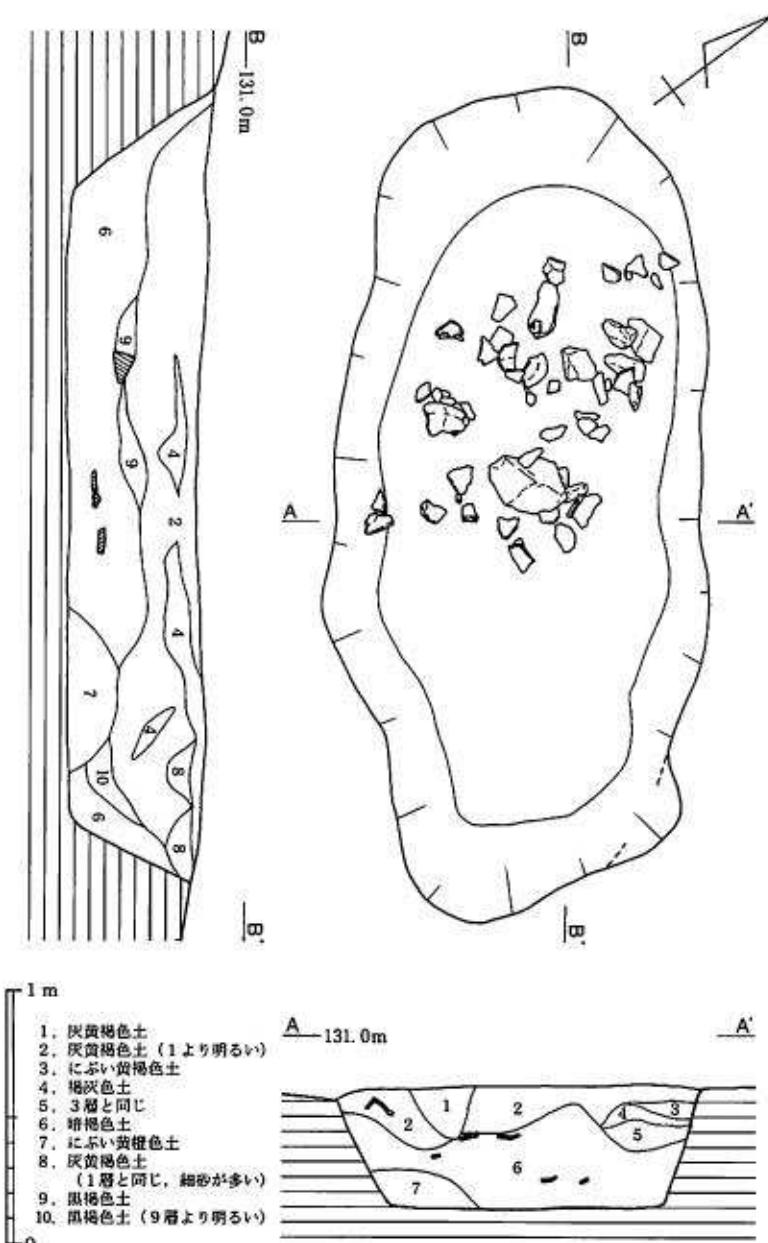


第8図 2区遺構配置図 (1:100)

2がある。平面形は北西から南東方向の長楕円形で、長軸が3.2m、最大幅が1.5mである。壁は傾斜しており、確認面からの深さは、北西側で0.55m、南東側で0.5mである。底面はほぼ平坦で、遺物は覆土中から出土しているが、主には6層中から角礫とともに出土している。これらの遺物の出土状況には規則性はみられず、一括廃棄されたと思われる。土層の観察では6・7層はそれが单一土であるが、上層は2層中にブロック状の塊が混入した状況である。形態的に貯蔵穴ではないと考えられるが、性格は不明である。

#### 出土遺物（第23図26～37、図版22・23）

26は壺の口縁部で、口縁は頸部から外方へ湾曲している。端部は上方へ拡張している。器表面は丁寧な凹線文が施されており、口縁端面に3条、口縁の下部に3条、頸部に13条の凹線文を巡らせている。内面は横ナデ、頸部の下部はナデと思われる。27は頸壺で肩部から僅かに立ち上がり口縁端部となる。端部は内側に拡張し、口縁の外面に2条、端面に1条の凹線文がみられる。肩部は上方に貝殻復縁による左から右へ押し引いた3列の刺突文が、下部の3条の擬凹線文を挟んで、3条の波状文が施されている。頸部内面は横ナデ、肩部は絞り目がみられる。28～32までは壺で口縁部は上下に拡張している。また、31以外は口縁端面に3条の凹線文がみられる。29の肩部には2条の、30には1列のヘラ状工具による刺突文が施されている。内外面ともに横ナデ、肩部内面にヘラ削り痕が残っている。33は台付壺か壺の胴部で算盤玉状の形態となっている。胴部の上方外面は、4条単位の波状文が2条、内面は指

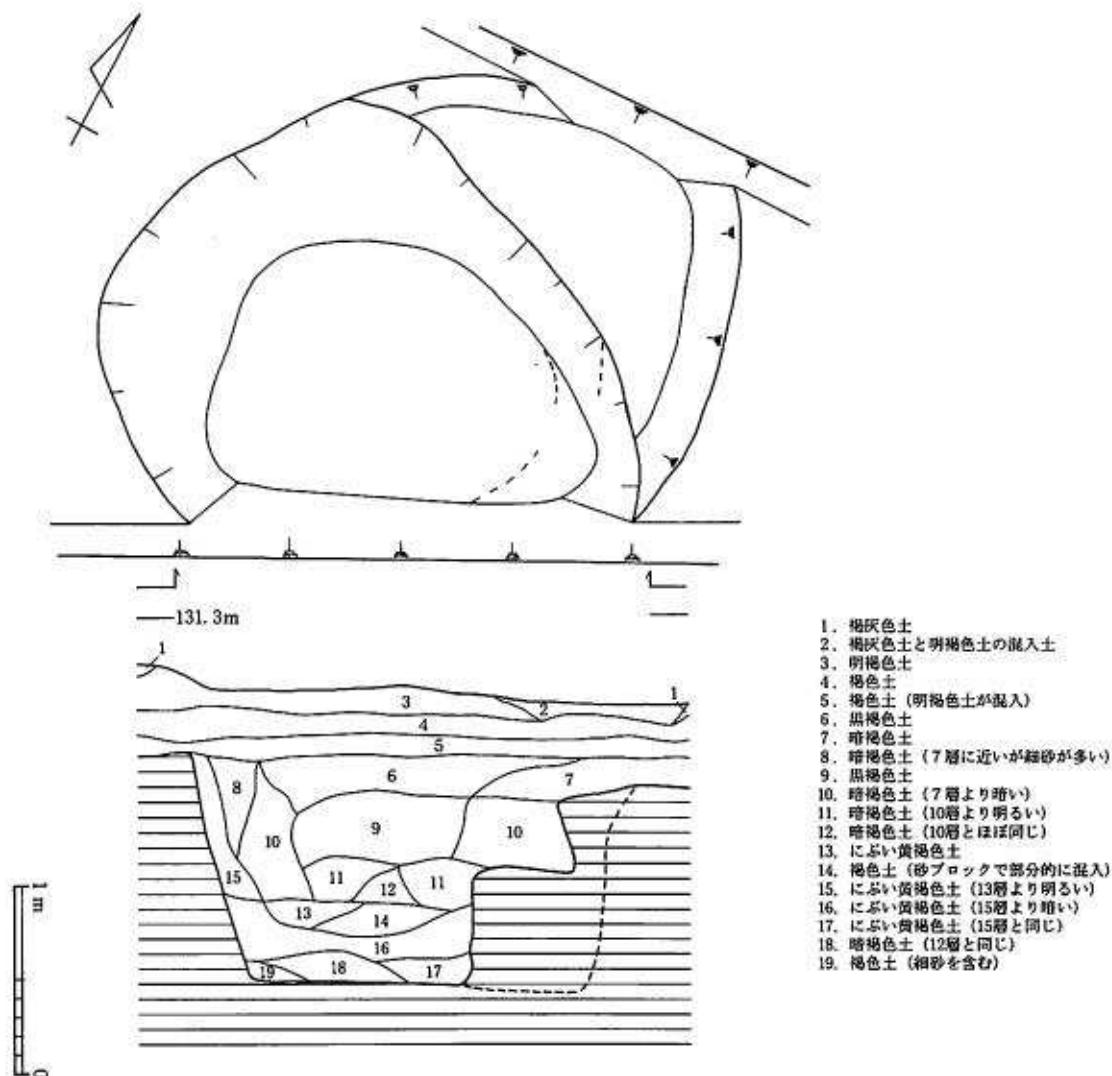


第9図 2区SK1実測図 (1:30)

頭による成形の後にナデが、屈曲部外面は横方向に丁寧なヘラ磨き、下部には斜め方向のヘラ磨きが施されている。内面はナデである。34・35高杯杯部である。34の口縁は体部から外反し口縁が丸くおさめる。口縁部の内外面ともに横ナデ、口縁接合部の外面に先端の鋭利なヘラ状の工具により幅3mm程度の刺突文がみられる。35の口縁は脚部から外反した杯部から上方へ短く立ち上がっている。外面に3条、端面に1条の凹線文がみられる。36・37は底部で36の底は僅かに壅んでいる。37の外面は縦方向のヘラ磨き、内面はナデ、底は平坦となりナデている。

## 2区SK2（第10図、図版6 b）

調査区の南東部に位置し、SK1と約2.5m離れている。上端の北側と南東側は若干掘り過ぎにより形状が変形している。平面形は上端で径2.7m程度、下端の径が1.7m程度の橢円形と思われる。深さは南西側で1.2mである。壁は傾斜しているが、土層で壁の南東側に幅0.5mの平坦面が確認できた。土坑の約1/3が未調査であるが、壁の南西側から南側に段が存在していたと思



第10図 2区SK2実測図 (1 : 60)

われる。土層は3層までが水田に伴うもので、4～7層が流入土、8層以下が土坑の覆土となる。遺物は覆土中から弥生土器片が、底付近では幅40cm程度、厚みが15cm程度の自然礫（図版6 b）が底から浮いた状況で出土している。

#### 出土遺物（第24図38～41、図版23）

38は壺の口縁部片で、外面に8条の細かい凹線を施している。端面は僅かに拡張し、内面とともに横ナデである。39は甕で、口縁は頸部から僅かに外反している。端部は上下に拡張し端面に2条の凹線文がみられる。肩部外面にヘラ状工具による刺突文がみられる。内面は頸部から下位に横方向のヘラ削り痕が残っている。40・41は底部で40の底は未調整で凹凸がある。外面は縦方向のヘラ磨きが、内面は荒いナデである。41の底はほぼ平坦で、体部の器壁が薄く立ち上がっており。表面は単位が不明であるがヘラ磨き状に光沢がある。内面はヘラ削りの後にナデている。

#### 調査区内出土遺物（第24図42～46、第25図47～54、図版23）

42～45は甕である。42～44はいずれも口縁端部を上下に拡張し、端面に凹線文を42が3条、43・44が2条施している。肩部外面には43が2列、42・44が1列のヘラ状工具による刺突文がある。口縁部の内外面は、いずれも横ナデが、肩部の内面は44が横方向、42・43が斜め方向のヘラ削り痕が残っている。45は小形で、口縁は頸部から外湾気味に立ち上がり、端部が丸く終わっている。胸部の最大径は上位にある。肩部外面はヘラ状工具による刺突文が、内面は横方向のヘラ削り痕が残っている。46・47は鉢で46の底部はやや窪んでいる。体部は緩やかに外方へ立ち上がり、内湾して頸部にいたる。口縁部は頸部から強く外反し、端部は僅かに拡張している。端面に2条の凹線文、肩部外面に幅6mm程度の細かいヘラ状工具による刺突文がみられる。口縁部から肩部の内外面は横ナデ、胸部の外面はナデが、内面は縦方向のヘラ削りの後に丁寧にナデしている。47は頸部を僅かに窪ませて口縁端部となる。端部は丸く收め、内側に傾斜させて頸部にいたっている。頸部の外面に指頭圧痕が残り、胸部はナデである。内面は縦方向のヘラ削りの後に丁寧にナデしている。48～53は比較的小型の底部である48・49の平底のものと50～53の高台状に窪んでいるものがある。何れの土器も器表面は内外面とも調整はナデによるが、49は指頭による成形痕が残っている。54は砥石、或いは擦り石と思われる。上面の一面のみが使用され、条痕跡はみられないが、平滑となりよく使用されている状況である。形状は三角形であるが、上側は欠損しているため本来の形状ではないと考えられる。重量は1,185gで、石材は脈石英である。

### 3区（第11図、図版7・8）

3区は岡野原遺跡の南西部に位置し、水田1枚の東側半分が調査区となっている。調査区内の土層は耕作土・床土が40cm程度で、北西側は調査区内の最高所で耕作土・床土の下層が遺構確認面である。調査区はこの地点を谷頭として、南東側の中央部に向かって緩やかな谷地形となっている。最低位との比高は約0.9mである。耕作土・床土の下層は、高さ128.6mの等高線付近から南西側に向かって暗灰褐色で粘性を帯びた砂質土が南東側で0.7~0.8mの厚さで堆積しており、弥生土器片、須恵器片、土鍋片などが出土している。遺構確認面は淡茶褐色で小礫と砂を含む固く締まっている。遺構は、調査区中央に北東から南西方向のトレンチから南側で溝を2条確認した。いずれの溝からも近世の陶磁器片が出土している。

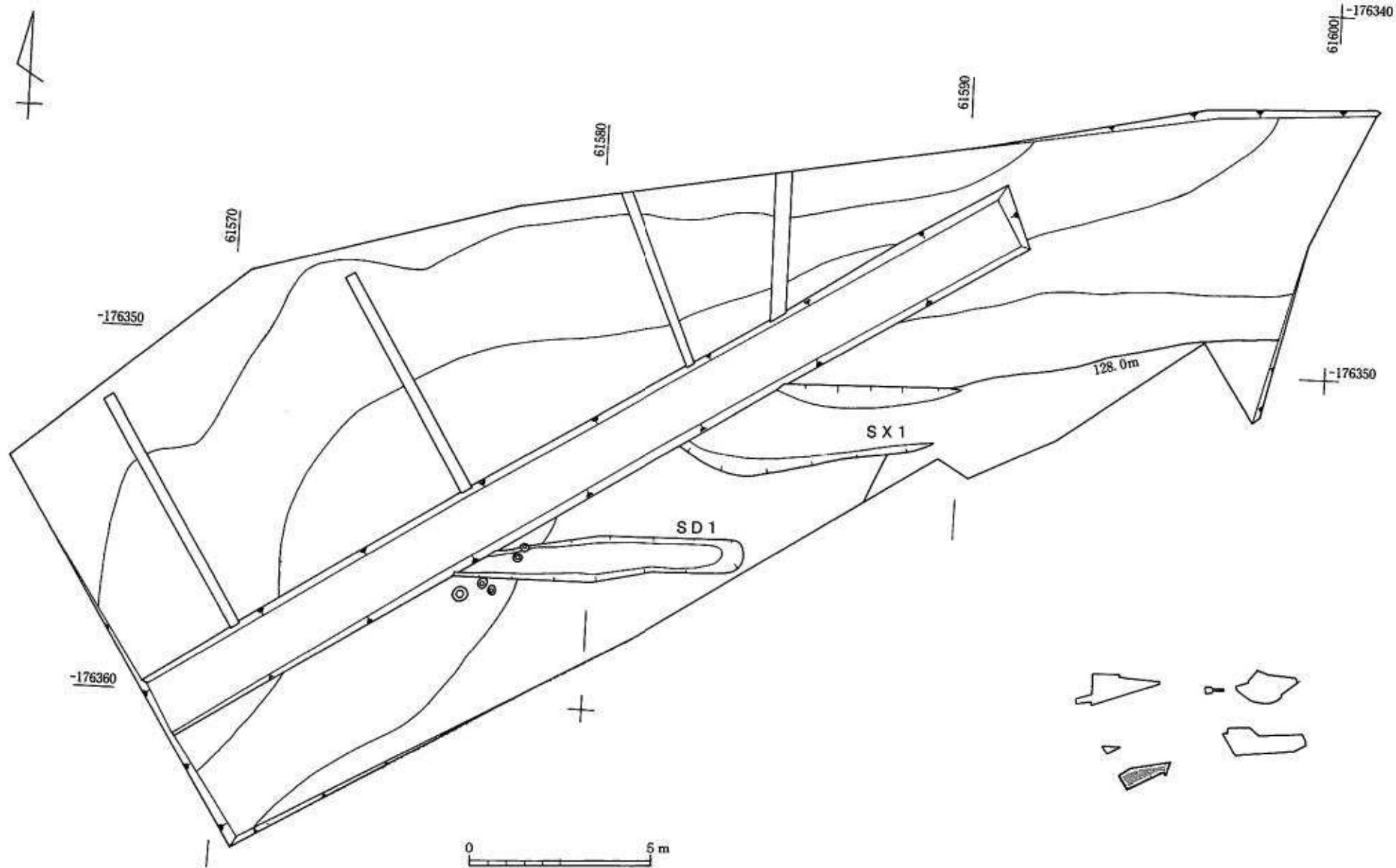
S D 1は調査区南西側にS X 1と並行して位置し、S X 1と約2m離れている。現状で長さ約7m、最大幅1.2m、深さは25cm程度である。覆土は、にぶい茶褐色で粘性を帯びた砂質土の單一土である。溝の北西側で西側に3基の柱穴を溝の底から2基の柱穴を確認した。西側の柱穴は径が30~40cmで、深さは30cm程度である。覆土はいずれも明褐色砂質土である。溝の覆土除去後に確認した柱穴の径は20cm程度、深さは10cm程度で浅い。覆土は、いずれも褐灰色で粘性を帯びた砂質土である。S X 1の南西側は流失しており、現状の長さは6m、最大幅約2.3m、深さは10cm程度で、覆土は黒褐色で粘性の強い砂質土で、にぶい黄褐色粘質土が混入している。溝内の北西部に溝に伴うかは不明であるが、幅30~60cmの礫集中部がみられた。これらの溝が旧水田に伴うものかは不明である。

### 調査区内出土遺物（第25図55~62、図版23・24）

55~58は弥生土器の底部である。55・56底はともに平底で、55は内外面ともにナデている。56の外面は丁寧なナデによる痕跡が縦・斜め方向に残る。57は底部が高台状に張り出しており、内面に指頭圧痕が残り、外面はナデである。58は平底で外面に凹線文1条廻っている。底部からの立ち上がる部分は丁寧なナデによっている。59は須恵器杯の底部である。高台は貼り付けられ外方へ開き、接地面を窪ませている。内外面ともに回転ナデであるが底は回転ヘラ削り痕が残ったままである。60・61は土鍋の口縁部である。いずれも口縁端部に粘土を貼り付けて端面を広くして窪ませている。60の内面は、目の細かい横方向のハケ目が、外面には粘土貼付け時の指頭圧痕が残っている。61の内面は、目の細かい斜め方向のハケ目を施した後、ヘラ状の工具の先端部による縦方向の刺突が擂鉢の条痕状に残る。62は砥石で、上・下の面に使用痕が残る。他の面は割れ口が新しくいため欠落していると思われる。重量は24gで、石材は流紋岩である。

第11図 3区道橋配置図 (1 : 150)

21



#### 4区(第12・13図、図版9a・b, 19a~c, 20a)

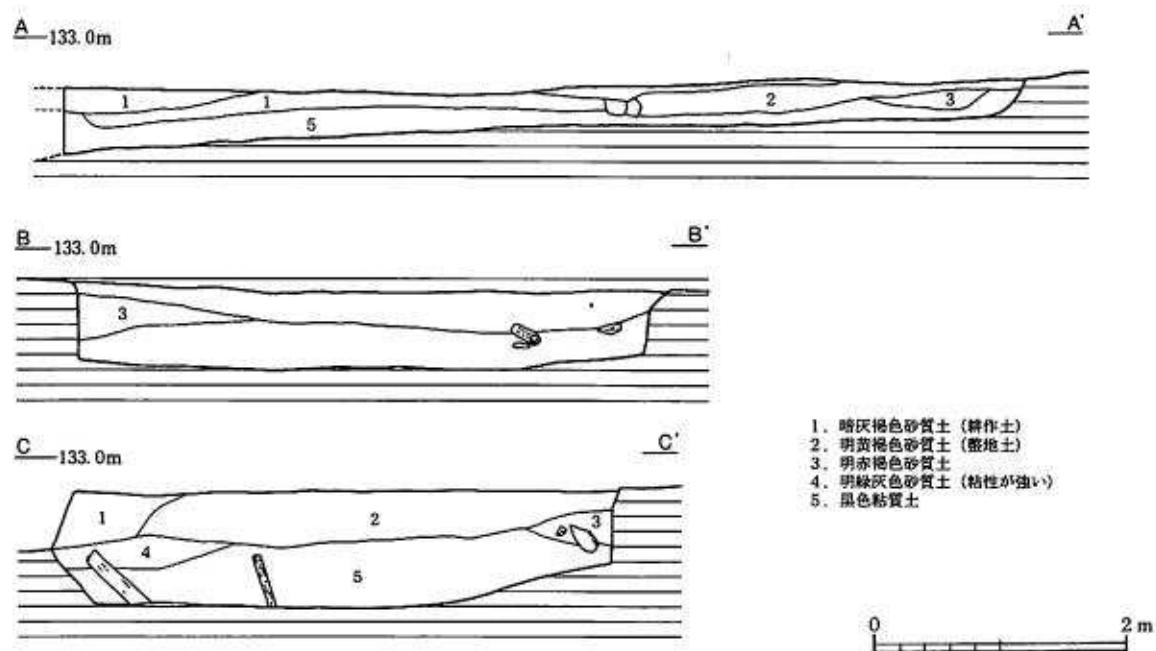
4区は岡野原遺跡の北東隅に位置している。調査区は水田用の水路を保護するために東西の2か所に分かれている。東側の調査区は小河川があり、4区はこの小河川と西側の谷に挟まれた小丘陵の頂部平坦面から南側への緩斜面に立地している。

西側の調査区は、北側が道路と水路に接していたことと面積が少なかったためトレンチを設定して調査を進めた。まず、幅1.5mの東西トレンチを長さ約9m掘り下げ、東から5mの地点で南側に約3mに拡張した。遺構は確認できなかったが、岡野原遺跡の中央部にある谷状の地形の谷頭付近の傾斜を確認した。土の堆積状況は1・2層が耕作土・床土で3・4層が整地土、5層が谷の堆積土となる。トレンチの東側5層下面が東側調査区の遺構確認面と同一の面で、確認面は西側に向かって傾斜しており東側と西側との高低差は1.0m以上ある。調査区内は湧水が多く壁が崩落する可能性が高いためこの地点で掘り下げを止め、調査後には埋め戻しを行った。

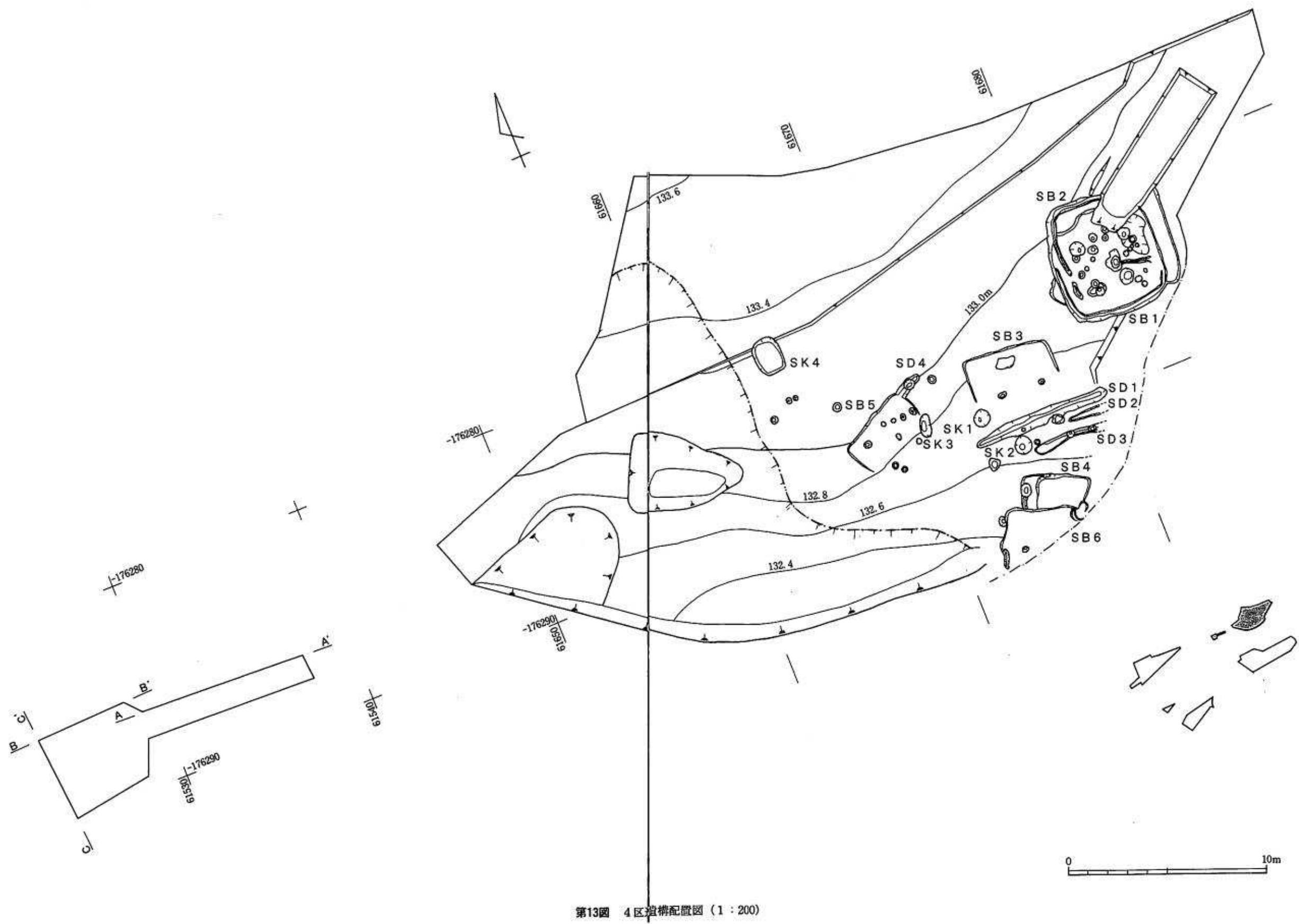
遺物は出土していないが5層中に自然木がみられた。

東側の調査区は、北側と東側は道路及び水路に接したことから、調査範囲を1m~1.5m内側に、特に民家に接している南側は、崩落防止と転落防止のために幅2m程度内側に設定して調査を進めた。調査区内は水田2枚にあたり、耕作土・床土は40cm程度である。北側は耕作土・床土を除去後に遺構確認面となったが、調査区の中央付近から遺物包含層が認められ、南西側に向かって厚くなり、高低差は最大1.6mとなる。

確認した遺構は竪穴住居跡6軒、溝4条、土坑4基で、SB1・2及びSB4・6は南側に未調査部分があったことから、広島県教育委員会が工事の施工に併せて調査を行った。



第12図 4区西側トレンチ土層図 (1:60)



第13図 4区造構配置図 (1 : 200)

#### 4区SB1・2（第14図、図版9c、図版10・11・12a）

調査区の東側に位置し、緩斜面に立地している。近接するSB3とは約2mの距離である。調査中は床面の北側にベッド状の高まりがある住居跡、拡張した住居跡、2軒が重複した住居跡の可能性を考えて進めたが、掘り下げ中及び土層観察でも明確にできなかったが、広島県教育委員会の調査で南西側の壁が確認できたことから、重複した住居であったことが分かった。土層図の土層3がSB1の覆土でSB2の覆土が土層2と考えられることから、新旧関係はSB1が古く、SB2が新しいと考えられる。

SB1の平面形は、東西5.5m、南北4.8mの方形で南西側の確認からの深さは、約30cmである。壁溝は西側壁から南側壁で残っており、幅25~40cm、床面からの深さは5~10cmである。床面はほぼ平坦となっており、伴う柱穴はP1~P4が位置的に対応すると考えられ、床面中央付近のP5が土坑であったと思われる。P1は径が65~80cmで、深さが65cm程度、P2が長径40cm、短径30cm、深さ55cm、P3が径30cm、深さ40cm、P4が径60cm、深さ40cmである。柱穴間の距離は芯心でP1-P2が2.2m、P2-P3が2.05m、P3-P4が2.3m、P1-P4が2.4mである。P5の北側のP22はP5の上層にあたり、深さが10cmで覆土に炭化物が含まれていた範囲である。P5は径が50cm、深さが45cm程度で西側上部に幅20cm、厚さ5cmの礫があり、中・下層から土師器壺が出土している。P5からは幅20cm程度、深さ10cm程度の溝が東側と北側に延びている。排水溝とも考えられるが、北側は北へ約80cm付近で終わっている。東側はトレンチにより壁まで延びていたかは不明である。また、床面の北東部では、P20を中心とした周辺に、最大幅1.9mの不定形の落ち込み(SX1)がみられた。この落ち込みの覆土から柱穴が掘り込まれているのでSB1より古い落ち込みと考えられるが、SB1との関係は不明である。遺物は鉄鏃が南西隅の床面から出土している。

SB2の平面形は、東西5.7m、南北は推定5.2mの方形であったと考えられる。壁溝の南側は確認できていないが、北側で幅50cm、東西で20cmである。床面からの深さは、最大10cm程度で南西部と南東部は確認できなかった。壁溝の北側は、床としている面は基盤層の礫が露出しているため、途中で上端のみの確認となった。床面の状況はSB1の床面まで掘り下げたので、詳細は不明であるが、東側の壁から幅30cmの平坦面がある。この平坦面は南西隅まで続いている可能性もあり、SB2の東側床面と北側の床面の高さに違いがみられないことから、床面の東は和にはベッド状の平坦面があった可能性も考えられる。この壁際の平坦面から更に深さ5cm程度の段があり、西側のSB1の上端までに幅25~35cmの平坦面がある。この平坦面がSB2の床とすれば、3層の上面がSB1の床であった可能性がある。SB2に対応すると思われる柱穴は不明であるが、可能性としてP9-P14-P23かP24-P20の並びが考えられる。柱穴間の距離は芯心でP9-P14が1.7m、P14-P23が2.5m、P14-P24が2.6m、P23-P20が2.2m、P24-P20が1.7mである。柱穴の底までの深さはP20が約15cmで、他は30cm程度とほぼ同じ深さとなっている。他の柱穴の対応関係はSB1・2のどちらに対応するかは明らかにし得ず、作業用の小柱穴・或いは副柱穴などの性格が考えられるが詳細は不明である。遺物はSB1・2とも覆土中か

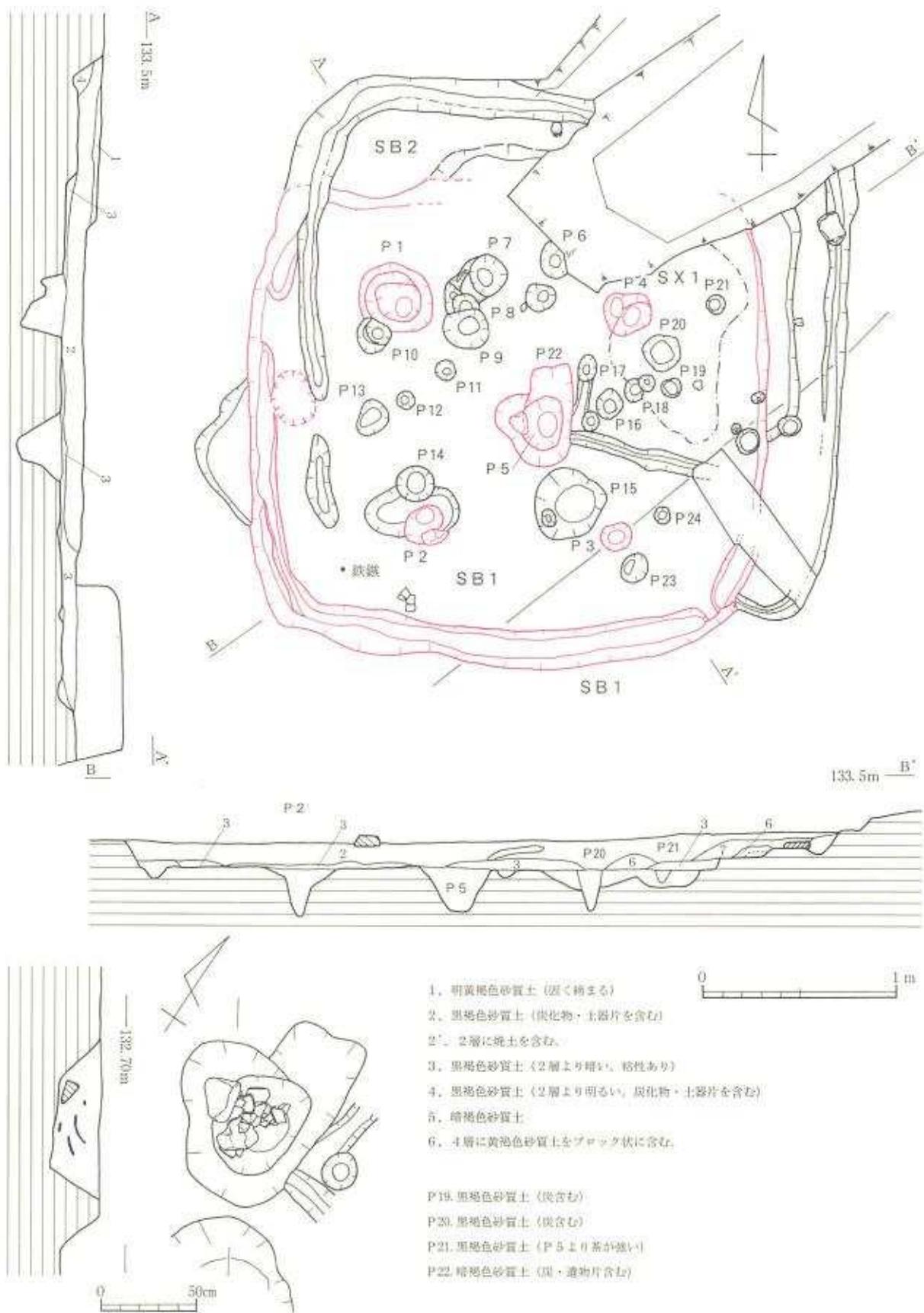
らの出土が多く、弥生土器片・土師器片・須恵器片、製塙土器片・台石・ミニチュア土器・敲石・磨石などが、SB2に伴うものとしては、土師器甕が北側床面の東側で、台石と思われる石が東側の壁溝付近から出土している。

#### 出土遺物（第25図63～65、26図66～80、27図81・82、図版24・25）

63～72は土師器である。63はP5内から出土したほぼ完形の壺である。胴部は球形となっており、口縁は肩部から湾曲気味に外反して、口縁端部は丸くおさめる。底部周辺の外面は横方向のヘラ削りが残り、頸部から下部は2cm幅で6本単位の荒いハケ目が縦方向に施された後にナデている。口縁部は内外面に強い横ナデによる細かい条痕が残っている。頸部から胴部下位までの内面は、ヘラ削りに後、指頭による調整がみられ、底部はハケ目が残っている。23は直口壺と思われる胴部片で、胴部が橢円形となっている。胴部の外面は肩部が横方向のハケ目、下部が斜め方向のハケ目がみられる。内面の肩部は指頭による成形痕が残り、胴部の上半は横方向のヘラ削り、下半は斜め方向のヘラ削り痕が残る。器壁に粘土紐の巻き上げ痕が観察される。65～67・69は甕である。65の口縁は端部が丸く内外面は横ナデ、外面に縦方向のハケ目が残る。内面の頸部に近い箇所は斜め方向のハケ目が、肩部は強いヘラ削り痕が残っている。外面には煤が付着している。66・68は二重口縁で66はSB2に伴うと考えられる甕でほぼ完形である。底部は丸底で、胴部は球形に近い。口縁は頸部から外反し、内傾しながら湾曲して外方へ開き口縁端部となる。端部は丸くおさめている。口縁部の内外面は強い横ナデにより、細かい条痕がハケ目状に残っている。肩部から底部までの外面は不定方向の丁寧なナデにより目の細かい条痕が前面にみられる。内面は上位が横方向のヘラ削り、下位は斜め方向のヘラ削りの後にナデしている。67の口縁は器壁が膨らんでおり、端部は内傾した面をやや窪ませている。外面は部分的に煤が付着している。68の口縁端部は面があり、内外面とも強い横ナデにより僅かに凹凸がみられる。69は弥生土器後期の鉢で口縁は頸部から強く外反して、端部は上方をやや拡張して面となっている。面はやや窪ませて浅い稜がみられる。内外面ともにナデ、肩部の外面は縦方向のハケ目が、内面は横方向のヘラ削り痕が残る。70・71は高杯で、70は杯部片で、体部外面に斜め方向と横方向のヘラ磨きがみられる。口縁の内・外面はヘラ磨き状の痕跡が僅かに残っている。71は低脚の高杯で口縁の一部を欠いている。全体的に指頭による手捏ねにより成形されており、外面に指頭圧痕が明瞭に残っている。脚裾は接地面が平坦となり内面にはハケ目が残る。杯部の内面は底付近でハケ目の痕跡が残っている。体部は内湾しながら外方へ立ち上がり、口縁端部は尖り気味に終わっている。外面には部分的に黒斑がみられる。72は底部片で器形は不明である。底部は窪み高台状に張り出している。

#### 第14回 P内土層名

P 1. 灰黄色砂質土	P 7. 暗色砂質土（遺物片含む）	P 13. 灰黄色砂質土（遺物片含む）
P 2. 黑褐色砂質土（炭・遺物片含む）	P 8. 黑褐色砂質土（遺物片含む）	P 14. 黑褐色砂質土（炭・遺物片含む）
P 3. 黑褐色砂質土（炭・遺物片含む）	P 9. 黑褐色砂質土（炭・遺物片含む）	P 15. 黑色砂質土（炭・焼土・遺物片含む）
P 4. 黑褐色砂質土（炭・遺物片含む）	P 10. 灰黄色砂質土	P 16. 哈褐色砂質土（炭・遺物片含む）
P 5. にぶい黄褐色粘質土（土器片含む）	P 11. 暗褐色砂質土（粘性強く炭・遺物片含む）	P 17. 黑色砂質土（炭・遺物片含む）
P 6. 黑色砂質土（焼土・炭含む）	P 12. 暗色砂質土（炭・遺物片含む）	P 18. 黑褐色砂質土（炭含む）

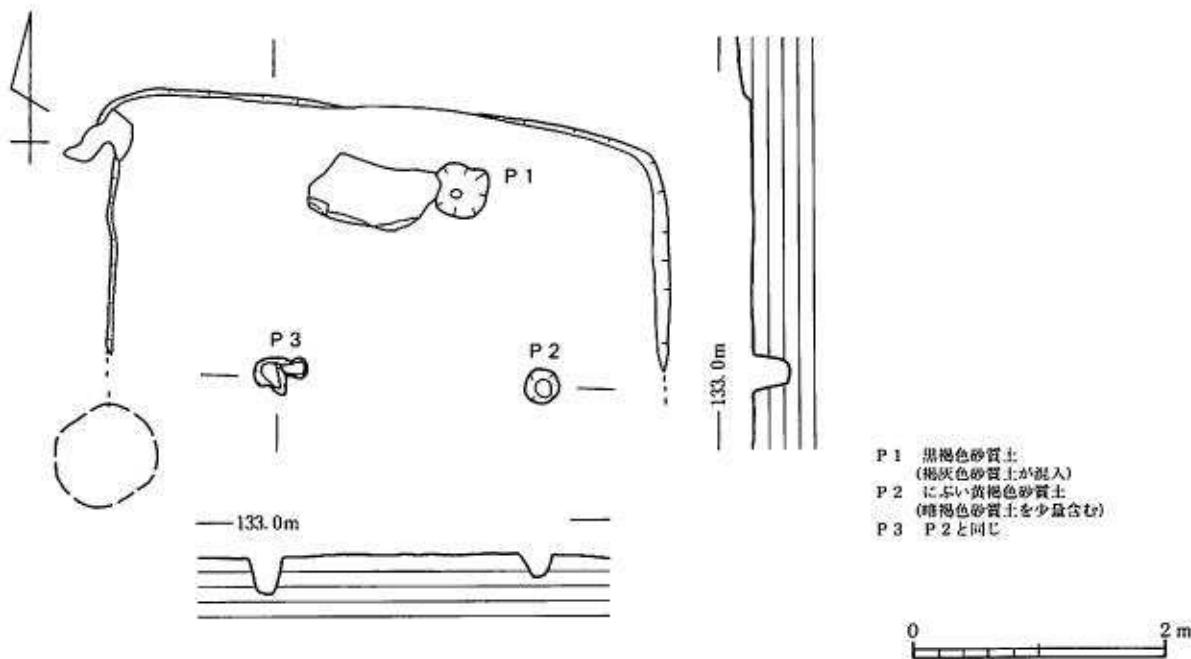


第14図 4区SB1・2実測図 (1:30, 1:60)

裾端部は丸くおさめる。底部は内外面ともに丁寧なナデ、胴部下半の外面には縦方向の細かいハケ目が残っている。73・74は手捏ねによるミニチュアの椀で、73は口縁を外反させ端部が丸く終わっている。74の口縁は直立して端部が尖り気味に終わっている。何れも圧痕が明瞭に残っている。75は土師器の杯蓋である。形態は須恵器の杯蓋と同じである。口縁端部は内傾しており、やや窪みがみられる。外面は丁寧な細かいヘラ磨き状の痕跡が残り、内面は天井部にヘラ状の工具が当たった痕跡がみられる。76は須恵器の杯蓋で口縁端部は尖っており、内傾した面を窪ませている。口縁の立ち上がり部と天井部の境は尖った稜となっている。77は砥石で欠損部以外の4面が使用されている。重量は44.8gで石材は珪長石である。78は敲石で上・下の先端部に敲打痕がみられる。敲打痕がみられない部分は、磨かれたように平滑となっている。重量は485.17g、石材は弱溶血色凝灰岩である。79は磨石で、上面が部分的に僅かな窪みがみられるが、6面全体がほぼ平滑となっている。重量は528.85gで、石材は細粒閃緑岩である。80は台石で上面の1面が使用され、平滑となっているが、下面の厚みが6.5cm～5.5cmと違いがみられる。部分的に砥石として使用したと思われる擦痕が残る。重量は8,465gで、石材は細粒黒雲母花崗岩である。81は製塩土器片で器壁の厚さは2～3mm、口縁端部は面を持っている。内面は縦方向の細かいハケ目が残り、外面は斜め方向のハケ目が残っている。82はSB1の床面上から出土した圭頭形の鉄鎌である。茎は一部が欠損している。鎌身長は5.0cm、刃部の幅2.7cm、厚さ0.4cmである。関部の幅0.7cmで、僅かに段が認められ、茎は断面で0.4×0.4cmの方形となっている。重量は15.09gである。

#### 4区SB3（第15図、図版12b・c）

SB3は調査区中央から東よりに位置し、北東側に位置するSB1・2と約2m離れている。調査区内の尾根頂部にあたる平坦面から南東側の傾斜変換点に立地している。



第15図 4区SB3実測図 (1 : 60)

S B 3 の南側に位置している S D 3 より古い。

平面形は壁が P 1 ・ P 2 付近から南側が流失しているが、遺存している北側壁の長さから4.4 m程度の方形または長方形であったと思われる。覆土は褐色砂質土の单一土で、床面の北側と北西隅に基盤層の礫が露出している。床面は平坦で、南東側に緩やかに傾斜している。北側の確認面から床面までの深さは、最も深い箇所で約10cm、北側中央では下端がみられない。床面上で P 1 ~ P 3 の柱穴を確認したが、壁溝は確認出来なかった。P 1 は径40cm、深さが20cm程度であるが、壁が下端まですり鉢状に傾斜している。主柱穴と考えられるのは P 2 ・ P 3 で、P 2 は径約30cm、深さ17cm、P 3 は不定形であるが最大径が30cm、深さ約27cmである。柱間距離は芯々で2.2mである。

遺物は覆土中から、弥生土器・土師器・須恵器の細片が出土している。

#### 4 区 S B 4 (第16図、図版13、図版14 a・b)

S B 4 は調査区の南側から東よりに位置し、S B 3 から S D 1 ~ 3 を挟んで約4m離れている。調査区内の尾根頂部にあたる平坦面から南東側の緩やかな斜面に立地している。

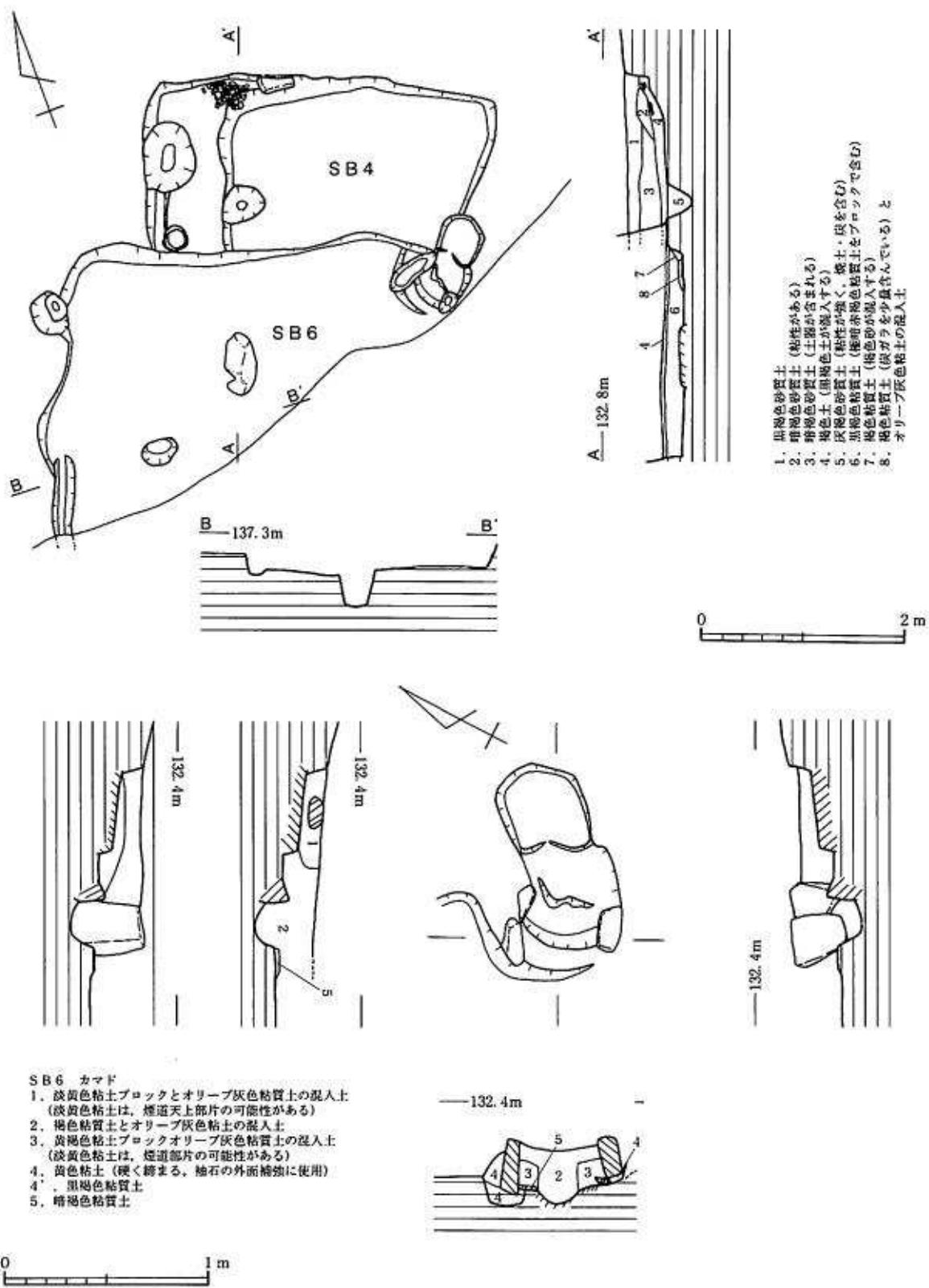
S B 4 は当初、S B 6 の北西部を造り付のカマドを想定していたが、北西隅が確認できたので S B 6 とした。S B 6 との新旧関係は S B 6 が古く、S B 4 が新しい。

平面形は、東西方向が約3.5m、南北方向は土層の観察で6層の上面が S B 4 の床と考えられるので4m以上の長方形であったと思われる。西側の壁際には幅55cmの平坦面がある。北側の確認面から平坦面までの深さは、約20cmで、床面までは更に10cm程度深くなる。平坦面の壁際に長径70cm、短径50cm、深さ40cm程度の土坑があり、この土坑から幅20cm、平坦面からの深さ7~10cmの溝が南に伸びている。土坑と溝の覆土は灰褐色砂質土で粘性が強く、焼土が少し含まれていた。床面はほぼ平坦で、西側の平坦面に接して柱穴状の土坑がある他は、柱穴は確認できなかった。この土坑は径45cm程度で、床面からの深さは約30cmである。床面の北西隅の壁に基盤層の自然礫が露出している。

遺物は西側の平坦面上から口縁部を下にして、据えたような状態で土師器甕が出土している。また、平坦面の北側壁に6個体分の製塩土器片がまとまって出土している。覆土中からは土師器片・須恵器片が出土している。

#### 出土遺物 (第27図83~93、図版25・26・27)

83・84は土師器甕で、83は覆土中から出土している。口縁部は直立気味の胴部から外反しながら器壁を膨らませている。端部は斜め上方に立ち上がり面としている。口縁部は内外面ともに強い横ナデ、肩部外面に縦方向のハケ目、内面は指頭による成形痕が残る。84は平坦面上から出土している。胴部は長胴と思われ、最大径から下部は欠損している。頸部は1~2条の凹線状の条痕が廻っている。口縁は頸部から内湾気味に外反して、端部は丸くおさめる。口縁部は内外面ともに強い横ナデにより稜がみられる。胴部は成形時の凹凸が残り、外面は縦方向の荒いハケ目が



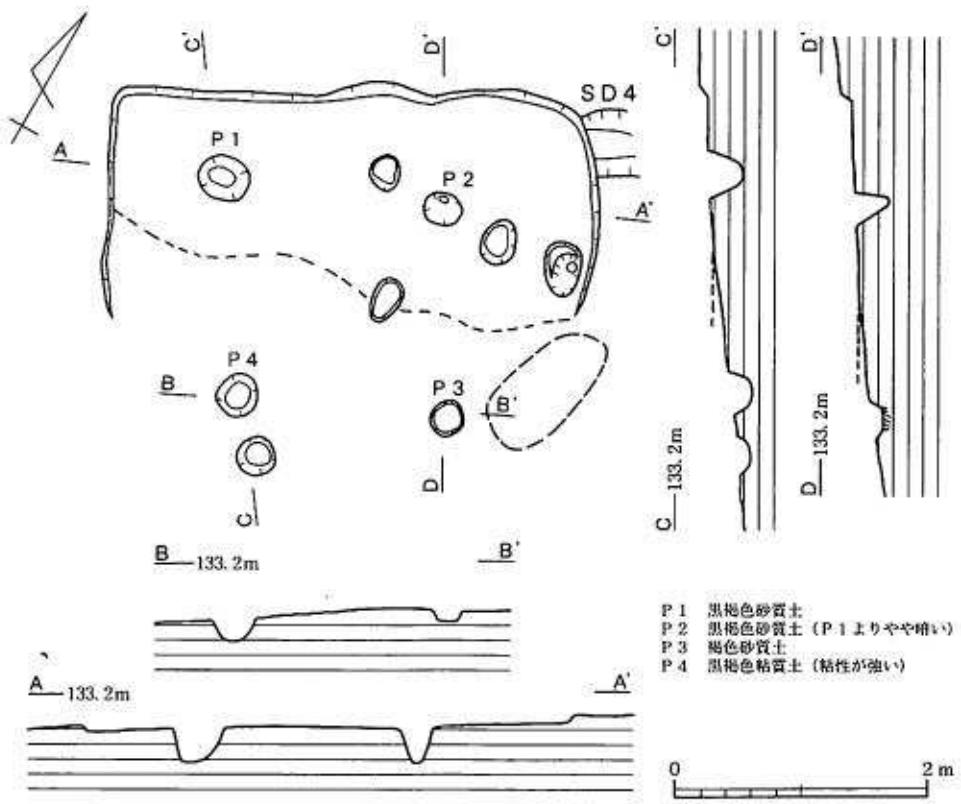
第16図 4区SB4・6実測図 (1 : 60)

明瞭に残っている。内面には指頭による成形痕が横方向にみられる。85～90は製塩土器で、口縁端部がほぼ水平で平坦な85～87と、端部が尖り気味で外側に面がみられる88～90に分かれる。いずれも、手捏ねによる指頭の圧痕が残り、底部を欠いている。88～90の土器は内面に目の細かい（1mm幅で3条程度）の布目痕（図版26）が残っている。また、ヘラ状の工具による刺突の痕跡がみられ、布を押るために工具を使用していたと思われる。88～90のものに比べ85～87は器表面に1mm程度の砂粒が目立ち、内面は指頭による成形後に不定方向にナデている。6点ともに口径は概ね12.0cmで企画性が窺える。91～93は覆土中からの出土である。91の形態は須恵器と同様な土師器の杯蓋と思われる。内外面ともにナデであるが、外面は丁寧にナデしている。92は須恵器高杯脚片で、透かしの数と形状は復元できない。裾端部は尖り気味で外面を2段に窪ませている。覆土中からの出土である。93は土師器の皿で、高台は断面形が三角形で接地面が尖り気味である。口縁部は底部から外湾しながら立ち上がり、端部は丸みを帯びた面である。

#### 4区SB5（第17図、図版14c・図版15a）

SB5は調査区の南側中央付近に位置し、丘陵の先端部傾斜変換点に立地している。SB3から西側に約3m離れている。SK3とSD4と重複関係にあり、SD4より新しいがSK3との関係は他の土坑の覆土とほぼ同じであることからSK3が新しいと考えられる。

平面形は壁の南西側が流失しているため不明であるが、北西側の壁から一辺3.4mの方形であったと思われる。床面までの深さは、壁の状況が良い北側で10cm程度残り、壁溝は確認できな



第17図 4区SB5実測図 (1:60)

かった。覆土は褐色砂質土の砂を多く含んだ单一土である。床面は流失していることから、東側の壁が残っている付近までが平坦で南西側は傾斜している。柱穴は位置関係からP1～P4が住居跡に対応していると思われる。柱穴の径は25～40cmで、深さはP1・P2が床面から30cm程度である。P4の底面はP1・P2より5cm程度低くなっている。P3は底面に平坦な石が置かれていたが自然石の可能性もある。柱間の距離は芯々でP1-P2が1.8m、P2-P3が1.7m、P3-P4が1.7m、P1-P4が1.7mである。

遺物は覆土中から土師器片、P2内から土師器片が出土しているが、いずれも細片である。

#### 4区SB6（第16図、図版15b）

SB6はSB4と同様に調査区内の尾根頂部にあたる平坦面から南東側の緩やかな斜面に立地している。SB4とは重複関係にあり、SB4より古い。

後日の工事の施工時の調査によって、南側が確認されたが半分以上は過去に削平されており全容は明らかになっていない。平面形は住居跡の南東側で造り付けのカマドが住居跡の隅に相当すると考えられることから、一边が4m程度の方形であったと思われる。SB4の床面からの深さは20cm程度である。壁溝は南西隅で確認し、幅20cm、床面からの深さは4cmである。床面は南東側に向かって緩やかに傾斜している。床面の中央部には基盤層の礫が露出している。柱穴は壁溝近くで1基確認出来たのみで、径25～40cm、床面からの深さは約30cmである。

カマドは北西側で袖石が小ぶりな石材を2個、南西側で大ぶりな石材を1個使用して外側に粘土を貼り付けている。3層は天井部の崩落土で、焚口は床面から13cm程度掘り込まれて底面が赤黒く熱変している。煙道部の幅は30cm、焚口の上端から煙道の先端上端までの長さは1.1mで底面は階段状に段となっている。煙道の上部は半地下に掘り下げた後に上部を粘土等で覆っていたと思われる。焚口の奥壁から煙道部の底面は石で基盤層の礫を利用したと思われる。

遺物は焚口内から須恵器杯身と土師器甕、周辺の床付近から須恵器杯片・壺片、覆土中から須恵器壺口縁・土師器甕片が出土している。

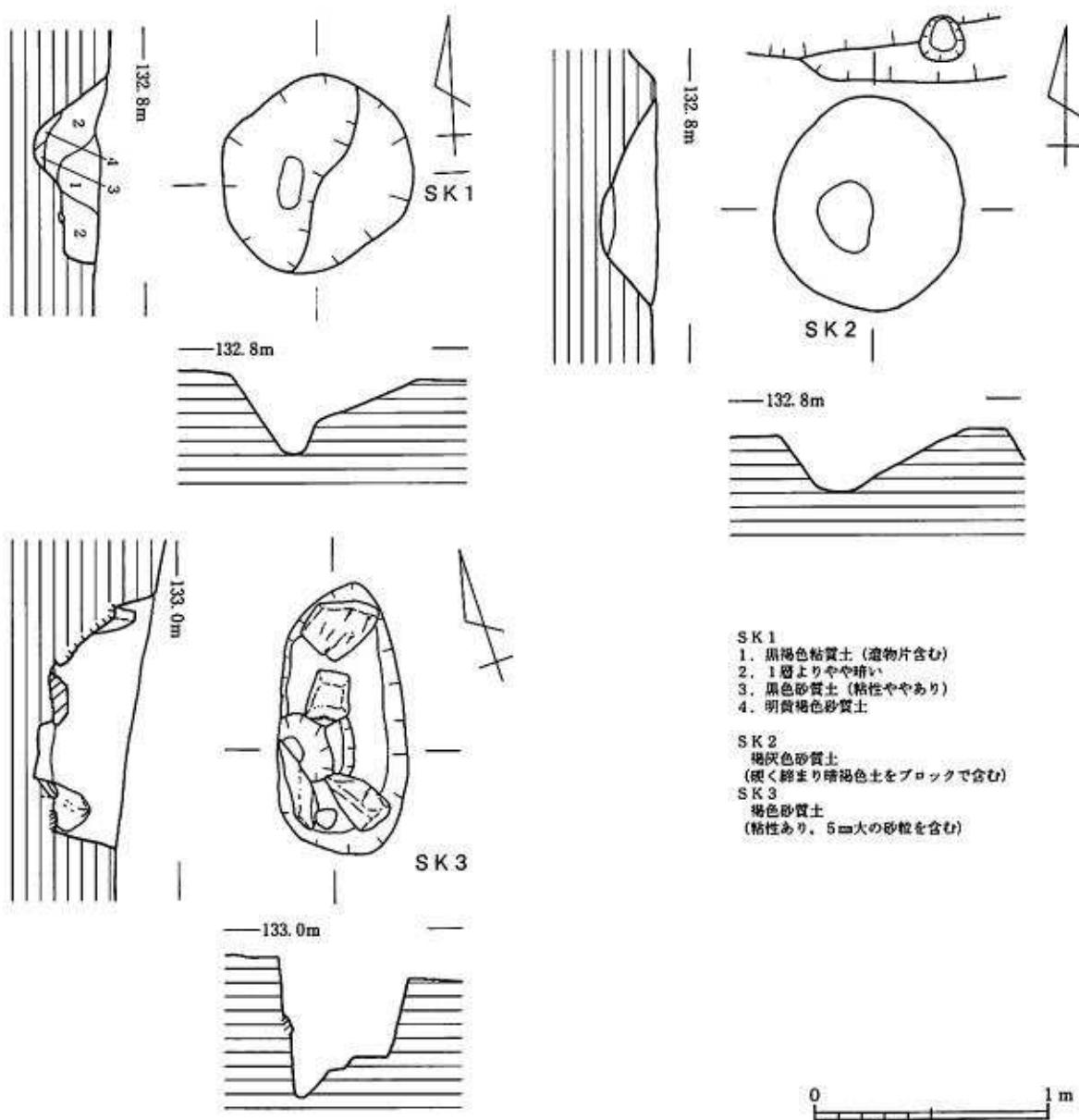
#### 出土遺物（第27図94～97、第28図98・99、図版27）

94～97は須恵器、98・99は土師器である。94はカマド周辺から出土した壺胴部片で、外面はカキ目状の条痕が明瞭に残っている。95は壺口縁部片で端部は直立して上方へつまみ出して尖り気味に終わっている。端面はやや窪ませており、内外面ともに強い回転ナデで、外面には稜がみられる。96の杯身はほぼ完形で、カマド焚口内から出土している。受部と口縁部の接合部に棒状の工具により凹線状に窪ませている。口縁部は外湾気味に立ち上がり、端部は丸く終わる。底部は回転ヘラ削りの痕跡が残り、ロクロの回転は時計廻りである。97の口縁部は内傾しており、端部は丸くおさめる。外面の一部に自然釉が残っている。体部には回転ヘラ削りの痕跡が残り、ロクロの回転は時計廻りである。98はカマド焚口内から出土している。胴部最大径が中位にあり、は球形に近くなっている。口縁部の器壁に厚みがあり、端部はやや外傾して両端を上方へつまみ出

して面を壅ませている。口縁部の内外面は横ナデで外面は熱を受けている。頸部以下の外面は、肩部は横方向のハケ目、胸部最大径付近まで斜め方向、底部周辺は縦方向のハケ目が残っている。部分的に煤の付着がみられ、熱を受けている。内面はヘラ削りの後に、指頭による成形とナデに調整痕が全面にみられる。99は覆土中からの出土している甕で、口縁は頸部から外反しながら、器壁が薄くなり、口縁端部は丸く終わる。器表面は熱を受けており、肩部外面にハケ目、内面にヘラ削りの痕跡が僅かに残っている。

#### 4区SK1 (第18図、図版17a・b・c)

SK1は調査区中央から東側に位置するSB3の西側壁に近接している。調査区内の尾根頂部の傾斜変換点から南東側の緩やかな斜面に立地している。位置的にSB3重複関係が認められる



第18図 4区SK1～3実測図 (1:30)

が、新旧関係は不明である。

平面形は径が約85cmの円形で、確認面から底面までの深さは34cmである。東側の壁が上端から西側に向かって斜めに掘り込まれている。底面は長径23cm、短径110cmの橢円形となっている。

遺物は出土していない。

#### 4区SK2 (第18図、図版17b)

SK2は調査区南東隅に位置し、調査区内の尾根頂部にあたる平坦面から南東側の緩やかな斜面に立地している。

平面形は長径90cm、短径80cmのほぼ円形で、確認面から底面までの深さは24cmで中央がやや深くなっている。壁は西側の壁に比べて東側の傾斜が緩く掘り込まれている。他の遺構との重複関係はないが、SD1・3と近接している。遺物は出土していない。

#### 4区SK3 (第17図、図版17c)

SK3は調査区中央付近からやや南側に位置し、調査区内の尾根頂部にあたる平坦面から南側の傾斜変換点の斜面に立地している。

平面形は長辺1.15m、短辺55mの方形状で北東側の上端は円形状になっている。底面の中央と北西壁、南東壁、南西壁は基盤層の礫が露出している。底面は西側半分に段が認められ、底から長径30cm程度、深さ13cm程度の小穴が掘り込まれている。確認面から東側の底面までの深さは、33cmである。位置的にSB5と

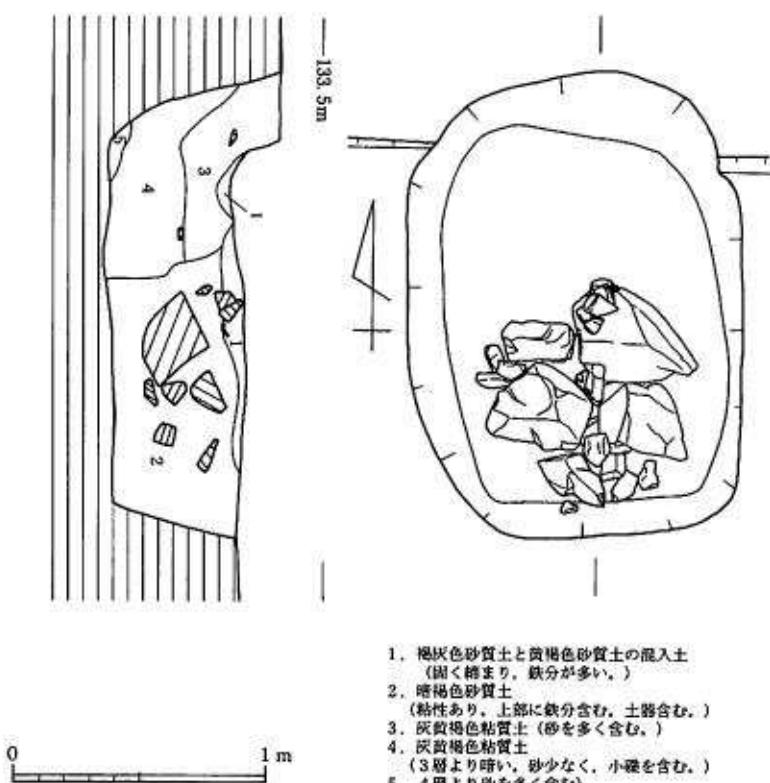
重複関係が認められるが、新旧関係は不明である。

遺物は覆土中から土師器片が出土している。

#### 4区SK4 (第19図、図版18a・b)

SK4は調査区中央から北側に位置し、尾根頂部の平坦面に立地している。上端の北側は上段の水田平坦面に接する。

平面形は長辺約1.5m、短辺約0.9mの隅丸長方形である。底面までの深さは南側の確認面から、50cmである。底面は中央から北側でやや窪んでいるが、ほぼ平



第19図 4区SK4実測図 (1:30)

坦である。土層の観察から、3～5層が埋まつた後に、新たに掘り込まれて、大・小の礫を一括廃棄した状況が窺える。礫の間隙から弥生土器片が出土している。平面での重複はみられない。

#### 4区SD1（第20図、図版18c）

SD1は調査区の南東隅部に位置し、丘陵上の平坦面から南側の緩斜面に立地している。SD1の南側に、SD1と並行してSD2・3が位置している。これらの溝が同時に併存していたか、新旧の関係があったかは不明である。

SD1は東西約4m、最大幅約0.6mである。底は、西側で浅く立ち上がり、中央から東側の最も深い部分で42cmである。壁は南北両側の壁は2段に傾斜で掘り込まれているが、南側の壁の傾斜が緩くなっている。溝は東西で底が立ち上がっているため、水を留める機能であったと思われる。位置的にSB3との重複関係が認められるが、新旧関係は不明である。

遺物は覆土中から土師器片が出土している。

#### 4区SD2（第20図、図版18c）

SD2はSD1の南側に位置し、SD1から南側に約30cm離れている。

現状での長さは1.7mで、溝の東側は確認できなかった。最大幅は0.45mである。深さは3cm程度で、西側が若干浅くなっている。遺物は覆土中から土師器片が出土している。

#### 4区SD3（第20図、図版18c）

SD3はSD2の南側に位置し、SD2から南側に約50cm離れている。柱穴状の小穴2と重複関係にあり、SD3の方が古い。

現状での長さは東西約3.5mで、溝の東側は確認できなかった。深さは、東側で約7cm程度、西側で3cm程度と西側が浅くなっている。遺物は出土していない。

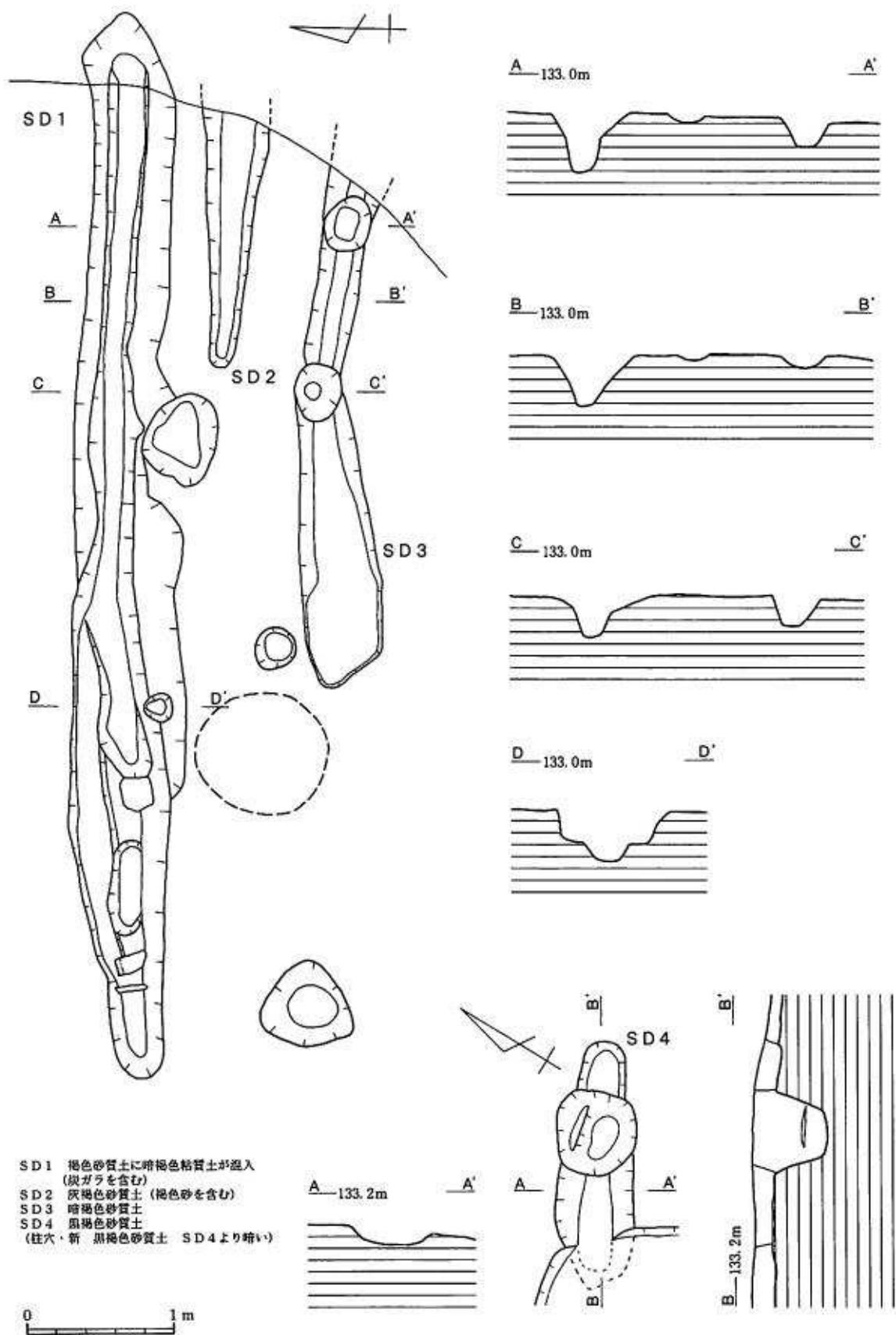
#### 4区SD4（第20図）

SD4は調査区の南側中央付近に位置し、丘陵の先端部傾斜変換点に立地している。SB5と重複関係にあり、SB5より古く、柱穴状の小穴に掘り込まれている。

現状での長さは1.4m、深さは、北側の確認面から13cm程度で、SB5の床面とほぼ同一の高さとなっている。遺物は出土していない。

#### 調査区内出土遺物（第28図100～104、図版27・28）

100・101は土師器高杯で、100は杯部と脚部は差込み法により接合されている。杯部の内面は口縁部との接合面付近は横方向、底部周辺は斜め方向のヘラ磨き、外面は横方向のヘラ磨きが残っている。脚部の内面はヘラ削りの痕跡が、外面はヘラ状の工具による縦方向のナデがみられる。101は杯部片で口縁部との接合部は外面につまみ出して先端部が丸くなる。口縁部の内面にヘラ磨



第20図 4区SD1~4実測図 (1:40)

き状の痕跡が僅かに残っている。外面は斜め方向、杯部外面に横方向のヘラ磨きがみられる。102は台石で使用面は一面のみで、一部が剥離しているが、ほぼ全面を使用している。他の面は割れた状況でなく、自然石を利用したと思われる。重量は3,425gで石材は細粒黒雲母花崗岩である。103は雁股形の鉄鎌で、茎の先を欠いている。鎌身長は4.5cmで闊は断面が0.5cm×0.9cmの長方形となっている。茎は断面形が0.6cmの方形で刃部は左右対称でなく左側を欠いていると思われる。鎌身の中央部は厚みが0.5cmありレンズ状の断面になっている。重量は12.91gである。104は安山岩製の石鎌で抉りが僅かに残り、左側の脚先を欠いている。表面は風化しているため、加工痕が不明瞭であるが丁寧な剥離ではないと思われる。

### 5区（第21図、図版20b・c）

5区は岡野原遺跡の南東隅に位置している。水田の4枚分が調査範囲となっている。

調査区の東側に小河川があり、この小河川と西側の谷に挟まれている小丘陵の頂部平坦面の緩斜面に立地している。試掘時のトレンチで確認していた住居跡は調査対象区外となっている。調査区は東西方向に長く、調査区中央から東側が2面の水田、西側が3面の水田にあたり、それぞれの水田の北側は造成時に基盤層まで掘り下げられている。基盤層は自然石が露出していることから、大きなものは抜き取りが行われていた。（調査区内中央部と南側壁際の3箇所）調査区内の土層は北側で耕作土・床土が約40cmで、下層に20cmの遺物包含層が認められた。調査区南側との包含層除去後の高低差は約1mで南側が低くなっている。

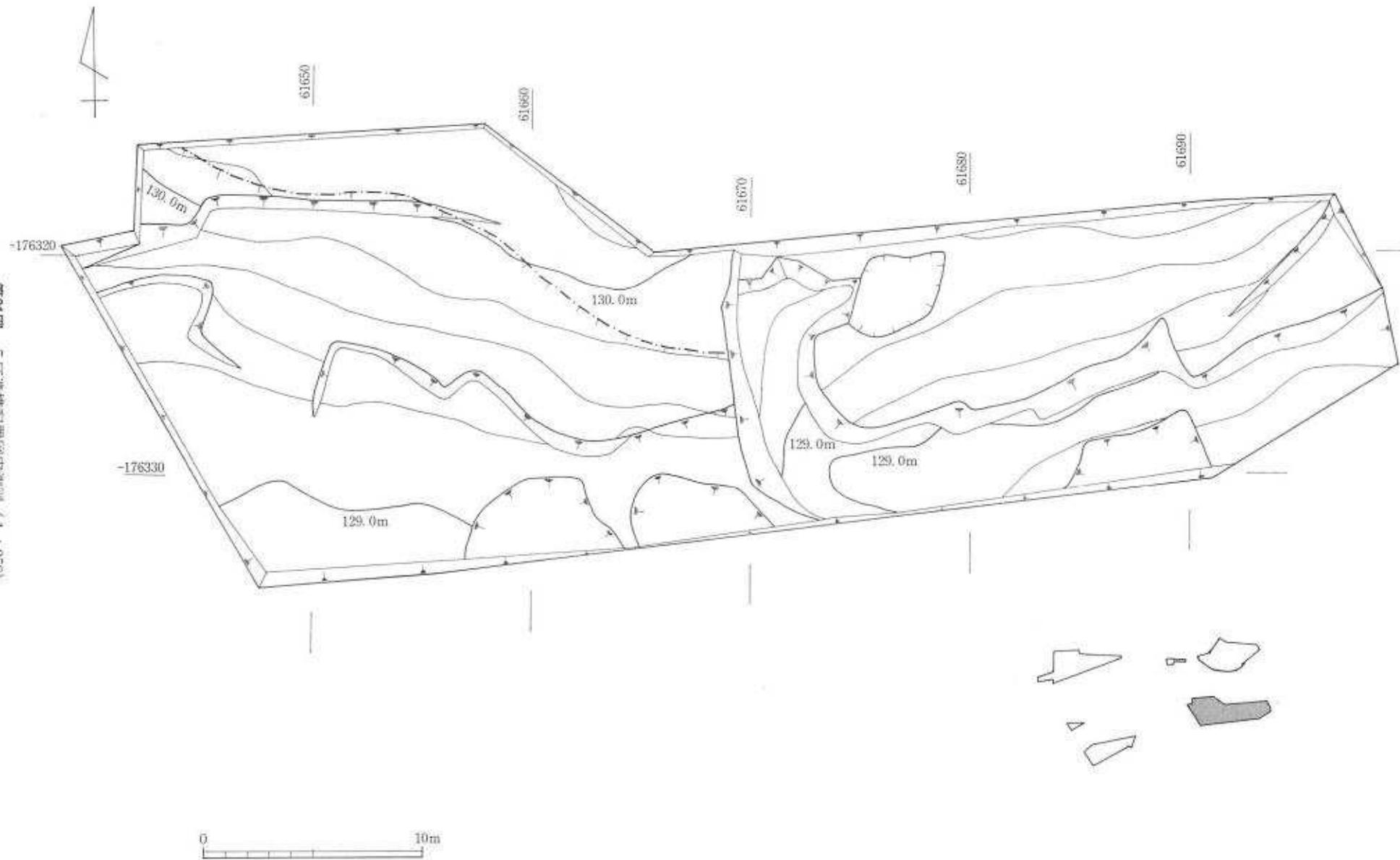
調査の結果、5区内では明確な遺構は確認できなかったが、調査区南側の水田に設定された試掘トレンチから住居跡が確認されていることから、5区は集落内の空間地であった可能性も考えられる。調査区の北西隅から中央部に向かって、緩やかな傾斜の変換点が確認できた。南西側の斜面、南東側の斜面も緩やかであることから、この辺りが4区から続いている小丘陵の先端部にあたり、4区に比べると広い平坦面であったと思われる。

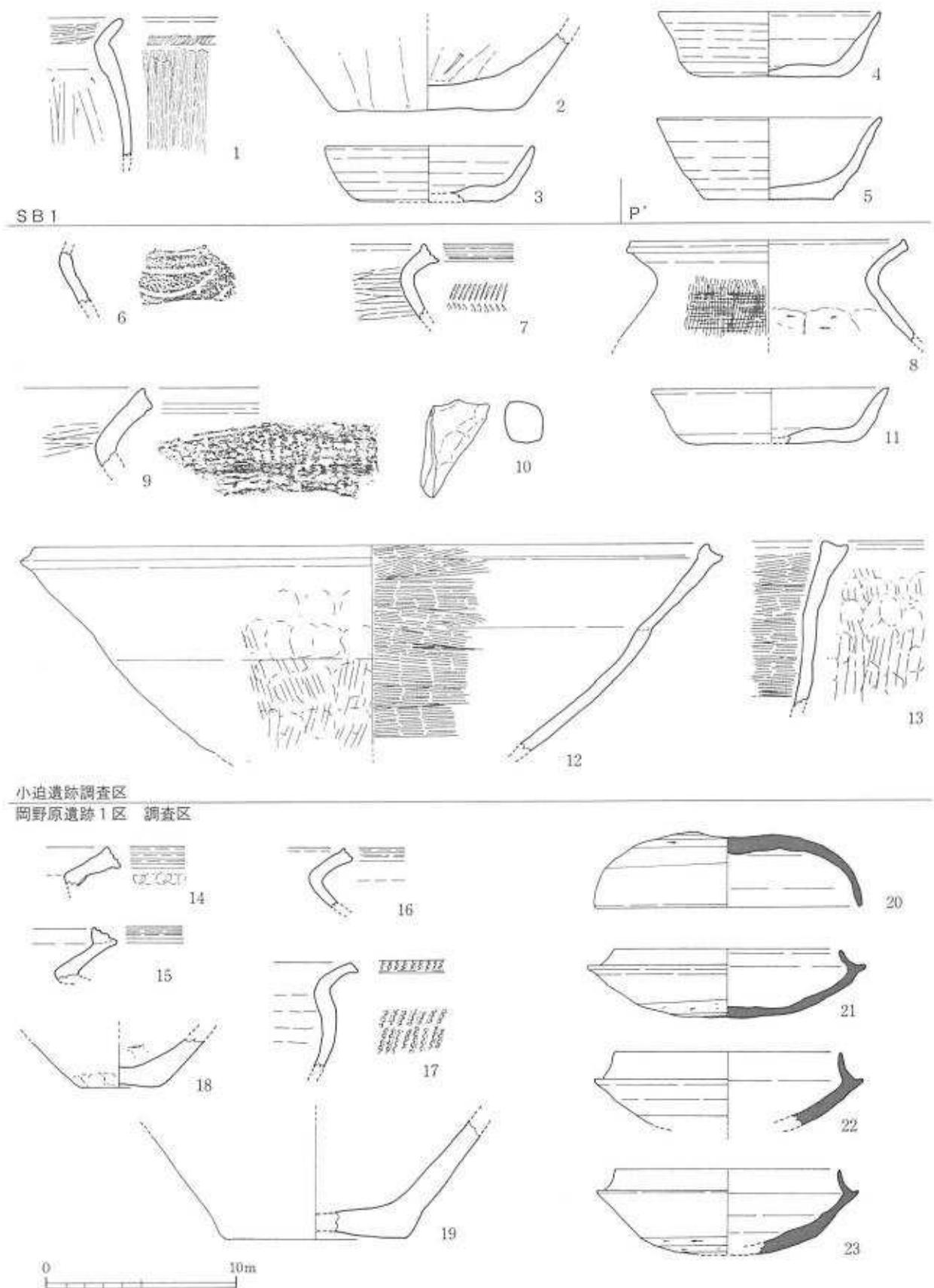
調査区内から、弥生土器片・土師器片・須恵器片が出土している。

### 調査区内出土遺物（第28図105～109、図版28）

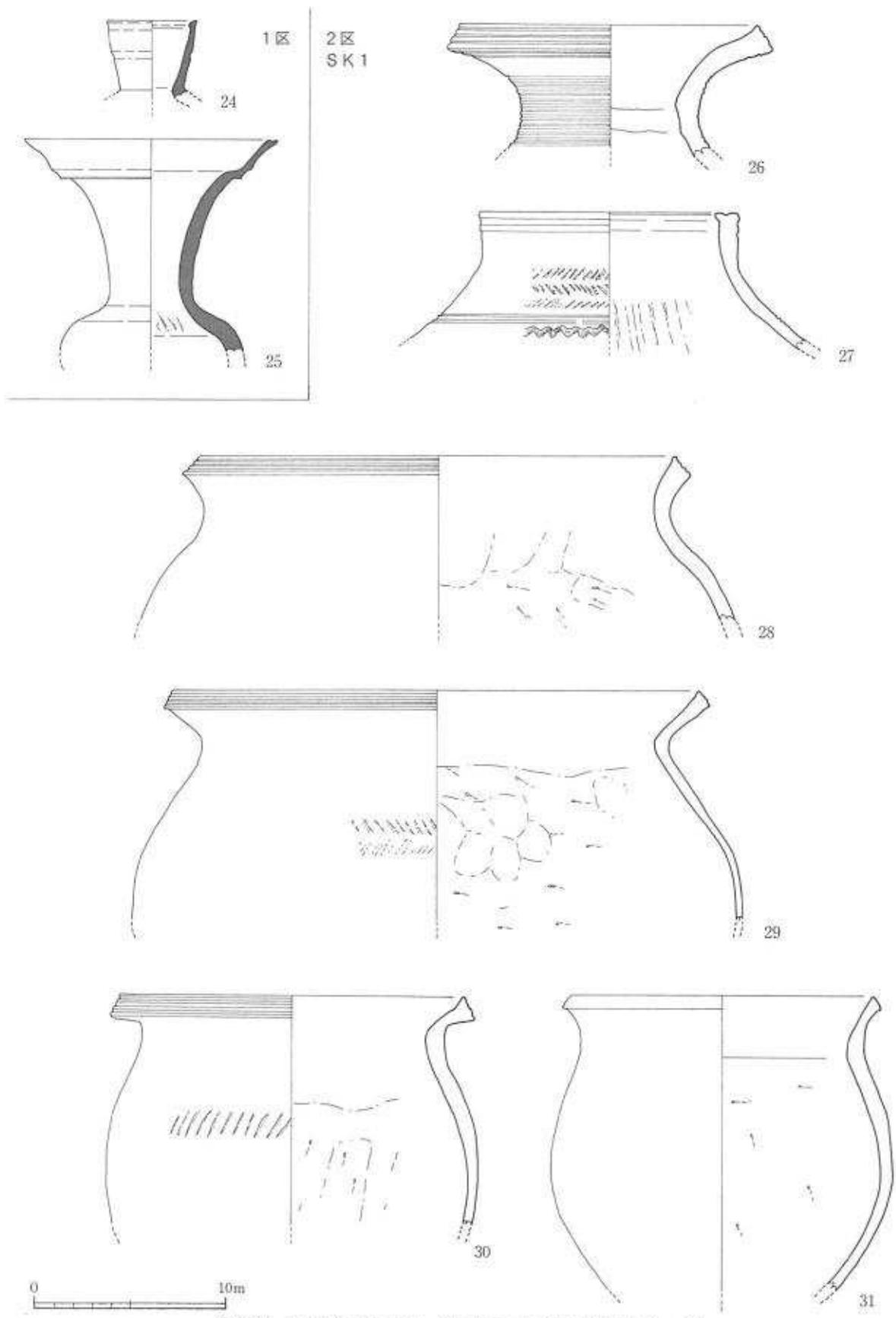
28は弥生土器壺で頸部に貼り付けによる突帯がみられる。突帯の口縁側を凹線状に窪ませている。口縁部は外湾して立ち上がり、端部下部に粘土を貼り付けて、上部は僅かにつまみ出している。端部には3条の凹線文を施し、口縁内面に沈線状の条痕がみられる。口縁部は端部付近に指頭圧痕が残り、頸部までヘラ磨きが施されている。29は土師器壺で口縁部は頸部から強く外反し、端部は面を持っている。口縁部は内外面ともに横ナデ、外面に工具痕がみられる。肩部内面に斜め方向のヘラ削りが残る。107は弥生時代中期頃の壺口縁部片と思われるもので、頸部の突帯が断面が三角形に貼り付けている。内面はナデと思われる。108・109は弥生土器底部で、108は器壁が厚く大形のものと思われ、粘土紐の貼付け部で上部が剥離している。外面は斜め方向のヘラ磨き痕が残っている。109は底部の底面に同一方向の、胴部の外面に斜め方向のヘラ状の工具によるナデがみられる。内面は底部付近で不定方向のヘラ削り、上位で縦方向のヘラ削り痕が残っている。

第21図 5区遺構配置実測図 (1 : 250)

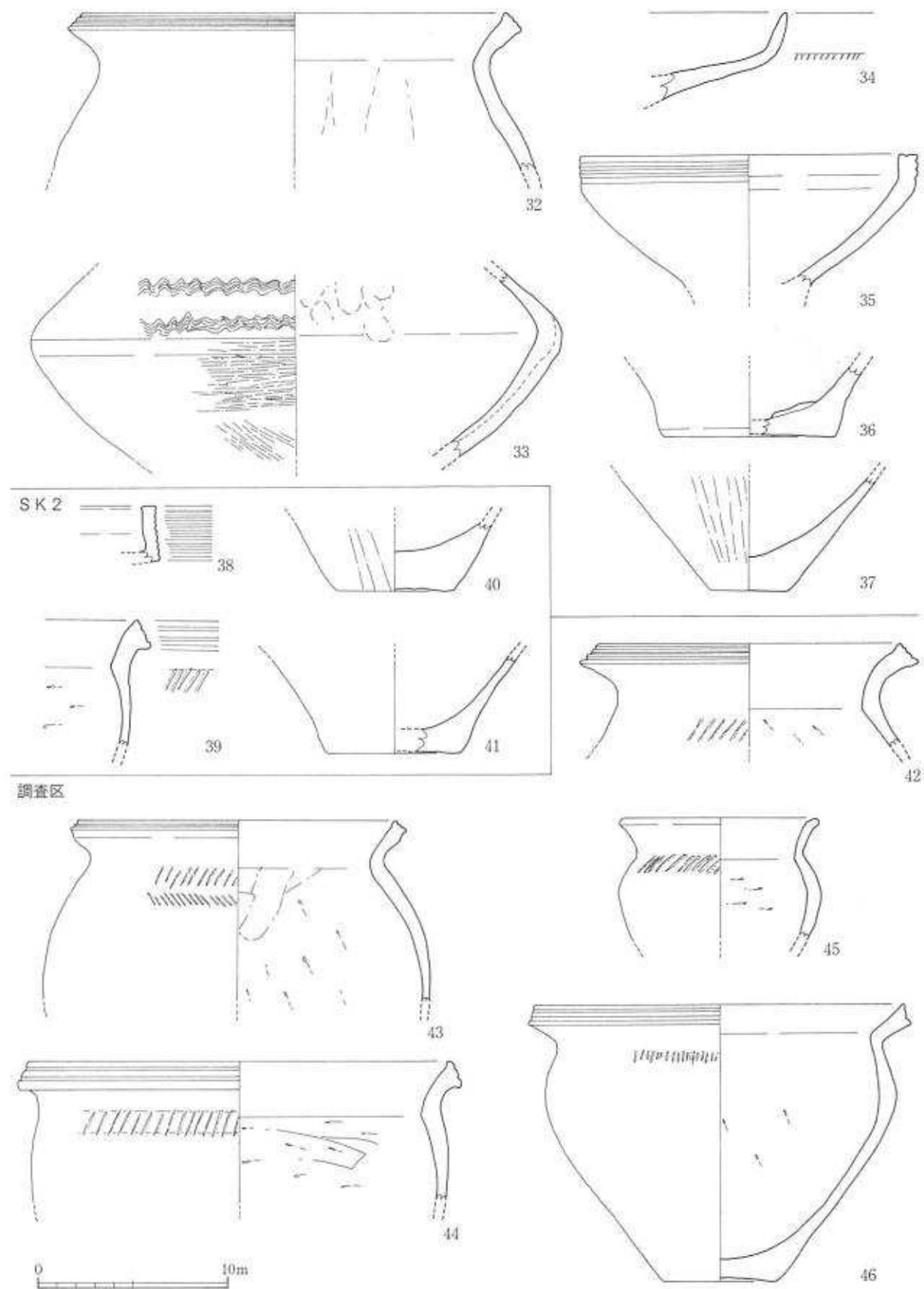




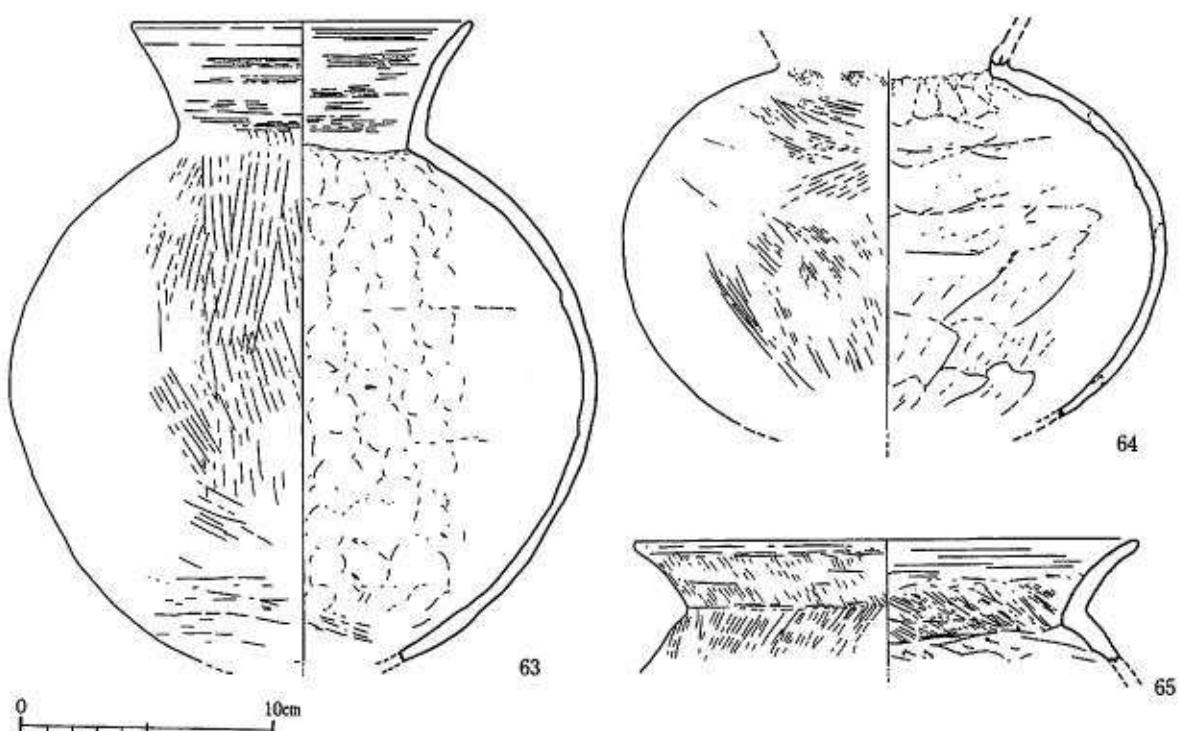
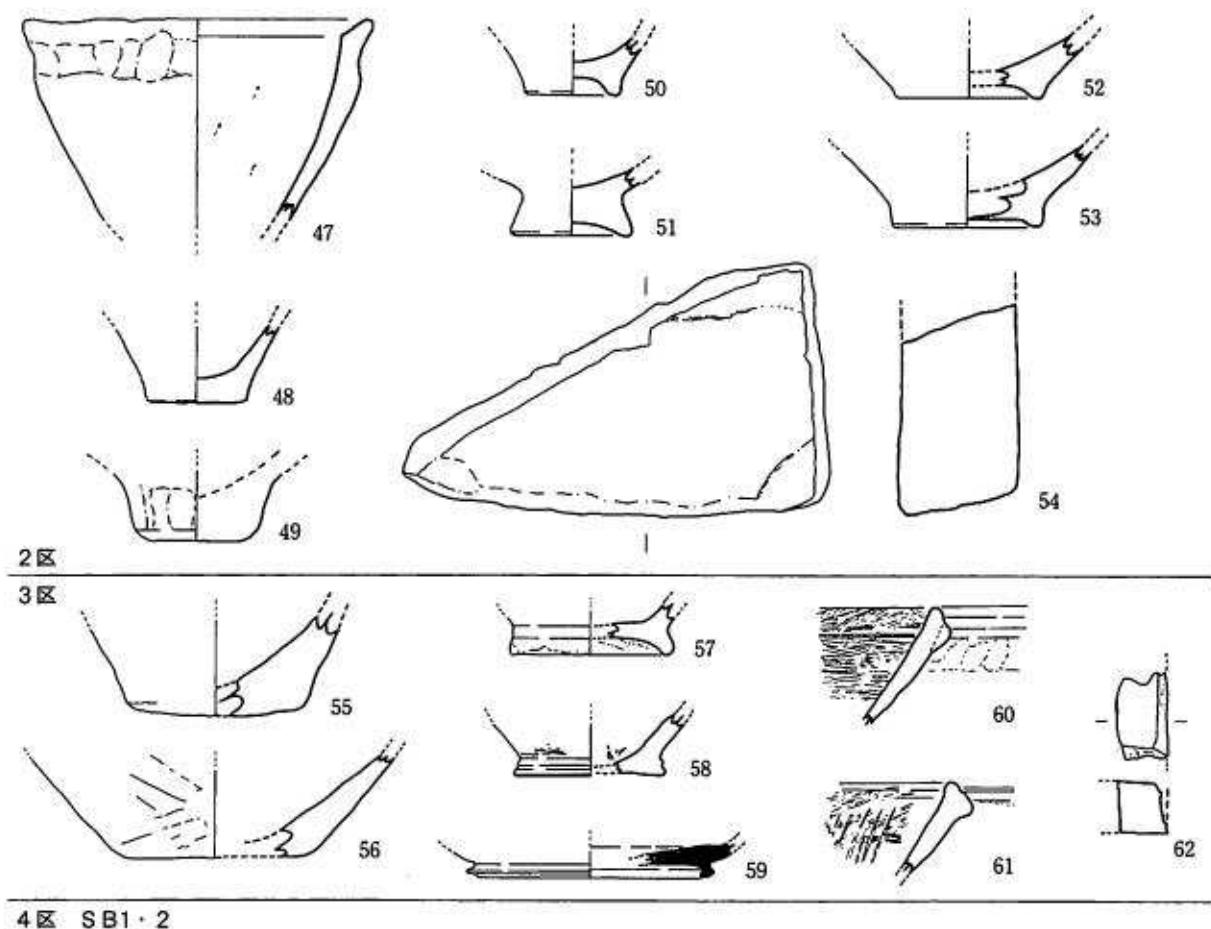
第22図 小迫遺跡・岡野原遺跡1区内出土遺物実測図 (1 : 3)



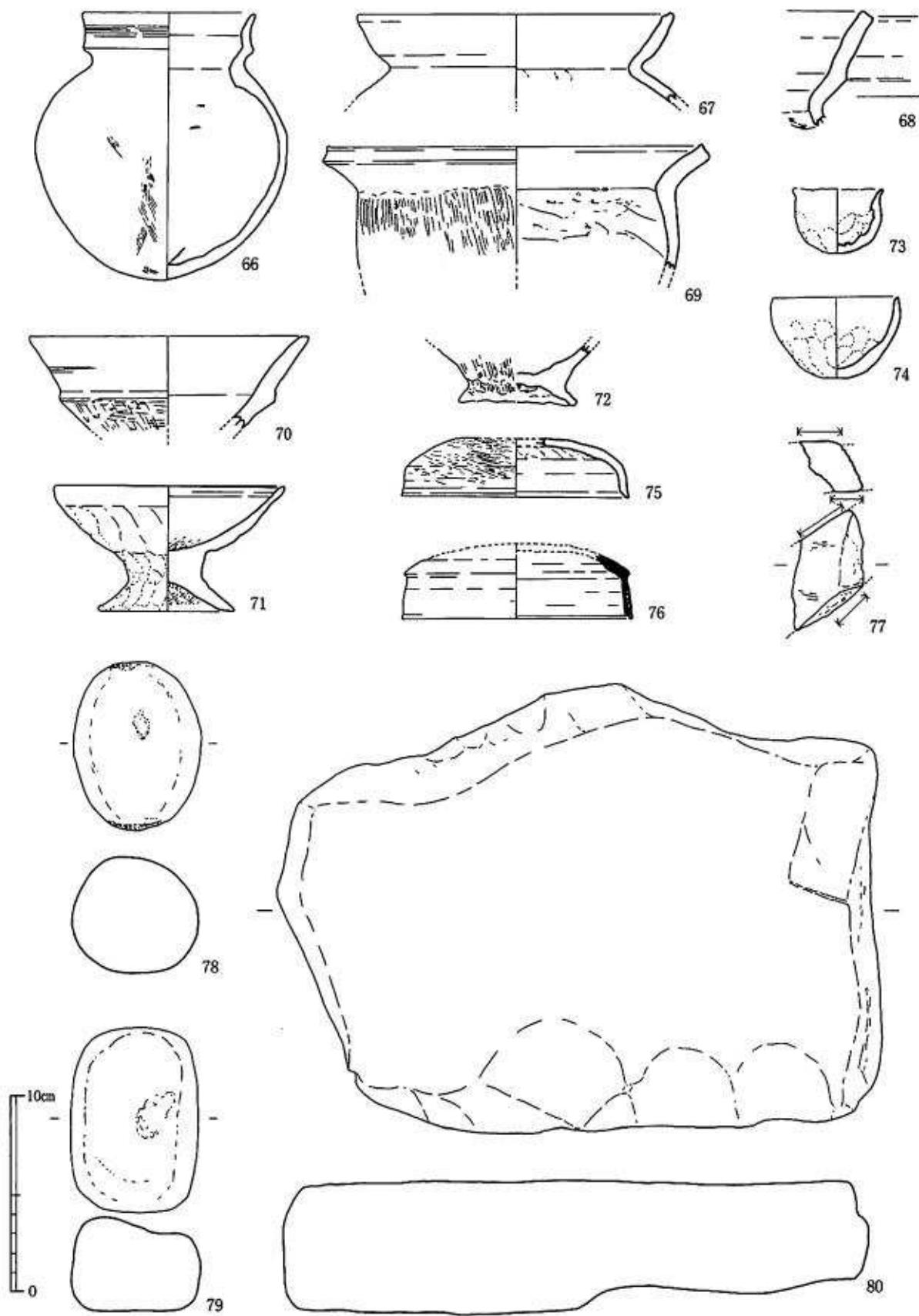
第23図 開野原遺跡1区内、2区SK1出土遺物実測図(1:3)



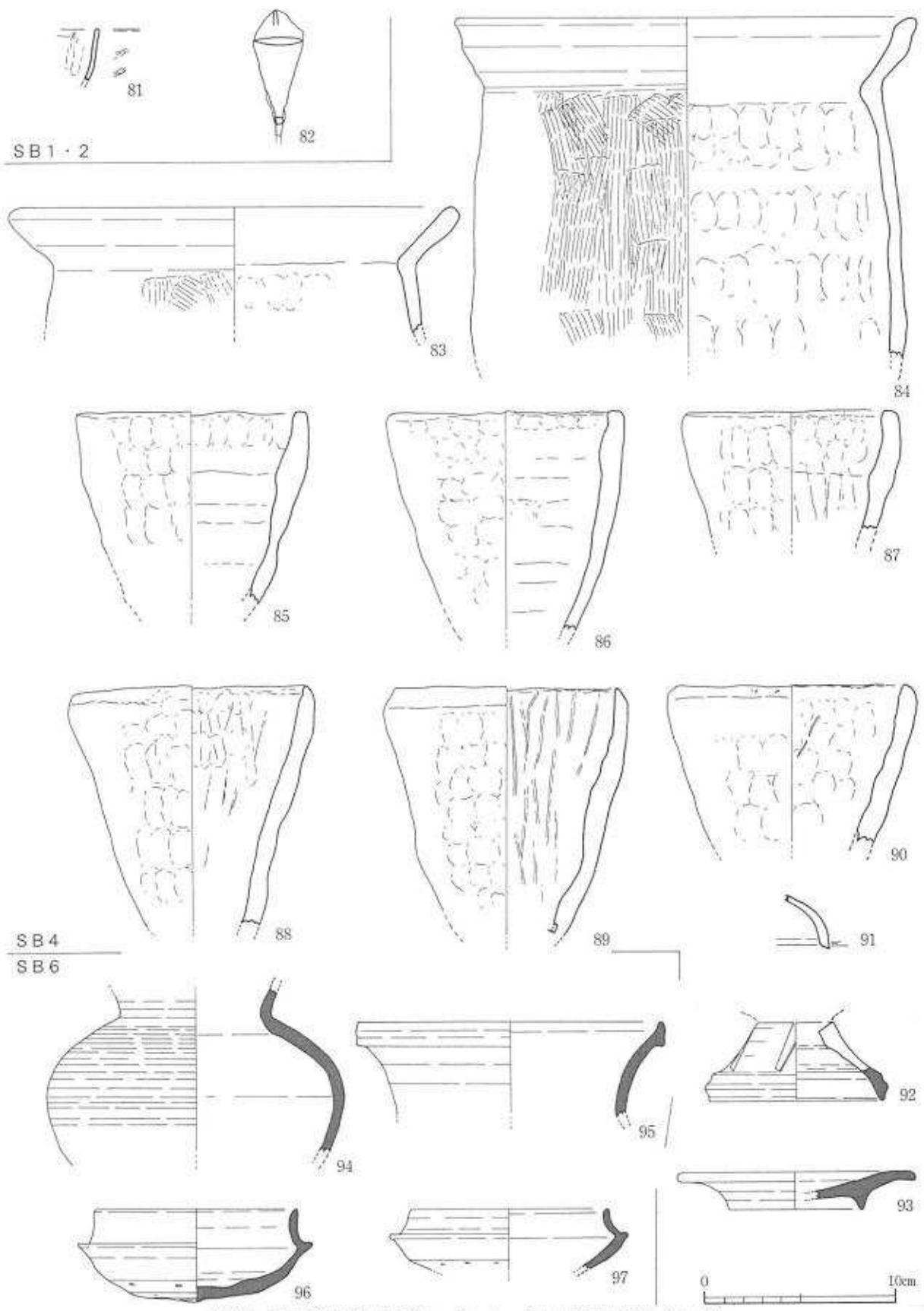
第24図 岡野原遺跡2区SK2、2区内出土遺物実測図(1:3)



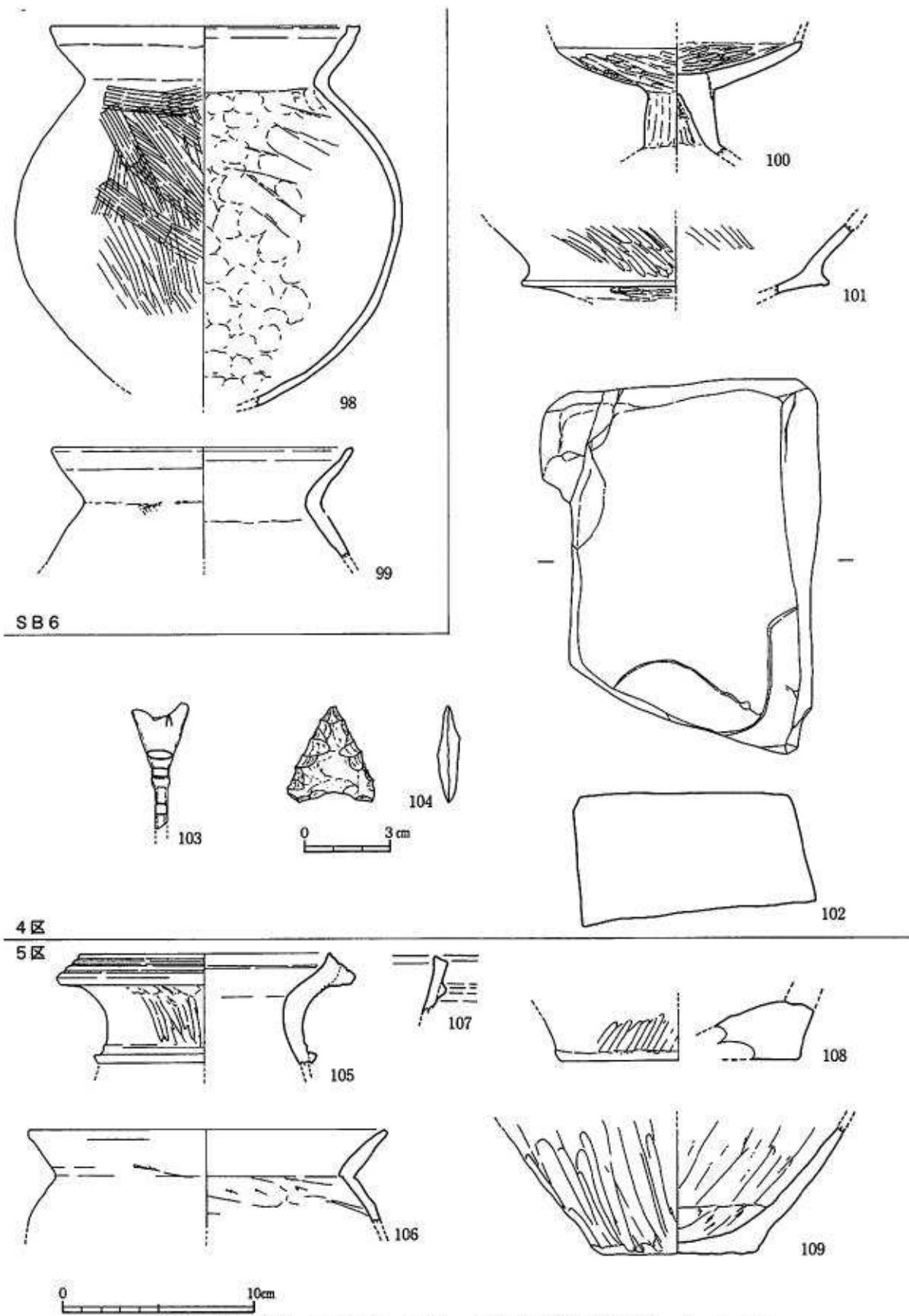
第25図 岡野原2区内・3区内、4区SB1・2出土遺物実測図 (1 : 3)



第26図 岡野原遺跡SB 1・2出土遺物実測図 (1:3)



第27図　岡野原遺跡4区SB1・2・4・6出土遺物実測図 (1:3)



第28図 岡野原遺跡4区SB 6, 4区内, 5区内出土遺物実測図 (1 : 1, 1 : 3)

第1表 出土土器観察表1

( )の数値は復元値

報告番号	出土地点	遺構番号	種別	器種	口径	最大径 (頸・体部)	底径 掘径	器高・ 残存高	手法の特徴	胎土	焼成	色調
1	小迫	S B 1	土師器	甕	—	—	—	7.3	口 内一ハケ目、 外一横ナデ、胴 内一ヘラ削り後ヘ ラ磨き状のナデ、 外一細かいハケ目	1 mm程度 の砂粒が 目立つ	良好	外 黒褐色 内 明褐色 断 暗褐色
2	小迫	S B 1	弥生土器	底部	—	—	(9.4)	3.5	底 内一ヘラ削り、 外一板状工具によ るナデ	3 mm程度 の砂粒が 目立つ	やや良	外内 灰白 色 断 黑色
3	小迫	S B 1	土師質土器	皿	(11.0)	—	(7.0)	3.0	口・体部 内・外 一回転ナデ、黒斑 底部 内一回転ナ デ、外一回転糸切 り	3 mm程度 の砂粒が 目立つ	良好	にぶい橙色
4	小迫	P 1	土師質土器	杯	11.7	—	7.3	3.4	口・体部 内・外 一回転ナデ、底部 内一回転ナデ、外 一回転糸切り	1 mm程度 の砂粒が 目立つ	良好	橙色
5	小迫	P 1	土師質土器	杯	(12.0)	—	(6.8)	4.3	口・体部 内・外 一回転ナデ、黒斑 底部 内一回転ナ デ、外一回転糸切 り	0.5 mm程 度の砂粒 が目立つ	良好	にぶい橙色
6	小迫	調査区	縄文土器	肩部片	—	—	—	2.7	内一丁寧なナデ、 煤付着、外一ヘラ 状工具により区画、 磨消縄文	0.5 mm程 度の砂粒 が目立つ	良好	暗褐色
7	小迫	調査区	弥生土器	甕	—	—	—	4.0	口端一3条の回線 文、口 内外一横 ナデ、頸 内一横 方向のヘラ磨き、 外一ヘラ状工具に よる2列の刺突文	1 mm程度 の砂粒が 目立つ	良好	橙色
8	小迫	調査区	土師器	甕	(14.4)	—	—	5.4	口 内外一横ナデ、 肩 内一ヘラ削り、 外一ハケ目が格子 目状に残る。煤が 付着	密	良好	明褐色
9	小迫	調査区	土師質土器	甕口縁	—	—	—	4.2	口 内一ヘラ磨き 状の条痕、外一格 子目状のタタキ	密	やや良	黒褐色
10	小迫	調査区	土師器	瓶把手	—	—	—	4.9	内外一指頭による 成形	0.5~1 mm程度の 砂粒が目 立つ	良好	灰白色

第2表 出土土器観察表2

( ) の数値は復元値

報告番号	出土地点	遺構番号	種別	器種	口径	最大径(胴・体部)	底径 裾径	器高・ 残存高	手法の特徴	胎土	焼成	色調
11	小迫	調査区	土師質土器	皿	(12.5)	-	(8.4)	2.8	口・体部 内・外一回転ナデ、底部内一回転ナデ、外一回転糸切り	密	やや良	にぶい橙色
12	小迫	調査区	土師質土器	土鍋	(36.0)	-	-	10.9	口 内一細かいハケ目、外一横ナデ、体 内一細かいハケ目、外一指頭による成形後、荒いハケ目	密	良好	外 灰褐色 内 明褐色 断 黒褐色
13	小迫	調査区	土師質土器	土鍋	-	-	-	8.6	内一ハケ目、外一指頭による成形の後荒いハケ目、煤付着	密	良好	外 黑褐色 ~明黄褐色 内 褐灰色 断 黑色
14	岡野原1区	調査区	弥生土器	口縁	-	-	-	2.1	口端-3条の凹線文、口 内一横ナデ、頸 外一粘土を貼付け後ヘラ状工具による刺突文	0.5 mm程度の砂粒が目立つ	やや良	外 赤橙色 内 灰赤色 断 褐灰色
15	岡野原1区	調査区	弥生土器	口縁	-	-	-	2.7	口端-3条の凹線文、口 内外一横ナデ	0.5 mm程度の砂粒が目立つ	やや良	外内 灰褐色 断 黑褐色
16	岡野原1区	調査区	弥生土器	口縁	-	-	-	3.2	口端-2条の凹線文、口 内外一横ナデ	0.5 mm程度の砂粒が目立つ	やや良	外断 明赤褐色 内 橙色
17	岡野原1区	調査区	弥生土器	鉢	-	-	-	5.5	口端-貝殻復縁による刺突文、口 内外一横ナデ、肩 内一横方向のナデ、外一貝殻復縁による2列の刺突文	1 mm程度の砂粒が目立つ	不良	灰黄褐色
18	岡野原1区	調査区	弥生土器	底部	-	-	(4.6)	2.5	内一ヘラ削り後ナデ、外一指頭による成形痕、二次焼成を受ける。	0.5~1 mm程度の砂粒が多い。	やや良	外 明灰褐色 内断 橙色
19	岡野原1区	調査区	弥生土器	底部	-	-	(9.6)	5.3	内外一ナデ、底は瘤ませている。	0.5 mm程度の砂粒が目立つ	やや良	外 浅橙色 内 灰白色 断 黑褐色
20	岡野原1区	調査区	須恵器	杯蓋	(14.0)	-	-	4.0	口~体 内外一回転ナデ、天 内一回転ナデ、外一ヘラ削り(時計廻り)	1 mm程度の砂粒が目立つ	良好	灰色
21	岡野原1区	調査区	須恵器	杯身	12.0	-	13.8 受部	3.6	口~体 内外一回転ナデ、底 内一回転ナデ、外一ヘラ削り(時計廻り)	5 mm程度の砂粒が多い	良好	灰色

第3表 出土土器観察表3

( ) の数値は復元値

報告番号	出土地点	遺構番号	種別	器種	口径	最大径 (腰・体部)	底径 据径	器高・ 残存高	手法の特徴	胎土	焼成	色調
22	岡野原1区	調査区	須恵器	杯身	(12.0)	—	—	3.9	口～体 内外一回転ナデ	精緻	良好	明緑灰色
23	岡野原1区	調査区	須恵器	杯身	(12.0)	—	—	4.5	口～体 内外一回転ナデ、底 内一回転ナデ、外へラ削り(時計廻り)	精緻	良好	灰白色
24	岡野原1区	調査区	須恵器	口縁	(4.6)	—	—	4.2	内一回転ナデ、外一回転ナデ、凹線状の条痕	精緻	良好	灰色～青灰色
25	岡野原1区	調査区	須恵器	甌	(13.4)	—	—	11.0	口～頸 内一回転ナデ、外一回転ナデ、肩 内一絞り目、回転ナデ、外一回転ナデ	精緻	良好	灰色
26	岡野原2区	SK1	弥生土器	壺	16.1	9.5 頸部		6.5	口 内一横ナデ、外一3条の浅い凹線、端一3条の凹線、頸 内一ナデ、外一13状の凹線	1mm以下の砂粒を含む	良好	黄褐色～明褐色
27	岡野原2区	SK1	弥生土器	壺	13.6	—	—	6.7	口 内一横ナデ、外一2条の凹線、端一1状の凹線、頸 内一横ナデ、外一くし状工具による3条の刺突文、肩 内一しばり目、外一3条の擬凹線、波状文	1mm以下の砂粒を含む	良好	黄褐色
28	岡野原2区	SK1	弥生土器	甌	(25.0)	—	—	8.5	口 内外一横ナデ、端一3条の凹線、肩 内一へラ削り、外一不明(ナデ)	3mm程度の砂粒が目立つ	良好	外 黄褐色 内 明褐色
29	岡野原2区	SK1	弥生土器	甌	(27.8)	(32.2)		12.0	口 内外一横ナデ、端一3条の凹線、肩 内一へラ削り、指頭圧痕が残る。外一くし状工具による刺突文が2条	1mm以下の砂粒を含む	良好	黄褐色
30	岡野原2区	SK1	弥生土器	甌	(18.2)	(19.7)	—	12.0	口 内外一横ナデ、端一3条の凹線、肩 内一ナデ、へラ削り、外一へラ状工具による刺突文、一部に煤が付着	1mm以下の砂粒を含む	良好	黄褐色

第4表 出土土器観察表4 ( ) の数値は復元値

報告番号	出土地点	遺構番号	種別	器種	口径	最大径(肩・体部)	底径 裾径	器高・ 残存高	手法の特徴	胎土	焼成	色調
31	岡野原2区	SK1	弥生土器	甕	(16.0)	(18.0)	—	15.5	口 内外一横ナデ、 肩以下 内一ヘラ削り後ナデ、外一 丁寧なナデ、一部に黒斑	1mm以下の砂粒を含む	良好	黄褐色
32	岡野原2区	SK1	弥生土器	甕	(22.6)	—	—	8.3	口 内外一横ナデ、 端一3条の凹線、 肩 内一ヘラ削り、 外一ナデ	1mm以下の砂粒を含む	良好	黄褐色
33	岡野原2区	SK1	弥生土器	台付鉢?	—	(28.1)	—	9.7	肩 内一指頭による成形の後ナデ、 外一2状の波状文、 体 内一ナデ、外一ヘラ磨き	1mm以下の砂粒を含む	良好	黄褐色
34	岡野原2区	SK1	弥生土器	高杯 杯部	—	—	—	4.6	口 内一ナデ、外一横ナデ	1mm以下の砂粒を含む	良好	黄褐色
35	岡野原2区	SK1	弥生土器	高杯 杯部	(18.0)	—	—	7.0	口 内一横ナデ、 外一3条の凹線、 横ナデ、端一1状の凹線、体 内外一ナデ	1mm以下の砂粒を含む	良好	淡黄褐色
36	岡野原2区	SK1	弥生土器	底部	9.6	—	—	3.4	底 内外一ナデ	3mm以下の砂粒を含む	良好	外 明黄褐色 内 淡黄褐色
37	岡野原2区	SK1	弥生土器	底部	4.0	—	—	4.0	体 内一ナデ、外一ヘラ磨き、底 内外一ナデ	5mm以下の砂粒を含む	良好	淡黄褐色
38	岡野原2区	SK2	弥生土器	壺口縁	—	—	—	3.0	口 内一横ナデ、 外一8条の凹線	3mm以下の砂粒を含む	良好	黄褐色
39	岡野原2区	SK2	弥生土器	甕	—	—	—	7.7	口 内外一横ナデ、 端一2条の凹線、 肩 内一ヘラ削り、 外一ヘラ状工具による刺突文	5mm以下の砂粒を含む	良好	淡黄褐色
40	岡野原2区	SK2	弥生土器	底部	—	—	6.4	3.6	体 内一ナデ、外一ヘラ磨き、底 内一ナデ、外一未調整	1mm以下の砂粒を含む	良好	外 黄褐色 内 暗黄褐色
41	岡野原2区	SK2	弥生土器	底部	—	—	(7.0)	5.0	体 内一ナデ、外一ヘラ磨き、底 外一ナデ	3mm以下の砂粒を含む	良好	暗黄褐色
42	岡野原2区	調査区	弥生土器	甕	(16.0)	—	—	5.3	口 内外一横ナデ、 端一3条の凹線文、 肩 内一ヘラ削り、 外一ヘラ状工具による刺突文、煤付着	1mm以下の砂粒を含む	良好	暗褐色

第5表 出土土器観察表5

( ) の数値は復元値

報告番号	出土地点	追構番号	種別	器種	口径	最大径 (肩・体部)	底径 裾径	器高・ 残存高	手法の特徴	胎土	焼成	色調
43	岡野原 2区	調査区	弥生 土器	甕	(17.0)	(20.7)	—	9.5	口 内外一横ナデ, 端-2条の凹線文, 肩 内-ナデ, ヘラ削り, 外-ヘラ 状工具による2条 の刺突文, 内-ヘ ラ削り	1mm以下 の砂粒を 含む	良好	黄褐色
44	岡野原 2区	調査区	弥生 土器	甕 (鉢)	(22.6)	(22.2)	—	7.5	口 内外一横ナデ, 端-2条の凹線文, 肩 内-ヘラ削り, 外-ヘラ状工具に よる刺突文, ナデ	1mm以下 の砂粒を 含む	良好	暗褐色
45	岡野原 2区	調査区	弥生 土器	甕	(10.2)	(10.8)	—	6.5	口 内外一横ナデ, 肩 内-ヘラ削り, 外-ヘラ状工具に よる刺突文, ナデ	3mm以下 の砂粒を 含む	良好	淡黄褐色
46	岡野原 2区	調査区	弥生 土器	鉢	(19.8)	(18.6)	(6.0)	14.7	口 内外一横ナデ, 端-2条の凹線文, 肩 内-ヘラ削り, 外-ヘラ状工具に よる刺突文, 体- 底 内-ヘラ削り, ナデ, 外-ナデ	1mm以下 の砂粒を 含む	良好	黄褐色
47	岡野原 2区	調査区	弥生 土器	鉢	(14.0)	—	—	8.0	口 内外一横ナデ, 頸 内-ヘラ削り 後ナデ, 外-指頭 圧痕が残る。体 内-ヘラ削り後ナ デ, 外-ナデ, 黒 斑がみられる。	3mm以下 の砂粒を 含む	良好	外 明褐色 内 断淡黄 褐色
48	岡野原 2区	調査区	弥生 土器	底部	4.0	—	—	3.0	体 内-荒いナデ, 外-丁寧なナデ, 底 外-ナデ	1mm程度 の砂粒を 含む	良好	淡黄褐色
49	岡野原 2区	調査区	弥生 土器	底部	5.0	—	—	2.7	体 内-?離, 外- 指頭による成形, 底 外-ナデ	1mm程度 の砂粒を 含む	良好	黄褐色
50	岡野原 2区	調査区	弥生 土器	底部	4.0	—	—	1.9	底 内-ナデ, 外 -ナデ	1mm程度 の砂粒を 含む	良好	黄褐色
51	岡野原 2区	調査区	弥生 土器	底部	5.0	—	—	2.2	底 内外-ナデ	3mm以下 の砂粒を 含む	良好	暗褐色
52	岡野原 2区	調査区	弥生 土器	底部	(6.0)	—	—	2.0	底 内外-ナデ	1mm程度 の砂粒を 含む	良好	外断 黄褐 色 内 黑色

第6表 出土土器観察表6

( ) の数値は復元値

報告番号	出土地点	遺構番号	種別	器種	口径	最大径 (頸・体部)	底径 裾径	器高・ 残存高	手法の特徴	胎土	焼成	色調
53	岡野原2区	調査区	弥生土器	底部	(6.0)	—	—	3.0	底 内外一ナデ	3mm以下の砂粒を含む	良好	淡黄褐色
55	岡野原3区	調査区	弥生土器	底部	(6.7)	—	—	3.3	底 内外一ナデ	1mm程度の砂粒が目立つ	やや良	淡褐色
56	岡野原3区	調査区	弥生土器	底部	(7.2)	—	—	3.9	体 内一ナデ、外一丁寧なナデ	0.5mm程度の砂粒が目立つ	やや良	外 淡茶褐色 内 灰褐色
57	岡野原3区	調査区	弥生土器	底部	(5.8)	—	—	2.0	底 内一指頭圧痕が残る。外一ナデ	1mm程度の砂粒が目立つ	やや良	淡赤褐色
58	岡野原3区	調査区	弥生土器	底部	(5.8)	—	—	2.5	底 内一ヘラ削り後ナデ、外一丁寧なナデ、回線状の溝みが残る。	精緻	良好	黒褐色～茶褐色
59	岡野原3区	調査区	須恵器	杯身		—	(9.0)	1.5	底 内外一回転ナデ、貼付け高台	精緻	やや良	灰色
60	岡野原3区	調査区	土師質土器	土鍋	—	—	—	4.6	口 内一ハケ目、条痕が残る。外一指頭による成形、ナデ	精緻	良好	淡茶褐色
61	岡野原3区	調査区	土師質土器	土鍋	—	—	—	3.6	口 内一ハケ目、ヘラ状工具による斜め方向の条痕、外一ナデ	精緻	良好	淡褐色
63	岡野原4区	S B 1 ・2	土師器	壺	13.6	(23.6)		25.5	口 内外一強い横ナデ、肩～胴～底内一ヘラ削りの後ナデ、外一ハケ目の後ナデ	1mm程度の砂粒が目立つ	良好	外 にぶい 黄褐色・黒褐色 内 黒褐色 断にぶい 黄褐色
64	岡野原4区	S B 1	土師器	壺	—	(21.8)	—	14.8	肩 内一指頭による成形の後ナデ、外一ハケ目、胴内一ヘラ削り後ナデ、外一ハケ目き	1mm以下の砂粒が目立つ	やや良	暗褐色
65	岡野原4区	S B 1 ・2	土師器	甕	(20.0)	—	—	4.9	口 内一横ナデ、外一ハケ目、煤付着、肩 内一ヘラ削り、外一ハケ目、煤付着	精緻	良好	外 灰褐色～黒褐色～赤褐色 内 灰褐色
66	岡野原4区	S B 2	土師器	甕	9.1	13.6	—	13.8	口 内外一強い横ナデ、肩～胴 内一ヘラ削りの後、指頭による調整、外一ハケ目の後ナデ、胴下位 内一ハケ目、外一ヘラ削り	0.5～1mm程度の砂粒が目立つ	やや良	灰白色

第7表 出土土器観察表7

( ) の数値は復元値

報告番号	出土地点	遺構番号	種別	器種	口径	最大径(頭・体部)	底径 裾径	器高・残存高	手法の特徴	胎土	焼成	色調
67	岡野原4区	S B 1 · 2	土師器	壺	(16.4)			4.3	口 内一ナデ、外一横ナデ・一部に煤が付着、肩部内一ヘラ削・ナデ外一ナデ	0.5mm程度の砂粒を含む	良好	淡赤褐色
68	岡野原4区	S B 1 · 2	土師器	壺(鉢)	(19.5)	—	—	6.4	口 内外一横ナデ、肩内一ヘラ削り、外一ハケ目、前面に煤付着	1mm以下の砂粒が目立つ	やや良	青灰色
69	岡野原4区	S B 1 · 2	土師器	壺口縁	—	—	—	5.9	口 内外一横ナデ	精緻	やや良	青灰色
70	岡野原4区	S B 1 · 2	土師器	高杯 杯部	(14.5)	—	—	4.9	口 内外一横ナデ、一部に黒斑、体内一横ナデ、外一ヘラ磨き	0.5mm程度の砂粒が目立つ	やや良	青灰色
71	岡野原4区	S B 1 · 2	土師器	高杯	(12.0)	—	7.0	6.5	口 内一ハケ目?, 外一指頭によるナデ、体内一くし状工具の痕跡、外一指頭によるナデ、一部に黒斑、柱~裾内一ハケ目、指頭による成形痕	1mm以下の砂粒が目立つ	良好	淡褐色
72	岡野原4区	S B 1 · 2	土師器	底部	—	—	6.2	3.1	体 内一ナデ、外一ハケ目、底内一ナデ、外一丁寧なナデ	精緻	やや良	外 淡褐色 内 茶褐色
73	岡野原4区	S B 1 · 2	土師器	ミニ チュア 椀	(4.6)	—	—	3.3	内外一指頭による成形痕	精緻	やや良	茶褐色
74	岡野原4区	S B 1 · 2	土師器	ミニ チュア 椀	(6.5)	—	—	4.2	内外一指頭による成形の後ナデ、底外一黒斑	1mm以下の砂粒が目立つ	やや良	淡赤褐色
75	岡野原4区	S B 1 · 2	土師器	杯蓋	(11.7)	—	—	3.5	口 内一回転ナデ後、丁寧なナデ、外一回転ナデ、体~天 内一丁寧なナデ、外一ヘラ磨き状の条痕	精緻	良好	外 暗茶褐色 内 淡褐色
76	岡野原4区	S B 1 · 2	須恵器	杯蓋	(12.0)	—	—	3.3	内外一回転ナデ	精緻	良好	淡茶褐色
81	岡野原4区	S B 1 · 2	土師器	製塩 土器	—	—	—	2.7	内一ナデ、ハケ目状の痕跡、外一ハケ目	精緻	良好	黒褐色 断 淡褐色

第8表 出土土器観察表8

( ) の数値は復元値

報告番号	出土地点	遺構番号	種別	器種	口径	最大径 (胴・体部)	底径 裾径	器高・ 残存高	手法の特徴	胎土	焼成	色調
83	岡野原4区	S B 4	土師器	甕	(22.6)	—	—	6.2	口 内外一横ナデ、肩 内一指頭による成形、外一ハケ目	1 mm程度の砂粒が目立つ	良好	明赤褐色
84	岡野原4区	S B 4	土師器	甕	24.0	23.0	—	17.8	口 内外一横ナデ、肩～体部 内一指頭による成形後、丁寧なナデ、外一ハケ目	3 mm程度の砂粒が目立つ	良好	明褐色
85	岡野原4区	S B 4	土師器	製塩土器	12.1	—	—	10.1	口～体 内外一指頭に成形の後ナデ	1 mm程度の砂粒が目立つ	やや良	赤褐色
86	岡野原4区	S B 4	土師器	製塩土器	12.1	—	—	11.4	口～体 内外一指頭に成形の後ナデ	0.5～1 mm程度の砂粒が目立つ	やや良	赤褐色
87	岡野原4区	S B 4	土師器	製塩土器	10.7	—	—	6.5	口～体 内外一指頭に成形の後ナデ	1 mm程度の砂粒が目立つ	やや良	明赤褐色
88	岡野原4区	S B 4	土師器	製塩土器	12.2	—	—	12.5	口～体 内一指頭による成形痕、棒状の工具によるナデ、目の細かい布目、外一指頭に成形の後ナデ	1～2 mm程度の砂粒が目立つ	やや良	明赤褐色
89	岡野原4区	S B 4	土師器	製塩土器	11.6	—	—	12.9	口～体 内一目の細かい布目、ヘラ状工具の押圧痕、外一指頭に成形の後ナデ	1 mm程度の砂粒が目立つ	やや良	明赤褐色
90	岡野原4区	S B 4	土師器	製塩土器	(12.0)	—	—	8.2	口～体 内一指頭による成形痕、目の細かい布目、外一指頭に成形の後ナデ	0.5 mm程度の砂粒が目立つ	やや良	赤褐色
91	岡野原4区	S B 4	土師器	杯蓋？ 口縁	—	—	—	2.3	内外一回転ナデ	精緻	良好	赤褐色
92	岡野原4区	S B 4	須恵器	高杯脚器	—	—	(9.2)	4.2	内外一回転ナデ、透の数は不明	精緻	良好	灰白色
93	岡野原4区	S B 4	須恵器	皿	(12.0)	—	(7.0)	2.0	内外一回転ナデ、高台は貼付け	精緻	良好	青灰色
94	岡野原4区	S B 6	須恵器	短頸壺	(8.0) 頸部	(15.8)	—	8.4	頸～胴下位 内一回転ナデ、外一カギ目状の条痕	1 mm程度の砂粒が目立つ	良好	外 淡褐色 内 黒褐色
95	岡野原4区	S B 4	須恵器	壺口縁	(16.0)	—	—	4.8	内外一回転ナデ	精緻	良好	灰色

第9表 出土土器観察表9

( ) の数値は復元値

報告番号	出土地点	遺構番号	種別	器種	口径	最大径 (肩・体部)	底径 幅径	器高・ 残存高	手法の特徴	胎土	焼成	色調
96	岡野原4区	S B 6	須恵器	杯身	10.6	—	11.5 受部	4.9	口 内外一回転ナデ、底部 内一回転ナデ、外一ヘラ削り(時計廻り)	精緻	良好	淡褐色
97	岡野原4区	S B 6	須恵器	杯身	(10.2)	—	(11.8) 受部	3.1	口～体 内外一回転ナデ、底 内一回転ナデ、外一ヘラ削り(時計廻り)	精緻	良好	淡赤褐色
98	岡野原4区	S B 6	土師器	甕	16.6	(11.5)	—	14.9	口 内外一ヨコナデ、肩～胴部下位内一ヘラ削りの後、指頭による調整ナデ、外一目の荒いハケ目、二次焼成を受けている。	0.5～1mm程度の砂粒が目立つ	良好	外 黒褐色 内 淡褐色
99	岡野原4区	S B 6	土師器	甕	(15.9)	—	—	4.9	口 内外一ナデ、肩 内一ヘラ削り？、外一ハケ目、二次焼成を受ける。	0.5～2mm程度の砂粒が目立つ	良好	赤黒～赤褐色
100	岡野原4区	調査区	土師器	高杯	—	—	—	5.2	杯底 内一ヘラ磨き、外一ヘラ磨き、杯部は差し込みによる接合。柱 内一ヘラ削り、外一ヘラによるナデ	精緻	良好	淡赤褐色
101	岡野原4区	調査区	土師器	高杯	—	—	—	3.7	体 内一ヘラ磨き、外一ヘラ磨き、	1mm程度の砂粒が目立つ	やや良	淡茶褐色 断 黑褐色
105	岡野原5区	調査区	弥生土器	甕	(13.2)	—	—	5.7	口 内一横ナデ、端一3条の凹線文、頸 内一ナデ、外一ヘラ磨き	精緻	やや良	淡褐色～灰白色
106	岡野原5区	調査区	土師器	甕	(18.8)	—	—	4.9	口 内外一横ナデ、肩 内一ヘラ削り、外一不明	3mm程度の砂粒が目立つ	やや良	淡赤褐色
107	岡野原5区	調査区	弥生土器	口縁	—	—	—	3.0	口 内外一ナデ、貼付けによる突帯	1mm程度の砂粒が目立つ	やや良	淡茶褐色 断 黑褐色
108	岡野原5区	調査区	弥生土器	底部	—	—	(12.4)	3.0	体 外一ヘラ磨き、底 内一ナデ、外一ナデ	精緻	やや良	淡赤褐色 断 黑色
109	岡野原5区	調査区	弥生土器	底部	—	—	(8.2)	6.6	体 内一ヘラ削り、外一板状工具によるナデ、底 内一ヘラ削り、外一板状工具によるナデ	精緻	良好	淡褐色～淡赤褐色 断 黑色

第10表 出土石製品・鉄製品観察表

報告番号	出土地点	遺構番号	種別	法量(最大値/cm, g)(現存長・幅)				材質
				長さ	幅	厚・高さ	重量g	
54	岡野原4区	調査内	砥石	17.3	7.9	4.8	1185.00	脈石英
62	岡野原4区	調査区	砥石	3.5	1.9	2.1	22.37	流紋岩
77	岡野原4区	S B 1 - 2	砥石	4.6	3.0	2.6	44.80	珪長岩?
78	岡野原4区	S B 1 - 2	敲石	8.7	6.6	6.0	485.17	弱溶結晶凝灰岩
79	岡野原4区	S B 1 - 2	磨石	9.5	6.2	4.9	528.85	細粒閃綠岩
80	岡野原4区	S B 1 - 2	台石	31.0	22.8	6.9	8465.00	細粒黒雲母花崗岩
102	岡野原4区	調査区	台石	19.5	14.6	8.3	3425.00	細粒黒雲母花崗岩
104	岡野原4区	調査区	石鐵	1.7	(1.4)	0.3	0.57	安山岩
82	岡野原4区	S B 1 - 2	鉄鐵	6.5	刃部2.7 茎部0.4	刃部0.2 茎部0.4	15.09	鐵身が鏽により膨らむ
103	岡野原4区	調査区	鉄鐵	6.5	刃部3.0 茎部0.6	刃部0.3 茎部0.6	12.91	

## VI まとめ

小迫遺跡と岡野原遺跡は、田万里川を南に臨む北側山麓から派生する小丘陵の緩やかな斜面上に立地している。小迫遺跡の発掘調査では、簡易な作業場状の遺構と柱穴群を確認した。岡野原遺跡では主に2区で土坑2基、4区で竪穴住居跡6軒、土坑4基、溝4条を確認した。

ここでは、調査によって得られた成果について整理を行いまとめとしたい。

### 出土した遺構の時期について

小迫遺跡のSB1は、竪穴住居跡ではなく北側の柱穴の直線的な並びから、棟に垂木を掛ける程度の作業場的な建物跡と考えられる。建物内の柱穴1基(P2)から土師質土器皿(3)が出土している。小迫遺跡の遺構内からは、他に調査区北側の柱穴(P1)から土師質土器杯(4・5)が出土している。これらの特徴は底部の切り離しが回転糸切りによる。体部が直線的に外反して、口縁端部となっている。内外面の調整は強い横ナデにより器表面に稜がみられることがある。5の杯は古いタイプと考えられる。回転糸切りは古代末から回転ヘラ切りから、回転糸切りに移行しているが備後では吉備沿岸部の影響を受け、回転ヘラ切りによる切り離しが中世を通じて行われていることが指摘<sup>(1)</sup>されていることから、安芸地域で竹原市域では調査が無いため、東広島市に類例を求めるところ、鏡西谷遺跡C地区1号掘立柱建物跡<sup>(2)</sup>から出土しているものに似ている。ここでは、共伴した青白磁から13世紀初頭～前葉に位置付けられている。西条盆地では回転糸切りによる底部の切り離しは、12世紀代に入ってから一般的に普及し始めている<sup>(3)</sup>と考えられているが、形態的に12世紀には遡らないと思われる。ここでは、小迫遺跡の時期の上限を13世紀代前半頃としておきたい。

岡野原遺跡は調査区が1区～5区の5地点に分かれた調査区の調査を行った。近世以前の遺構が確認できたのは2区・4区でのみで、3区は近世の溝を確認できた。調査前の地形図(第6図)から、水田の形状が谷状の地形に制約された形態で遺跡内の中央部に南側に向かって谷が存在していることが想定された。1区の南東部で谷頭を確認し、4区西側の調査区で東から西側への傾斜変換点を確認した。このことから谷は南側ではなく南東方向に向かって形成していると考えられる。また、3区では調査区の中央で別な小谷を確認したことから、大きな谷と小谷が微細に入り込んだ地形が存在していることが想定できる。

岡野原2区のSK1から弥生時代後期を中心とした土器が出土している。土器の内26・27は中期に遡る可能性がある。土器の形態や施文法・製作技法・色調は隣接する東広島市域(狭義の西条盆地)内の同時期<sup>(4)</sup>の土器と同一と思われる。また、新庄町の横大道遺跡<sup>(5)</sup>や椋原遺跡<sup>(6)</sup>からも同様の弥生時代後期の土器が出土していることからも、賀茂川上流域(田万里川流域)は西条盆地と同一の文化圏であったと考えられる。

岡野原4区は竪穴住居跡の内、SB1・2とSB4・6から遺物が出土している。SB1・2については、それぞれに伴う状況で確認できた遺物は、SB1の床面中央に位置するP3内から

出土した土師器壺（63）とSB2の北側の床面上から出土した土師器甕（66）がある。63は口縁部が外反し、直行壺に近い形態で胴部が球形、66は二重口縁で胴部が球形である。このような形態は、西条盆地ではみられず、備後北部の古墳時代前期の集落から出土している形態に近似している。前期の中の詳細な時期は不明であるが、残っていることから大まかに前半頃と思われる。SB4から出土した製塩土器は形態が安芸国分寺<sup>(7)</sup>から出土している製塩土器とほぼ同一で、古瀬氏の編年<sup>(8)</sup>によるとV類の範疇に収まり、時期は奈良時代～平安時代としている。安芸国分寺の製塩土器はSK451内から出土し、共伴した紀年木簡に「天平勝寶二年」とあることから750年には廃棄されている。このことから、SB4の製塩土器も奈良時代の後半に収まると考えられる。SB6からは造り付けのカマド焚口内から須恵器杯身（96）・土師器甕（98）が出土している。杯身の口径が10.6cm、器高が4.9cmと小形で古い様相を示しているが、口縁端部が丸く終わるなど新しい要素がみられることから、TK15型式<sup>(9)</sup>頃の6世紀前半に収まると考えられる。広島県内でこれまで確認された造り付けのカマドは6世紀後半以降からのものが多く、5世紀末に溯る可能性が指摘されているものが山県郡北広島町・岡の段C地点遺跡<sup>(10)</sup>のSB18・20、三次市海渡町・帰海寺谷遺跡<sup>(11)</sup>のSB4で確認されている。いずれも県北部域での調査例で、県南部地域では最も古い調査例となった。

#### 遺跡の変遷について

今回の調査で確認した遺構を年代順に整理すると、最も古い遺物は、調査区内からの出土であるが、小迫遺跡の縄文後期の磨消縄文土器片である。田万里町周辺では、縄文時代の遺跡は田万里川の上流域にあたる風呂が迫遺跡<sup>(12)</sup>があり、後期とされる石鎚と石刃が出土しているのみで、今回の調査において細片ではあるが貴重な資料を提供し、本遺跡周辺でも縄文時代の遺跡が存在している可能性が考えられる。次いで、弥生時代後期の土器が出土した岡野原遺跡2区の土坑（SK1）、貯蔵穴（SK2）。岡野原遺跡4区は古墳時代前期（4世紀代）のSB1・2、古墳時代後期前半（6世紀前半）のSB6、奈良時代後半（8世紀後半）のSB4である。遺物の出土していないSB3・5の時期は重複関係もなく不明であるが、覆土中の遺物は、土師器片や須恵器片で、後世の遺物がないことから古墳時代後期（6世紀後半）までの範疇に収まると考えられる。小迫遺跡のSB1や柱穴群は鎌倉時代の前半（13世紀代）である。

これらの遺構は、岡野原遺跡内にある谷を避けた小丘陵上・斜面に立地しており、時期により尾根の利用状況に違いがあったと思われる。

田万里川流域の遺跡や古墳のほとんどは、田万里川北側の丘陵上・丘陵裾に立地している。小迫遺跡と岡野原遺跡が位置している周辺は、最も遺跡の密度<sup>(13)</sup>が高い地域である。岡野原遺跡の東側の小河川に面した丘陵上には、第Ⅱ章で述べたように6世紀代とする箱式石棺を埋葬施設としている鏡田古墳群、6世紀後半頃と思われる横穴式石室の鏡田火釜古墳・觀音古墳などの古墳が立地している。丘陵裾の耕作地にあたる背戸峯遺跡からは弥生時代中期頃とされる太形蛤刃石斧や土師器片・高台の付く須恵器杯身片などが出土している。岡野原遺跡東側の罐子谷からは、

6世紀後半頃の須恵器高杯・甌が採集されている。

6世紀代とする鏡田古墳群の時期が岡野原4区SB6と近く、同一時期の可能性もあることから集落と埋葬地との関連が考えられるが、少なくとも岡野原遺跡と重なる時期の古墳が集中していることから、この地域において何らかの画期があったと思われる。

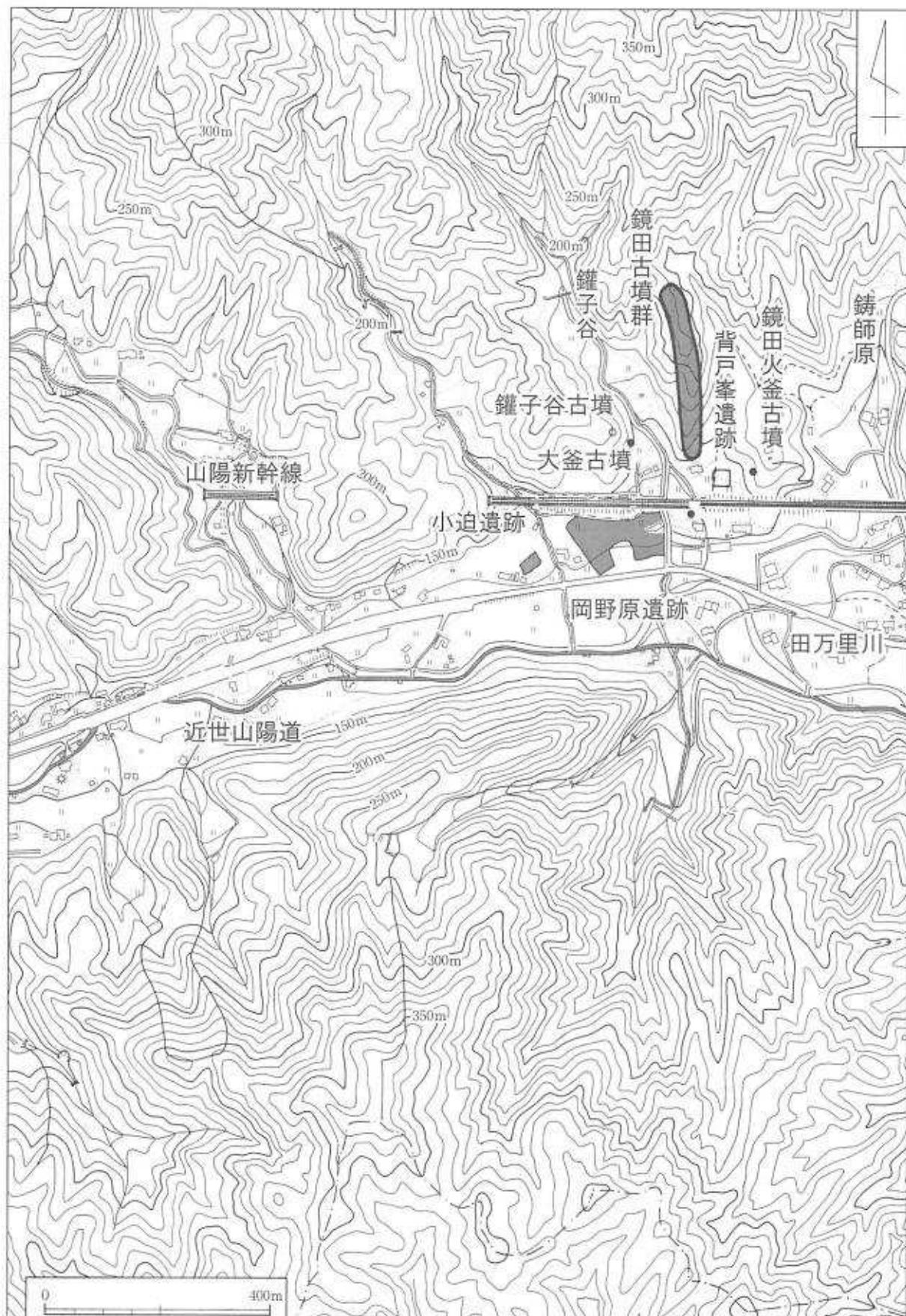
また、鏡田古墳群の立地する丘陵の東側は鉄師原の地名があり、岡野原遺跡の立地する谷「罐子谷」という地名と併せてこの辺りに鉄造遺跡が存在している可能性が考えられる。

### 製塩土器について

岡野原遺跡4区SB4から出土した奈良時代の製塩土器は、官衙・製塩遺跡（生産地）・寺院などからの出土例が多いことで知られている。近辺では東広島市安芸国分寺跡や福山市や竹原市周辺の島嶼部（表11）で出土している。4区SB4内から出土したことは、遺跡の性格を考える上で注目される。製塩土器の出土状況は破碎された土器片が一個所に集められた状態であった。共伴した甌は甌が口縁部を下にしていることから、破棄というより、何らかの儀礼的な行為を行った可能性も考えられる。官衙・寺院以外の遺跡から製塩土器が出土している例として、庄原市の馬ヶ段遺跡<sup>(14)</sup>がある。馬ヶ段遺跡は標高約290m、周囲の水田からの高低差が30m以上の丘陵上に立地している古墳時代後期（6世紀後半頃）の集落跡である。豊穴住居跡の覆土から岡野原遺跡と同タイプ（内面に布目が残る）の製塩土器片が2点出土している。遺跡内には住居跡より新しい7世紀代の横穴墓2基、また、隣接する皇塩遺跡<sup>(15)</sup>から6世紀末から7世紀前半以降とする横口付炭窯が2基確認されている。製塩土器と横穴墓・炭窯の具体的な関連性は見いだせないが、周辺に鉄生産遺跡が存在していることが窺える。このような状況から、塩の使用法の一つとして鉄生産に<sup>(16)</sup>に使用された可能性も考えられる。

第11表 製塩土器出土遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	内容	文献
1	榎迫遺跡	豊田郡大崎上島町	包含地	1
2	牛ヶ首遺跡	豊田郡大崎上島町	包含地	1
3	布浦遺跡	豊田郡大崎上島町	包含地	1
4	下岡田遺跡	安芸郡府中町	官衙	1
5	宇治島北の浜遺跡	福山市走島町	包含地 祭祀遺跡	2
6	沖浦遺跡	呉市蒲刈町	製塩遺跡	3
7	大川浦遺跡	廿日市市宮島町	包含地	4
8	安芸国分寺跡	東広島町西条町	寺院	5
9	馬ヶ段遺跡	庄原市水越町	集落	6
10	岡野原遺跡	竹原市田万里町	集落	7



第29図 小迫・岡野原遺跡周辺遺跡分布図 (1 : 10,000)

岡野原遺跡の場合、塩を何に使用したのか。何故、岡野原遺跡で出土したのか。岡野原遺跡でなければならなかったのかは不明である。消費地としての性格を考えた場合、

- ・本地域でも時期が不明の鉄滓が採集<sup>(17)</sup>されていることから、鉄生産遺跡との関わり。
- ・田万里川流域が古代山陽道の駅路<sup>(18)</sup>候補の一つであることから、古代山陽道との関わり。等が想定できるが現状では不明である。

広島県では官衙・寺院以外から製塩土器が出土している例は少ないが、遺跡の性格を考える上で、東北・若狭地方<sup>(19)</sup>では鉄生産遺跡から出土していることから、製鉄・鉄器生産地で出土する可能性は高い。今後の類例遺跡の調査をまって検討したい。

古代山陽地方の塩の生産地は周防国が知られている。山陽地方の各国は延喜式に「調塩」の記載がみられ、山陽6か国では、備後国・播磨国以外の国から「調塩」と記した木簡が藤原宮・平城京等から出土<sup>(20)</sup>している。安芸国は安芸郡から調塩三斗<sup>(21)</sup>と記された木簡が藤原宮から出土している。当地域は古代沼田郡<sup>(22)</sup>とされるが、古代安芸郡と併せて瀬戸内海沿岸部・島嶼部での包蔵地の存在をふまえると、塩の生産が行われていた可能性は高いと思われる。

#### 註

- (1) 鈴木康之「瀬戸内の中世土器－吉備地方の土師質土器を中心に－」『考古学から見た地域文化－瀬戸内の歴史復元』脇坂光彦 小都隆編 1999年 溪水社
- (2) 広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書 I－農場地区の調査』2003年  
藤野次史「広島大学東広島キャンパスの中世遺跡」『シンポジウム 安芸地方の中世を探る～中世前期を中心にして～』2012年 広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門 東広島市教育委員会
- (3) 吉野建志「西条盆地の中世遺跡－道照遺跡・溝口4号遺跡を中心にして－」『シンポジウム 安芸地方の中世を探る～中世前期を中心にして～』2012年 広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門 東広島市教育委員会
- (4) 妹尾周三「4安芸地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』正岡睦夫・松本岩雄編 木耳社 1992年
- (5) 藤田 等・本村豪章『第1章竹原周辺の考古学的考察』『竹原市史』第2巻 論説編 1963年
- (6) 註5と同じ
- (7) 財団法人東広島市教育文化振興事業団『西条町吉行 史跡安芸国分寺跡発掘報告書IV－第12次・第13次調査の記録』2002年
- (8) 古瀬清秀「II－4広島県」『日本土器製塩研究』近藤義郎編 青木書店1994年 250頁図2「広島県製塩土器の型式分類と編年表にV類と並行した須恵器の型式としてTK7型式が併記してある。
- (9) 須恵器の年代については、田辺昭三『須恵器大成』角川書店を使用し、大阪府近つ飛鳥資料館『年代のものさし－陶邑の須恵器』を参考にした。
- (10) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」

1994年

- (11) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「1 帰海寺谷遺跡」『県営ほ場整備事業（川西東部・南部地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』1997年
- (12) 註5と同じ
- (13) 広島県教育委員会『広島県遺跡地図VI』（三原市・尾道市・因島市・竹原市・豊田郡）1999年3月  
広島県教育委員会ホームページ「広島県の文化財・広島県遺跡地図」ここで紹介している遺跡は、  
註5による。
- (14) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告  
(27) 馬ヶ段遺跡・皇塩遺跡』2013年
- (15) 註14と同じ
- (16) 岩本芳幸「鉄が語るムラ」『平成22年度ひろしまの遺跡を語る 古墳時代の暮らしと心 記録集』  
2011年 財団法人広島県教育事業団  
製鉄関連遺跡と横穴墓の分布する地域が重なっていることから、鉄・鉄器生産に関わった人々  
が横穴墓に葬られた可能性を指摘している。また、県北部の古墳時代後期の鉄生産遺跡で製塩土  
器が出土している例が多いことから、馬ヶ段遺跡では、製鉄関連の遺構は確認されてはいないが、  
周辺に存在している可能性は高いと思われる。
- (17) 郷土資料室（旧田万里小学校）に田万里町出土の鉄滓として収蔵してある。
- (18) 高橋美久二「第5節 安芸・周防・長門の駅と駅路」『古代交通の考古地理』  
西別府元日「吉備の古代駅路を探る」『第7回安芸のまほろばフォーラム 古代山陽道を探る 資  
料集』東広島市教育委員会 財団法人東広島市教育文化振興事業団 2000年12月
- (19) 奈良文化財研究所『第16回古代官衙・集落研究会 塩の生産・流通と官衙・集落 研究報告資料』  
2012年  
東北地方を高橋透氏、若狭・北陸地方を松葉竜司氏が消費地の報告している。
- (20) 馬場 基「古代の塩の生産・流通めぐって」『第16回古代官衙・集落研究会 塩の生産・流通と官  
衙・集落 研究報告資料』奈良文化財研究所 2012年
- (21) 奈良文化財研究所 木簡データベース
- (22) 福尾猛市郎「倭名類聚抄の郡国名」『広島県史 原始・古代』広島県 1980年 233頁

表11の文献（表の資料は文献1の遺跡に新たな資料を追加した）

1. 古瀬清秀「大崎上島諸島における製塩遺跡についてー付編広島県製塩土器出土地名表及び主要遺跡概要ー」『内海文化研究紀要 第9号 大崎上島共同学術調査』広島大学文学部内海文化研究室 1981年（付表作成 藤野次史）
2. 川越哲志「福山市宇治島の考古資料（1）」『内海文化研究紀要 第11号』広島大学文学部内海文化研究室 1983年  
川越哲志・古瀬清秀・小池伸彦・小沢毅・入倉徳裕・鈴木康之・藤井孝章「福山市宇治島北の浜遺跡の第1次発掘調査」『内海文化研究紀要 第12号』広島大学文学部内海文化研究室 1984年
3. 古瀬清秀・鈴木康之・村田亜紀夫・北條芳隆・竹広文明「広島県蒲刈町・沖浦遺跡採取資料（2）」『内海文化研究紀要 第12号』広島大学文学部内海文化研究室 1984年
4. 古瀬清秀・加藤徹・竹広文明・脇山佳奈・荒木亮司「厳島における考古学踏査とその検討（2）－大川浦遺跡に関する考古学的検討－」『内海文化研究紀要 第12号』広島大学文学部内海文化研究室 1984年
5. 財団法人東広島市教育文化振興事業団「西条町吉行 史跡安芸国分寺跡発掘報告書IV－第12次・第13次調査の記録」2002年
6. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「西本6号遺跡」1997年 356頁第250図703は表土から出土している。401頁の観察表では土師質土器壺と報告されているが、口径が復元値で13.0cm、傾きは細片であることから、底部の径が細くなると思われることと、内面に布目が認められることから、製塩土器と考えられる。遺構も奈良時代の掘立柱建物跡や住居跡が確認されている。
7. 財団法人広島県教育事業団「中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（27）馬ヶ段遺跡・皇塩遺跡」2013年
8. 本書

a 完掘後遠景

北東から



b 完掘状況

東から



c 完掘状況全景

西から





a SB 1 土層  
東から

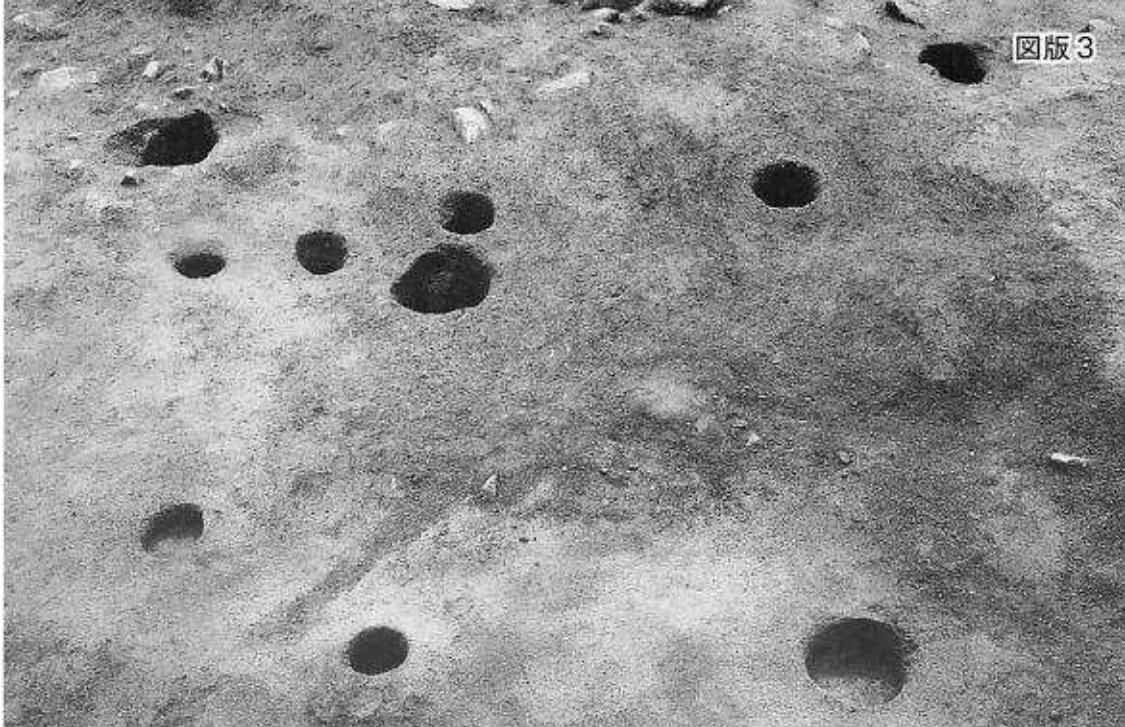


b SB 1 完掘状況  
北東から



c SB 1 内土坑  
完掘状況 西から

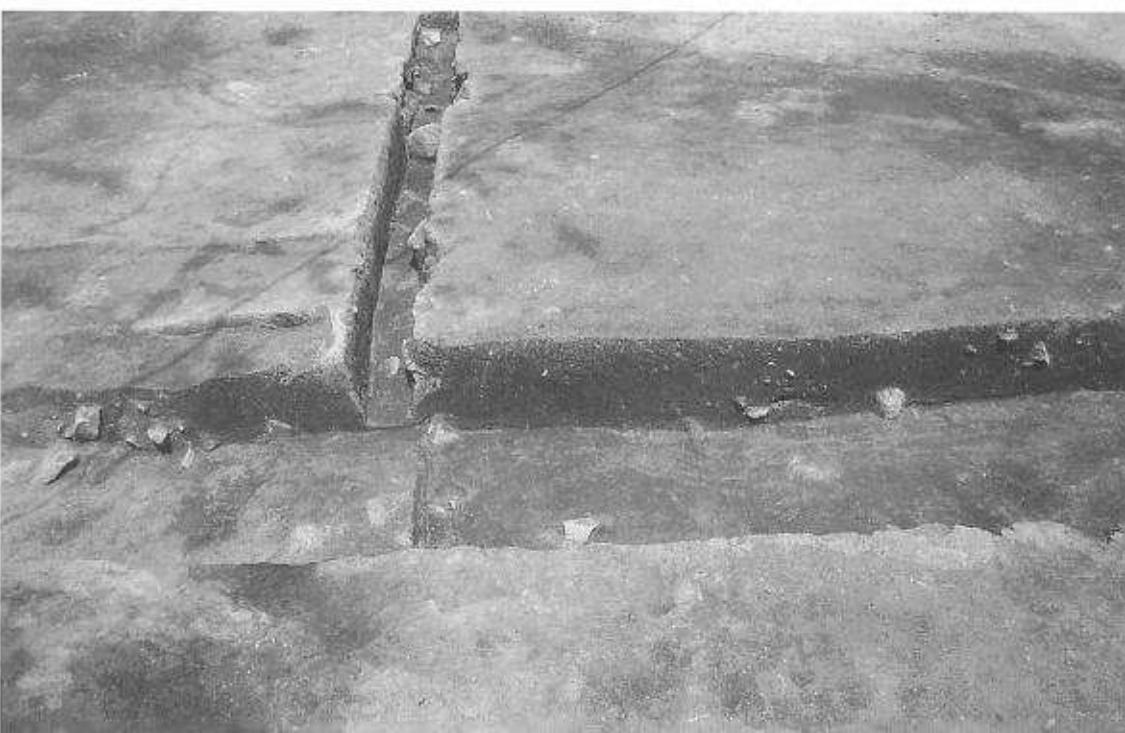
a SB 1周辺Pit群  
完掘状況 北東から



b P 1遺物出土状況  
南東から



c 試掘トレンチ土層  
南東から





a 1区調査前全景  
北西から



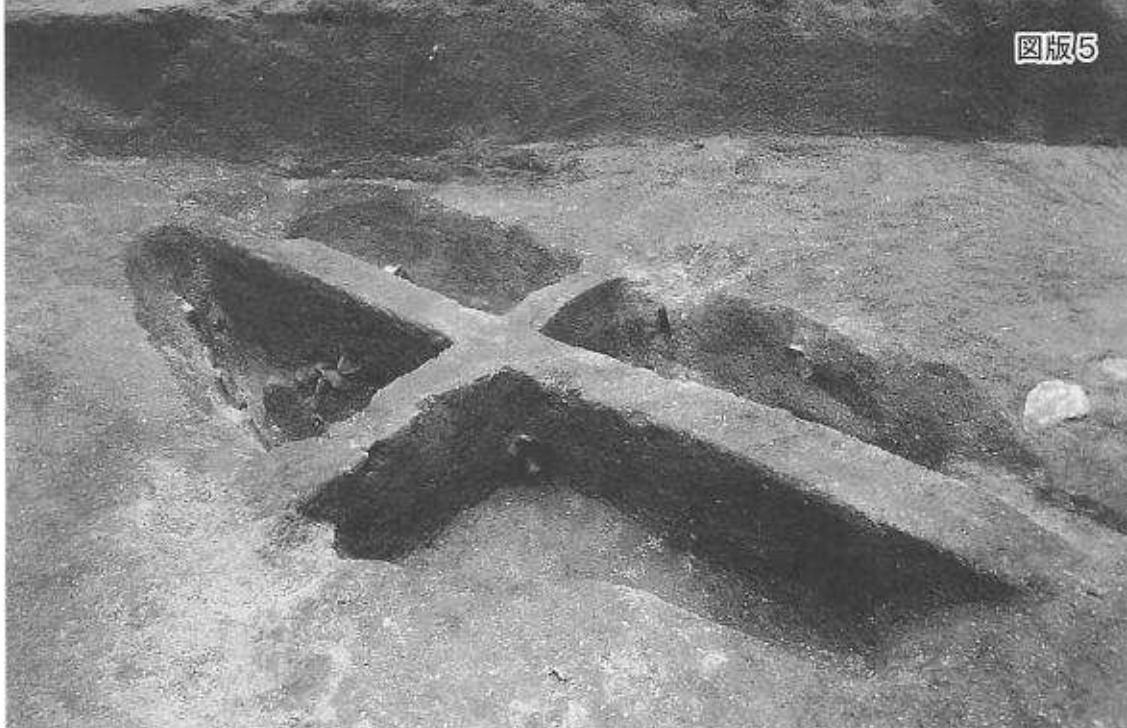
b 1区調査後全景  
北西から



c 1区調査後全景  
東から

a 2区SK1土層

南西から



b 2区SK1遺物出土状況

南東から



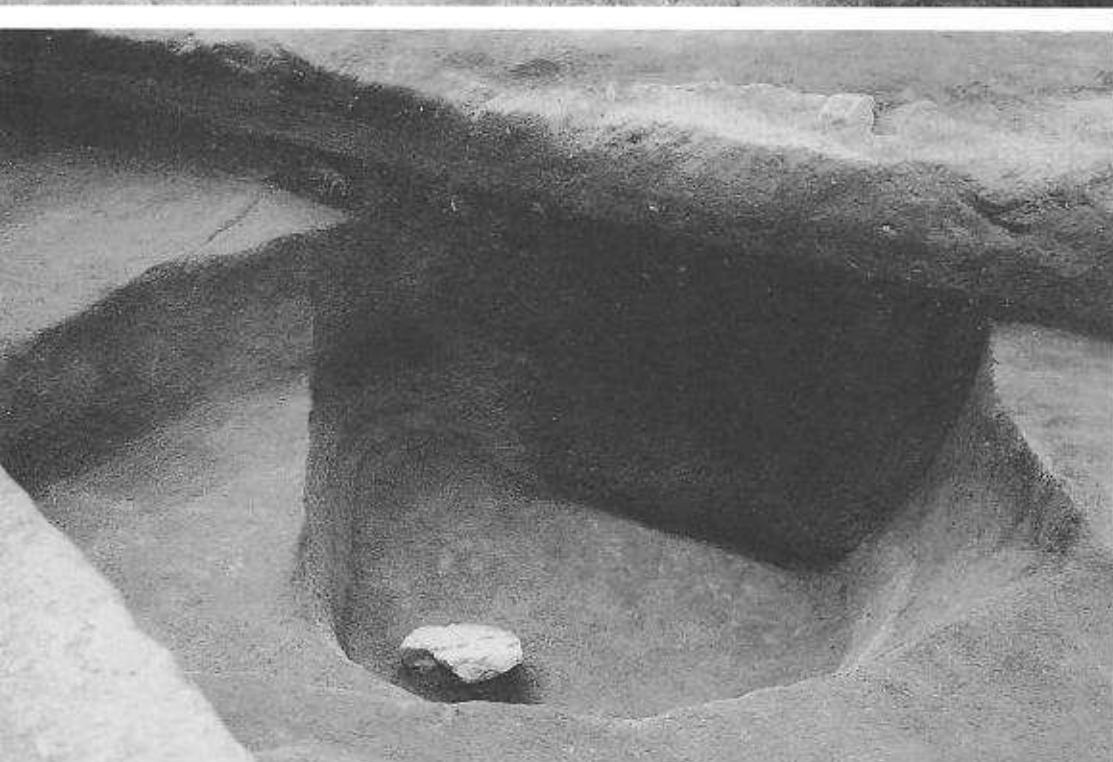
c 2区SK1完掘状況

南から





a 2区南壁土層  
北から



b 2区SK2土層  
北西から



c 2区完掘状況全景  
南西から

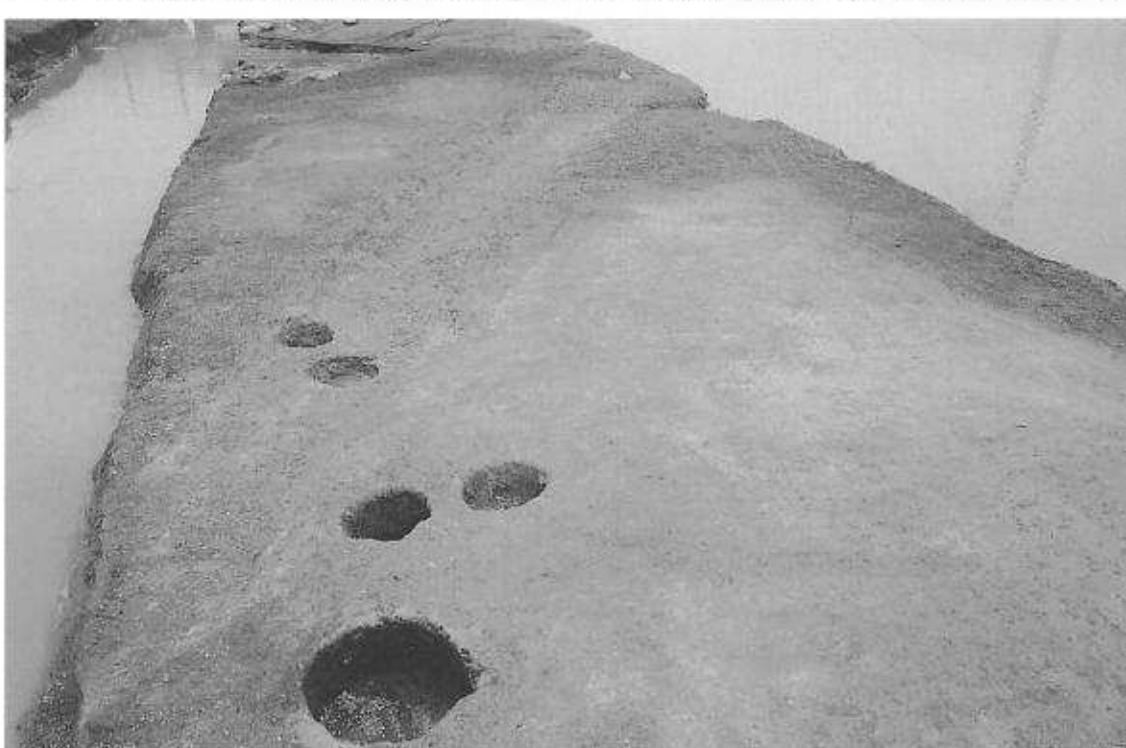
a 3区完掘状況全景

南西から



b 3区SD1完掘状況

西から



c 3区SX1土層

西から





a 3区SX1土槽  
南東から



b 3区SX1礫出土状況  
南西から



c 3区SX1完掘  
北西から





a 4区SB1・2遺物  
出土状況 西から



b 4区SB1・2-P7, 8  
土層 東から



c 4区SB1・2-P8  
遺物出土状況 南から

a 4区SB1・2完掘状況

西から



b 4区SB1・2内SX1

土層 北東から



c 4区SB1・2内SX1

完掘 北東から





a 4区SB1・2完掘状況  
西から



b 4区SB3土層  
南東から



c 4区SB3完掘状況  
西から

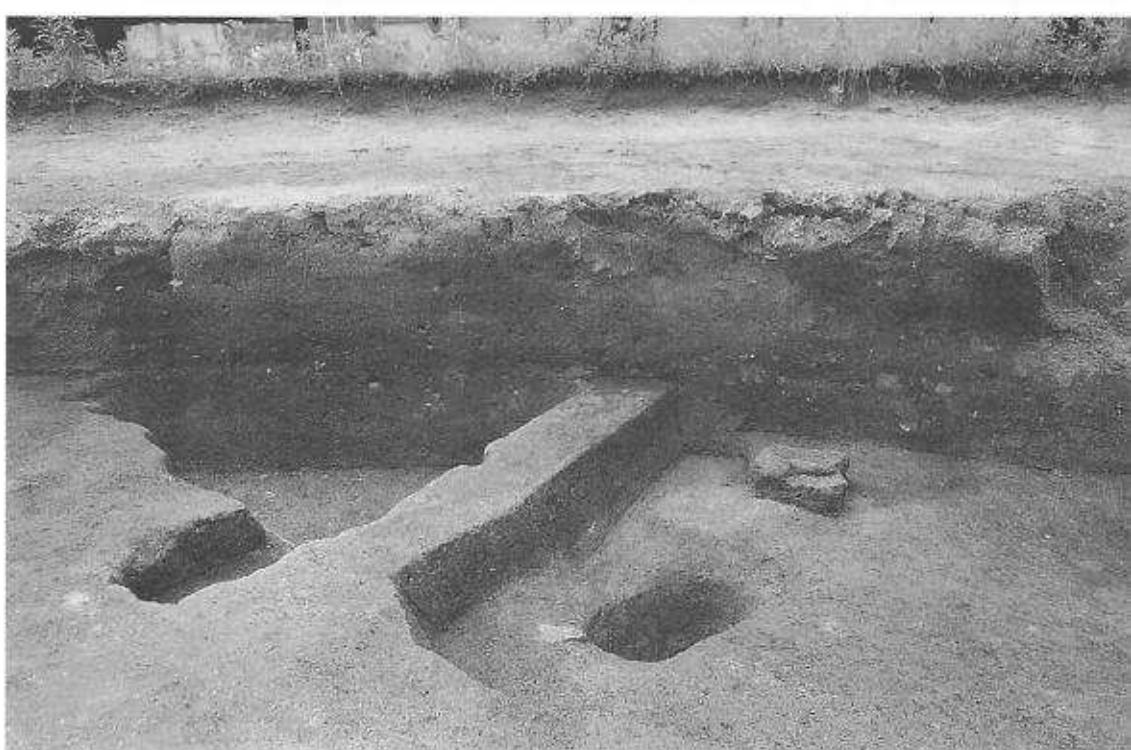
a 4区S-B4土層

東から



b 4区S-B4土層

北から



c 4区S-B4遺物出土状況

西から

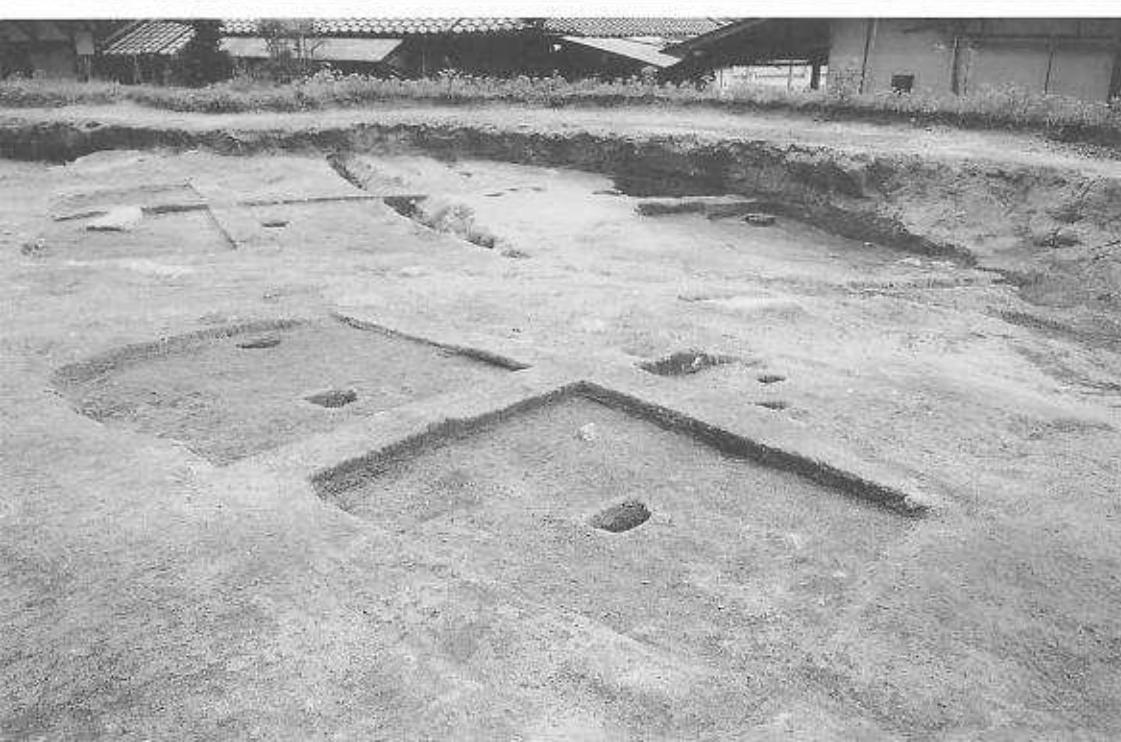




a 4区S B 4 北壁遺物  
出土状況 南から



b 4区S B 4 遺物出土状況  
北から



c 4区S B 5 土層  
北西から

a 4区SB5完掘状況

南から



b 4区SB6完掘状況

西から





a 4区SB6カマド  
横断面 南西から



b 4区SB6カマド  
縦断面 西から



c 4区SB6カマド  
完掘 南西から

a 4区SK1完掘状況

西から



b 4区SK2完掘状況

西から



c 4区SK3完掘状況

西から





a 4区SK4 集石検出状況  
西から



b 4区SB4 完掘状況  
西から



c 4区SD1~3 完掘状況  
西から

a 4区完掘状況

西から



b 4区完掘状況全景

東から



c 西側調査区北壁土層

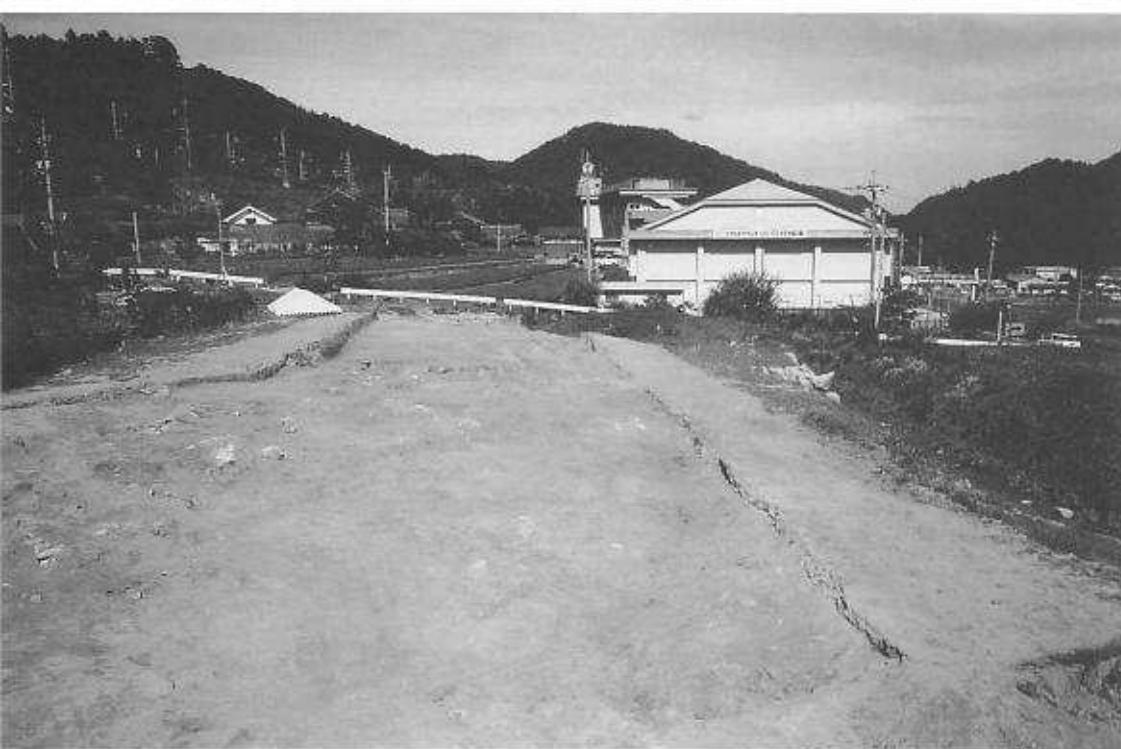
南から





a 西側調査区西壁土層

東から



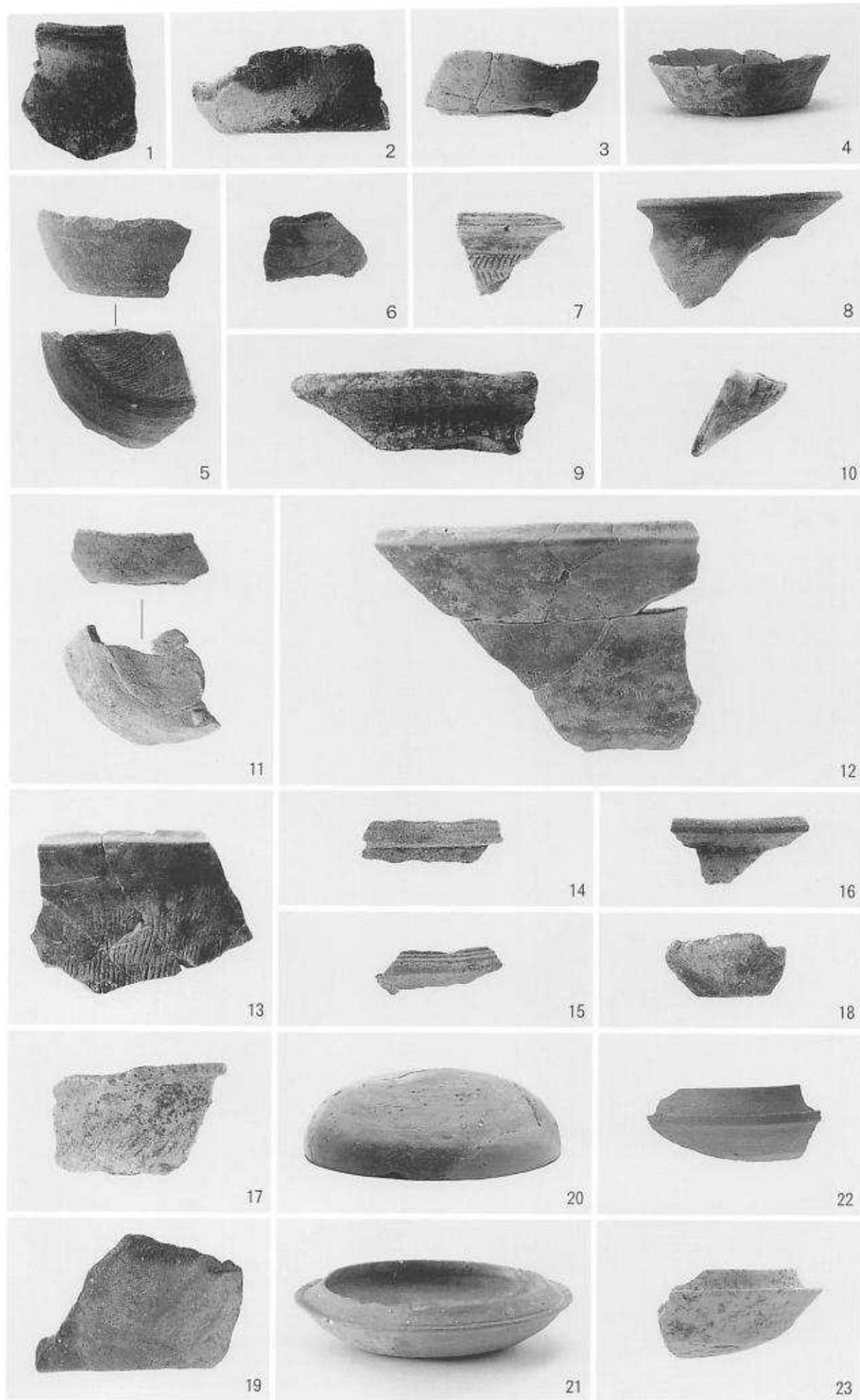
b 5区完掘状況全景

西から

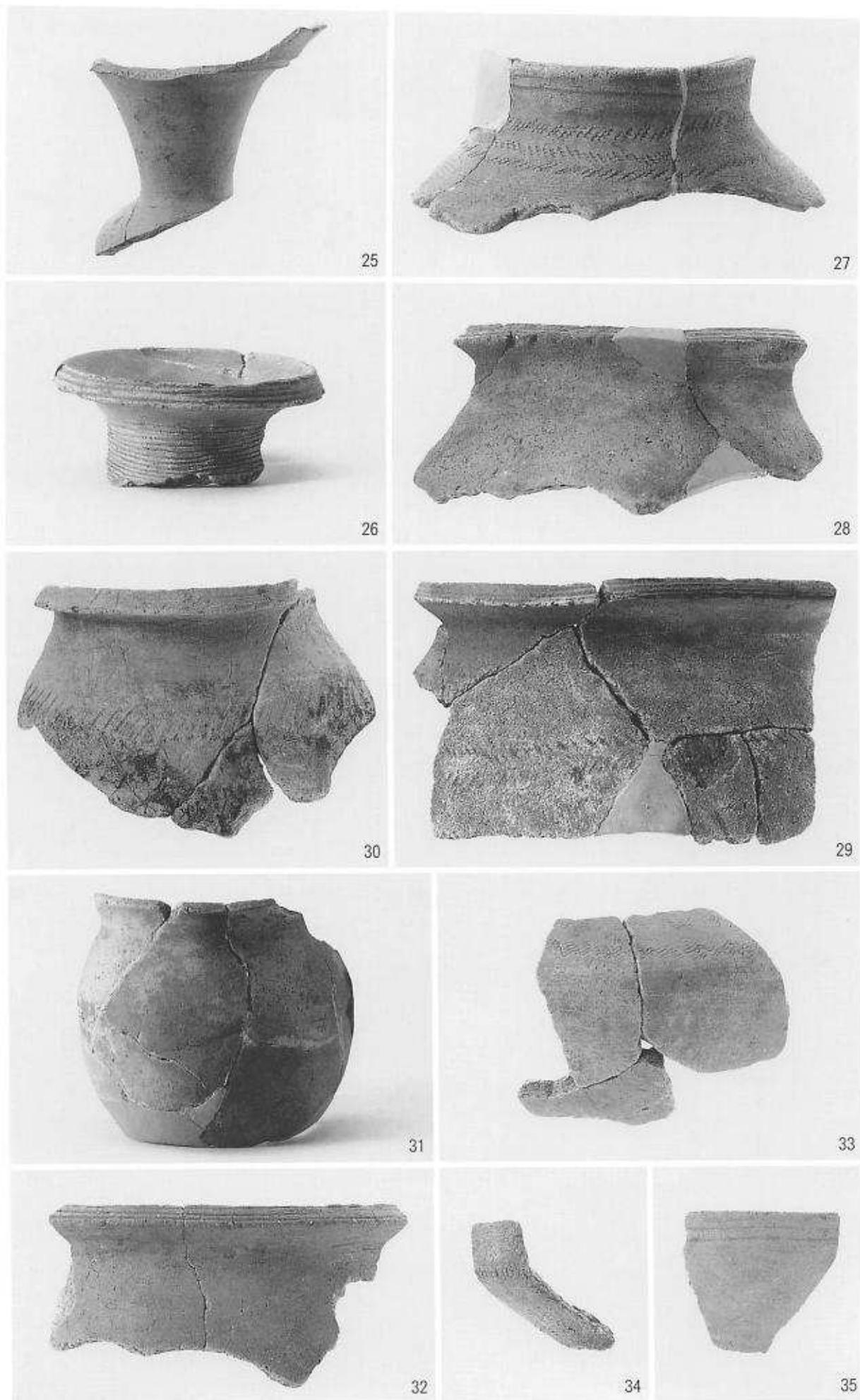


c 5区完掘状況全景

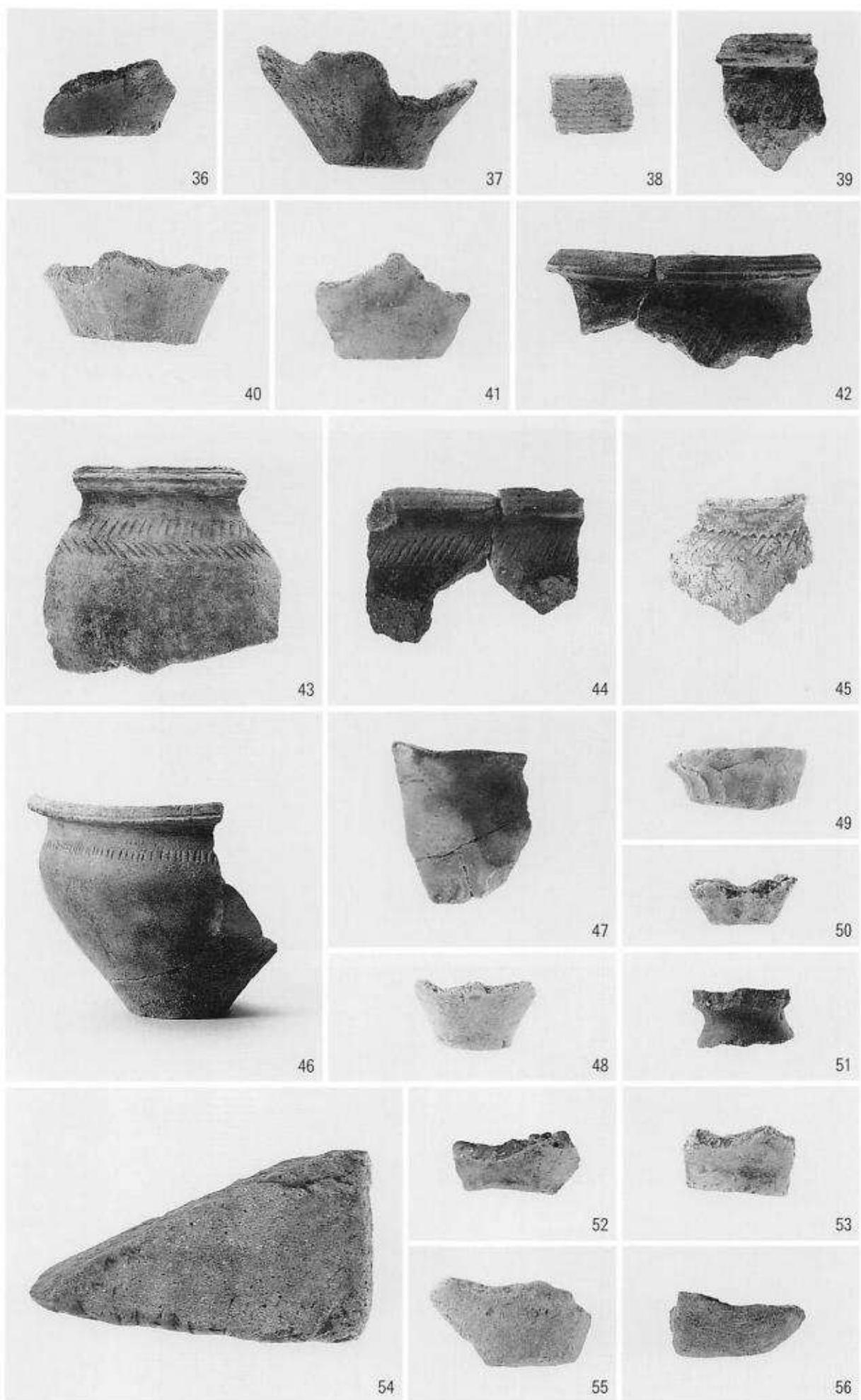
東から



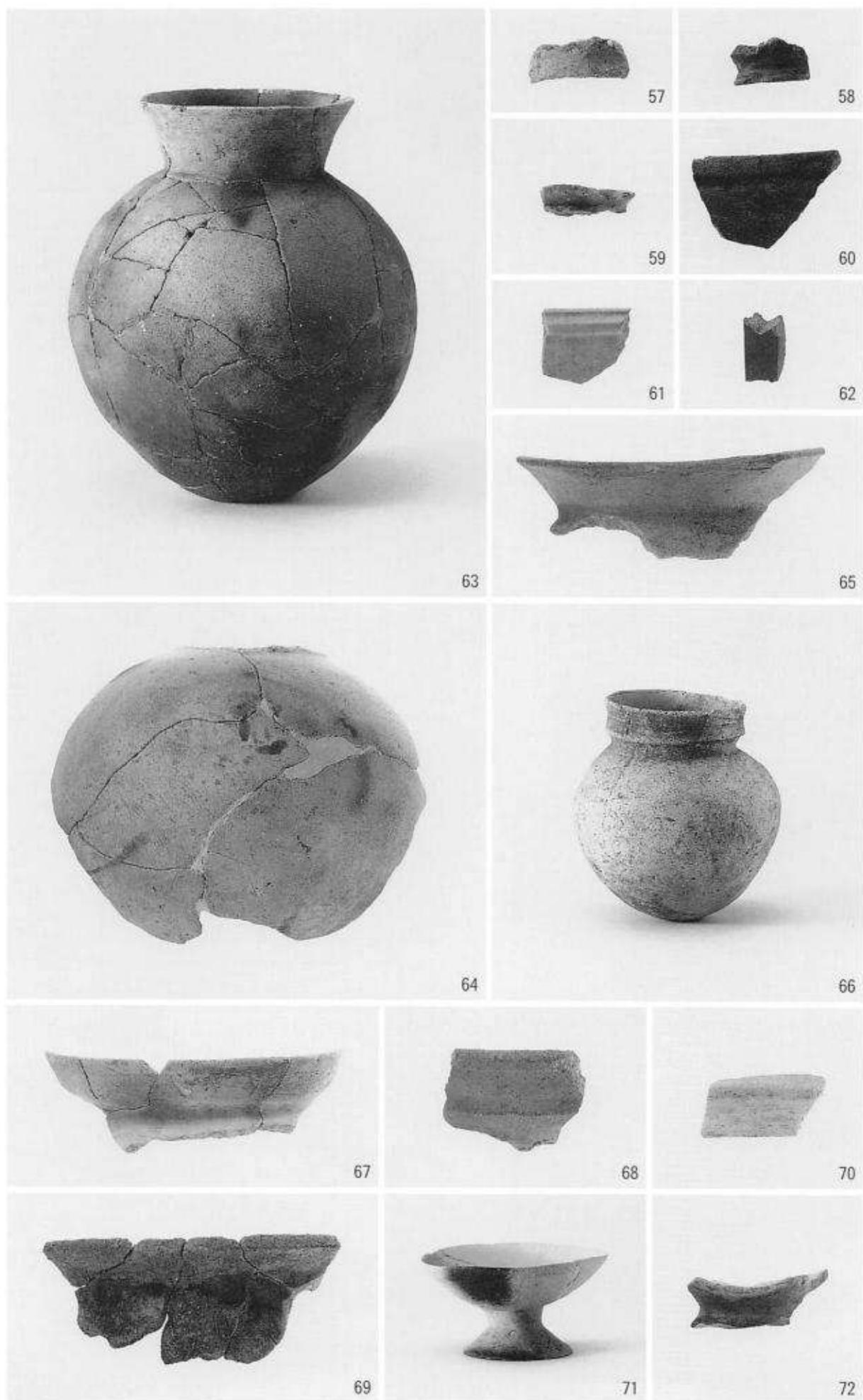
出土遺物 1

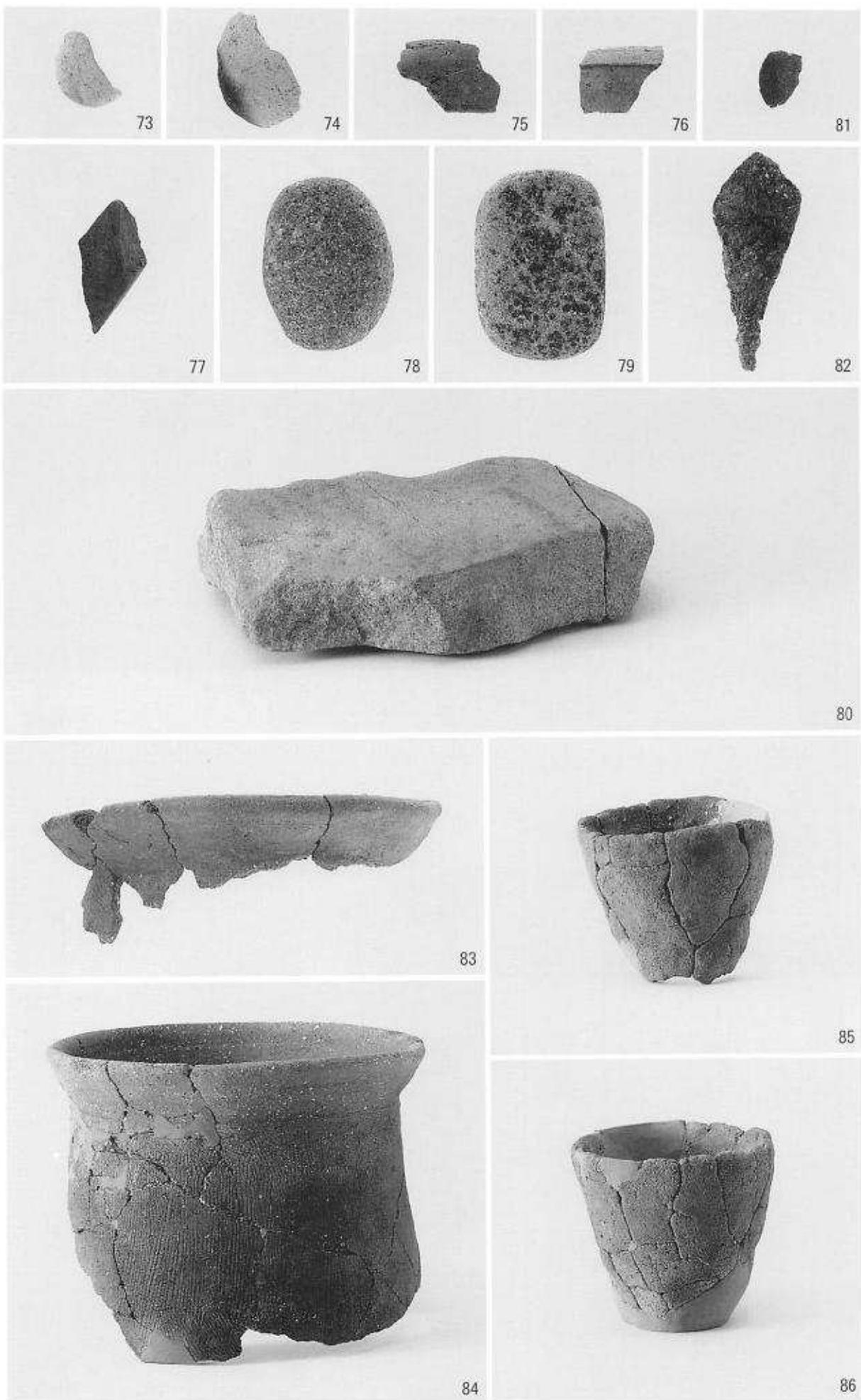


出土遺物 1

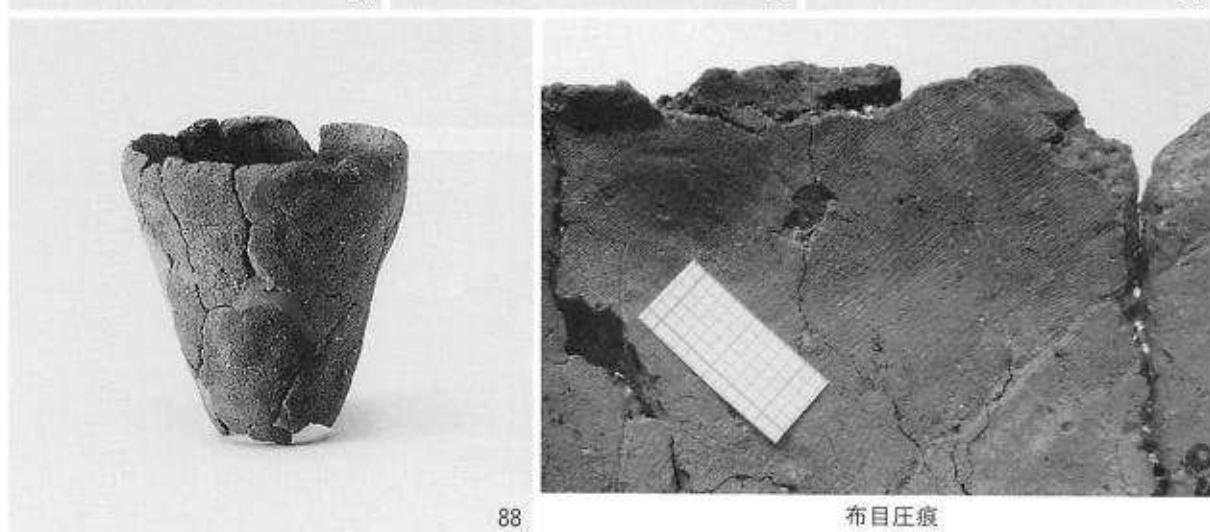
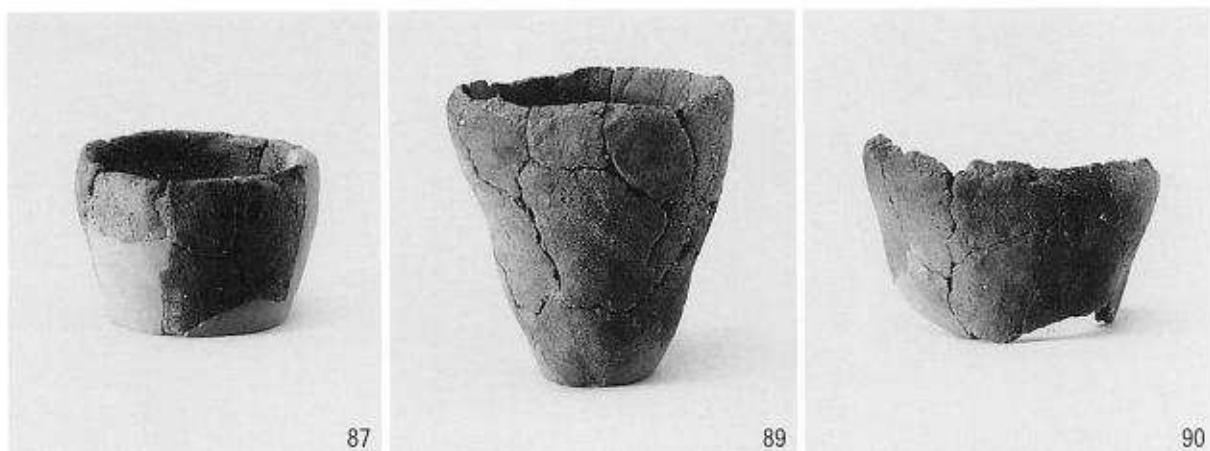


出土遺物 3



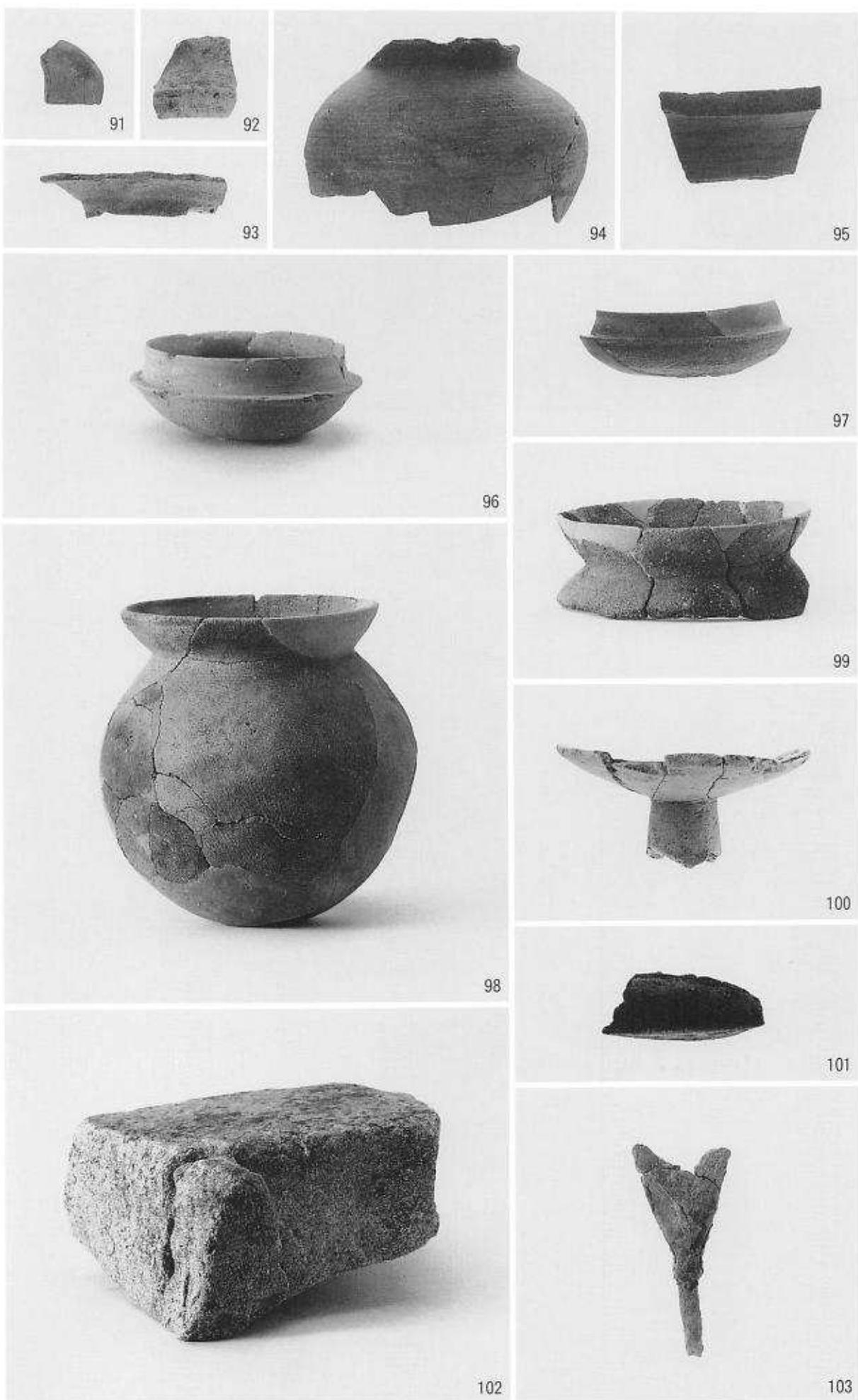


出土遺物 5

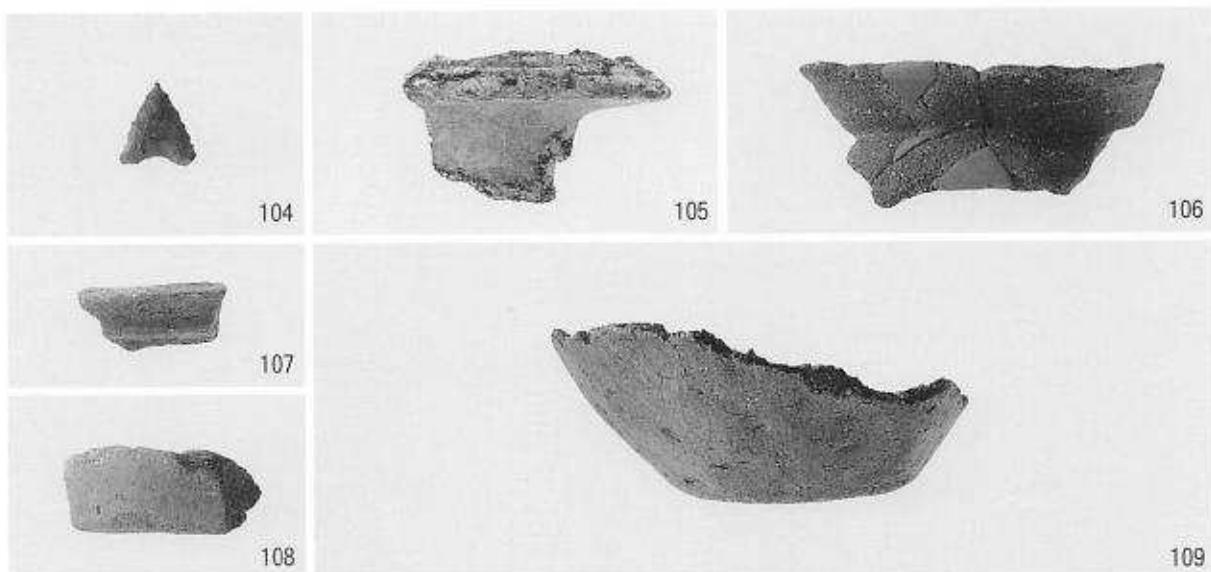


製塩土器 集合写真

出土遺物 6



出土遺物 7



出土遺物 8

## 報告書抄録

ふりがな	こさこいせき・おかのはらいせき
書名	小迫遺跡・岡野原遺跡
副書名	農山村漁村活性化プロジェクト支援交付金（基盤整備）事業上田万里地区に係る発掘調査報告書
シリーズ名	財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第57集
編著者名	山田繁樹
編集機関	財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
所在地	〒733-0036 広島県広島市西区観音新町四丁目8番49号 TEL 082-295-5751
発行年月日	西暦2013年3月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
小迫遺跡	広島県竹原市 田万里町 小迫	34203	103	34° 24' 30"	132° 50' 6"	20110411 ~ 20110722	400	記録保存 調査
岡野原遺跡	広島県竹原市 田万里町 岡野原	34203	102	34° 24' 32"	132° 50' 12"	20110411 ~ 20110722	2,640	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小迫遺跡	集落	鎌倉時代	柱穴群・建物跡	土師質土器・土鍋	磨消繩文土器
岡野原遺跡	集落	弥生時代後期 古墳時代前期・後期 奈良時代	竪穴住居跡 土坑・溝	弥生土器・須恵器・土師器・石鐵・台石・鐵鐵・石鐵	製塩土器 (奈良時代)

要約	小迫遺跡は、簡易な作業場的な建物跡と柱穴群を確認した。出土した土師質土器から、時期は13世紀代と考えられる。 岡野原遺跡は、2区から弥生時代後期の土坑、4区から古墳時代前期の竪穴住居跡2軒、後期の竪穴住居跡3軒、奈良時代の竪穴住居跡1軒を調査した。6世紀前半の竪穴住居跡の造り付けのカマドは、県南部では最も古い調査例である。奈良時代の竪穴住居跡から出土した製塩土器は、官衙関連遺跡・寺院・生産地で出土する例が多いが、内陸部の集落遺跡から出土する例は少なく、県内では3例目である。東北地方の例から鉄生産に関連していた可能性も考えられる。
----	--

財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書57集

**小迫遺跡・岡野原遺跡**

**農山村漁村活性化プロジェクト支援交付金（基盤整備）事業**

**上田万里地区に係る発掘調査報告書**

発行日 平成25（2013）年3月22日

編集 財団法人 広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室

〒733-0036 広島市西区観音新町4丁目8番49号

TEL (082) 295-5751 FAX (082) 291-3951

発行 財団法人 広島県教育事業団

印刷所 鰐城印刷株式会社